10－1　日記（明治三十一年一月～明治三十四年十月）

目録

	ページ数
公債株券表	二〇〇(a)—(b)
地所家屋年表	二三一…九
貯蓄金年表〔(朱書)〕三菱合資会社銀行部〔(朱書)〕	二四一…二
同　〔(朱書)〕逓信省為替貯金局〔(朱書)〕	二四三…六
資産年表	二四七…五〇
砂土原町地所家屋収支表	二五一…二
地種地価地租反別大字別表	
小作米金字別表　小作地名寄表	
〔(抹消)小作米金既未納訳立表〕	
〔(加筆・朱書)東京市内納税期長〕	
売米訳立年表	
〔(抹消)国許納税期表〕	
〔(抹消)〕	
租税協議費年表	
第二七銀行勘定仕訳月表	
国許及爰許納税期表	
国許所有地字別一筆限表	
九州鉄道新株払込表	
親族表	
収支年表	
小作米穀訳立年表	
国許収支年表	
国許東京収支総計表	
所得金及納税年表〔(朱書)書式三一…三枚目〕	

(1)

日月

二　一

明治三十一戊戌年

英照皇太后ノ御大喪中ニテ昨日ハ謁見式行ハセラレス世間一般ニモ年始ノ回礼ヤ年始状ノ遣取ヲ差控ヘタレハ至テ淋シキ正月ナリ例ニ依リ年始ノ旅行ヲ企テ藤田隆三郎伊藤悌次高橋捨六ノ三人ト同伴シテ昨年ノ曽遊地ナル藤枝停車場奥ナル青嶋村字塩湯个谷志太鉱泉場潮生館ニ赴カント新橋停車場ニ至リ見レハ藤田ノミ先ツ在リ高橋ハ必ラス同行セントノ旨ヲ爾モ今朝早ク申越シタレハ来ス筈ナキニ発車時刻マテ終ニ来ラス電話ニテ問合セタレハ発途時間ノ通知ヲ待居タル由ノ返答アリ行違ナレハ致方無ク次ノ列車ニテ十一時〔抹消〕〔頃〕〔加筆〕〔過〕出掛ルコト、シ其中高橋モ来合セテ出立シタルニ横浜ニテ来ヌト諦メシ伊藤ノ姿ヲ見付ケタリ彼ハ乗リ後タレハ追付カントテ此列車ニ乗リタルカ為メ偶マ同車スルコト、為レルモ奇ナリ此夜ハ静岡大東館ニ一泊シ翌朝伊藤ヲ案内シテ浅間神社ヲ遊覧シ軈テ藤枝ヘト出発ス潮生館ハ依然タレトモ客来ルニモ拘ハラス〔抹消〕〔善ク〕〔加筆〕〔早速〕出迎フ者モ無ク漸ク年増ノ女カ台所ノ隅ノ方ヨリ除ロリ〳〵出掛ケテ来テ案内シタル部屋ハ昨年ト同シナレモ粧飾万端昔ノ面影無ク暫クシテ洋服着タル壮年ノ男カ画幅ヲ持来リテ床ノ間ニ懸クル抔体裁総テ整ハス去年トテモ食料ハ豊カナラサリシカ此度ハ尚更ニテ事々物々失望ノ種ナラサルハ莫シ唯何者ノ伴ニテ何処ノ者ニヤ小紋縮緬ヲ三枚重ネタル眉目秀逸ノ婦人是見ヨカシニ吾等カ居タル二階座敷ノ前ニ当ル庭上ヲ彼地ラ此地ラト徘徊スルアリテ聯カ人気ヲ引立タルノミ彼ノ職業ハ問題トハ為ラネトモ居住ノ何処ナリヤニ付キ稍ヤ議論アリタル計リ余ハ無事ニ夜ヲ明カシタリ翌四日ハ迚モ居溜ラス静岡ニ戻リ大東館ニ昼食ヲ為シタルカ一昨夜ノ茶代少カリシカ此迄通フシタルコト無キ麁末ナル部屋ニ入レ〔抹消〕〔ラ〕〔加筆〕〔タ〕レハ藤田ハ争テカ堪ヘン直チニ今後再ヒ大東館ニ立寄ラストノ決心ヲ為シタリ漆器竹細工品抔仕入レテ奥津ノ東海楼ニ一泊ス〔抹消〕〔此〕〔加筆〕〔昨〕夏開業シタル新店ニテ建家器具共清潔ナル〔加筆〕〔上〕下女ハ部屋毎ニ受持定マリアリテ気心甚善〔抹消〕〔□〕タ〔加筆〕〔ク〕諸人初メヨリ此処ニ来ラサリシヲ憾ミタリ

(2)

六

昨年十二月廿三日付ヲ以テ報告シタル後福太郎ヨリ片馬ト端米命助ヨリ同上清蔵ヨリ端米政之助ヨリ一駄片馬ト端米収納米アリタル由右ニテ昨年度小作並貸米収支ハ左ノ通リト為ル〔〔朱書〕〔旧帳八二及ヒ後記五ノ〔抹消〕〔二〇〕〕〔加筆〕〔一五〕部〔加筆〕〔第一三頁〕参照〕〕

〔駄(朱書)片馬斗升合勺〕

二〇二・〇〇・一三一〇　平年ノ収納高
〔二四(朱書)・〇〇・三四八〇　異作ニ付キ引米〕
一七七・片馬(朱点)・一五三〇　差引残高
七・〇〇(朱点)・〇〇〇〇　三十年春貸出ノ仕付米返納
一・〇〇(朱点)・二〇〇〇　中野仁助畑返増石
片馬(朱点)・〇〇〇〇　藤村助次郎畑返増石
一八六・〇〇(朱点)・三五三〇　三十年度収納総高
〔一(抹消)〕〔三(朱書)・片馬・〇〇〇〇　鶴子二人〔飯岡(抹消)五人〕ヘ年賦貸〕
〔八(朱書)・〇〇・〇〇〇〇　飯岡五人ヘ仕付米貸〕
〔一七四(抹消)・片馬・三五三〇
〔一(朱書)・〇〇・〇〇〇〇　鶴子二人ヘ同上〕（四月二三日・一二ページ）
一七二・片馬(朱点)・三五三〇　現収納米高
〔片馬(朱書)・〇〇〇〇　糯米武平外二人ヘ歳暮〕
〇一七二・〇〇(朱丸)・三五三〇(朱線)(朱点)(朱点)　現在米高(朱線)

鶴子金太郎作一五地割六五番ノ一田一反六畝二一歩ノ内鉄道線路敷設後用水堰ヨリ水溢入リ凡ソ二五坪余土盛上ケノ必要アリ右六・二五(朱点)ノ半額救助願出タル由昨年暮返金ノ約ニテ大吉及ヒ福太郎ヘ馬買入代金一〇・〇(朱点)〇宛貸置タルニ大吉買入ノ馬不幸ニシテ斃レ再ヒ買入タルニ付当暮マテ猶予福太郎モ同断願出ノ由孰レモ聴許ス

昨年十月以後暮マテノ出入明細帳送リ来ル〔(武平二日付)(朱書)〕

遠畑嘉藏ヨリ去ル明治二十八年中貸付ノ金一五・〇(朱点)〇返納アリ右ハ次男

留吉台湾出征中病死シタルニ付軍事公債額面一二〇・〇(朱点)〇ト祭祀料六〇・〇〇(朱点)下賜セラレタル内ヨリ支出シタル由　鶴子福太郎ヨリ馬代一先返金ノ由　右二口予備金ヘ繰入ノ義申遣ハス　上田裏田地買入ハ不同意ノ旨答フ　鶴子子金太郎土盛ノ区域実地増加ニ付増給ノ義承知ス〔(武平六日付)(朱書)〕

肥料魚粕ハ宮古製ノモノ風袋共目方一五貫五〇〇目ノ一俵価凡ソ六・八〇(朱点)ノ処二三十俵買求ムルトキハ二俵一二・〇〇(朱点)位ノ品ニ付テハ八〇・五〇(朱点)乃至〇・六〇割付ノ趣ニ付キ小作米一〇駄毎ニ一俵位ノ標準ニテ助次郎除キ他ノ小作人ニ貸付テハ如何其割合ハ凡ソ左ノ如シ

一四俵　金太郎　一三俵半　大吉　一二俵半　政之助
一二俵　命助　一一俵半　栄助　一一俵　清藏
一一俵　福太郎　一半俵　清藏　命助　福太郎
〆一六俵　代金一〇八・〇八(朱点)〔(武平二二日)(朱書)〕
二二日笹結納　二三日母君還暦祝（第五〔六(抹消)〕〔八(加筆)〕(ママ)ヘージ）

日　五　二月

小作人ノ疲弊ヲ防ンカ為メ次ノ如キ蓄米案ヲ差越シタリ

年数	元石	利米年八分	元利石
	（朱書）（石斗升合）	（朱書）（石斗升合）	（朱書）（石斗升合）
初	六・〇〇〇（朱点）	四八〇	六・四八〇（朱点）
二	一二・四八〇（朱点）	九九八	一三・四七八（朱点）
三	一九・四七八（朱点）	一・五五八（朱点）	二一・〇三六（朱点）
四	二七・〇三六（朱点）	二・一六三（朱点）	二九・一九九（朱点）
五	三五・一九九（朱点）	二・八一六（朱点）	三八・〇一五（朱点）
六	三八・〇一五（朱点）	三・〇四一（朱点）	四一・〇五六（朱点）
七	四一・〇五六（朱点）	三・二八四（朱点）	四四・三四〇（朱点）
八	四四・三四〇（朱点）	三・五四七（朱点）	四七・八八七（朱点）
九	四七・八八七	三・八三一（朱点）	五一・七一八（朱点）
一〇	五一・七一八（朱点）	四・一三七（朱点）	五五・八五五（朱点）
	元石	利米年一割	元利石
	（朱書）（石斗升合）	（朱書）（石斗升合）	（朱書）（石斗升合）
	六・〇〇〇（朱点）	六〇〇	六・六〇〇（朱点）
	一二・六〇〇（朱点）	一・二六〇（朱点）	一三・八六〇（朱点）
	一九・八六〇（朱点）	一・九八六（朱点）	二一・八四六（朱点）
	二七・八四六（朱点）	二・七八四（朱点）	三〇・六三〇（朱点）
	三六・六三〇（朱点）	三・六六三（朱点）	四〇・一九三（朱点）
	四〇・一九三（朱点）	四・〇九三（朱点）	四四・二一二（朱点）（ママ）
	四四・二一二（朱点）	四・四二二（朱点）	四八・七五四（朱点）
	四八・七五四（朱点）	四・八七四（朱点）	五三・六二九（朱点）（ママ）
	五三・六二九（朱点）	五・三六二（朱点）	五八・九九一（朱点）
	五八・九九一（朱点）	五・八九九（朱点）	六四・八九〇（朱点）

一　此貯蓄法ハ小作米一俵納ムル者ヨリ一升ツヽノ割合ヲ以テ蓄積ス蔵米一俵三斗七升ナレトモ八升ト積リテ可積立事但小作米総高四百俵ト見積ルトキハ一个年玄米四石ヲ得ルモノトス

一　小作人共救助ノ為メ地頭ニ於テ収入小作米百俵ニ付キ玄米五斗ノ割合ヲ以テ毎年積立穀ノ内ヘ貸与ヘ十个年据置キ十一个年目ヨリ無利足十个年賦済崩ノ法ニ依リ返弁ヲ受クル事

一　蓄積年数ヲ五个年ト定メ年限中異作等ノ節ハ順延ス且此貯蓄法ハ明治三十一年ヨリ実施スルトキハ三十二年一月ヲ以テ初年ノ初メトシ相当ノ利米ヲ以テ貸附（ママ）ル事

一　貸付方ハ借用人ノ身元及ヒ抵当物ニ付キ両鍬頭協議決定ノ上可取計事

一　貯蓄人（中）（抹消）（ヘ八）（加筆）如何様ナル事故アルモ十个年以内ハ決シテ貸付サル事但十一个年目ニ至リ地頭ヘノ弁納米ノ都合ニ寄リ協議ノ上利米ノ内ヲ以テ貸与不苦事

一　地頭ノ都合ニ寄リ小作地売渡譲渡等ノ節ハ右小作地ヨリ相納メタル元米及ヒ利米トモ計算ノ上返却スヘ

六

キ事

一　小作米ノ不納其不正ノ所業アリテ小作地取揚ケラレタル小作人ノ蓄積米ハ一切返弁セサル事

一　貯蓄米保存所ハ追テ米量繁殖スル迄地頭ノ倉庫ヲ借受ケテ之ニ宛ル事

一　貯蓄米ノ収支其他ノ所置方ハ当分ノ内両鍬頭立会ノ上地頭ニ於テ可取扱事

一　貯蓄米預リ人ハ不慮ノ災難ニ因リテ有穀消失等アルモ一切弁償セサル事

一　積立年限中水害等ニ因リテ一年度ノ蓄積米四石ニ満タス或ハ地頭ニテ新タニ買入タル地所ノ小作人モ貯蓄方加入相望ム等ノ節ハ臨時協議ノ上不都合ナキ様可取極事

一　利米ノ割合ハ成規ノ通リトシ一个年ヲ三期ニ分チ一月ヨリ五月マテハ一个年分六月ヨリ九月マテハ半年分十月ヨリ十二月マテハ年分利米ノ四分一ノ利ヲ付ス尤モ期末ニ貸付ルトキハ一割二分五厘乃至一割五分ノ利ヲ徴スルコトアルヘシ但貸付方ハ鍬頭並貯蓄人ヨリ申込ノ外一切相断ル事

一月ヘ持越高ノ外炭竈代八・〇〇（朱点）収入アリタレ𪜈地租、早納賞与、大場振舞武平月給支出シタル三〇・〇〇（朱点）アリ右ノ内味噌入樽五箇代三・五〇（朱点）金太郎土盛救助費凡ソ五・〇〇（朱点）支出スヘキニ付キ残金見計ラヒ地租及ヒ予備金ニ宛相当ノ送金ヲ請来ル（朱書）〔（武平四日）〕

二七銀行ハ当月ヨリ当坐預リ金利子ヲ（抹消）〔年〕日歩〇・〇一八（朱点）ニ改ムル旨通知シタリ

送金三五・〇〇（朱点）請取ノ旨申来ル（朱書）〔（武平一一日）〕

一二　家屋新築及増築届

一四　一旧家屋建坪　六拾弐坪

一二階増築　三拾坪七合一勺弐才

一二階建土蔵新築六坪

一車夫室、車置場、便所新築拾坪弐合五勺

右今般別紙図面ノ通新築並ニ増築仕候ニ付此段及御届候也

明治三十一年二月廿四日

牛込区市个谷砂土原町一丁目二番地

菊池武夫

牛込区長小嶋官吾殿

二五　昨年度ヨリ引続設置ノ炭竈三工ニ対スル山役銭四五・〇〇（朱点）去ル廿二日収入来月納ノ第五期地租ヘ差向ク又炭竈一工新設ノ由（朱書）〔（武平二四日）〕

日　月

（抹消）一

（抹消）八

浅沼大吉父去月末病死ニ付キ香奠〇・五〇遣ハシタリ（朱書）〔（武七日）〕

二二　同県人三浦自孝ノ媒酌ニテ笆ヲ東京府士族大築尚志長男工学士大築千里ト結婚セシムルノ約整ヒ先方ヨリ

(6)

左ノ目録并親類〔抹消〕〔書〕〔加筆〕〔付〕到来ス〔抹消〕〔尤モ目録本書ハ横一列ニ認メタリ〕

目録

一帯　一筋　一松魚節　一台　一子生婦　一台
寿留女　一台　一志良賀　一台
一家内喜多留　一荷　一末広　一対　以上

右結納トシテ差進候間幾久敷目出度御受納被下度候也

明治三十一年一月二十二日　大築千里

菊池武夫殿

尤モ本書〔抹消〕〔ハ〕〔加筆〕〔ニ〕ハ品書ヲ横一列ニ行書ニテ〔加筆〕〔縦五ツ折ノ奉書ニ〕認メアリ帯ハ紙幣ニテ金三〇・〇〇ナリ

親類附（表書）（横ニ折リタル紙ヲ三ツ折ニ畳ム）

記

実父　陸軍少将従四位勲二等　大築千里
実母　千葉県士族岩渕波右衛門三女尚志妻　大築尚志
姉　陸軍一等軍医正七位勲六等功五級　茂登子
　医学博士宍道弘一妻尚志五女　満多子
妹　陸軍歩兵大尉正七位勲六等功五級　田中義一妻尚志六女　壽天子
妹　尚志七女　春和子
弟　尚志四男　佛郎
妹　尚志八女　八ツ子
叔父　大築尚道

(7)

伯〔抹消〕〔母〕〔加筆〕〔父〕　岩渕善慶
伯母　寺田與志子
伯父　岩渕立郷
伯母　千葉県士族築瀬整常妻　すゑ子
従弟　大築洋之助
従弟　陸軍兵歩少尉正八位　大築平太郎
従兄　理学士　岩渕醫
従兄　陸軍三等軍医正八位医学士　岩渕善雄
従兄　筒井弟三
従姉　陸軍歩兵中尉従七位勲五等大野清助妻　津留子
従姉　陸軍技手岩渕俊造妻　げん子

以上

明治三十一年一月二十二日

此方ヨリ遣ハシタル目録モ帯一筋カ袴一領ト為リタル丈ニテ他ハ右ニ同シ〔抹消〕〔之ニ対シ〕〔加筆〕〔尤モ女ノ方〕ヨリハ半額ヲ贈ルハ世間普通ナルニ媒酌ノ説ニ〔抹消〕〔加筆〕〔テ〕〔従ヒ金貸ニテ〕矢張三〇・〇〇トセリ之ニ対シテ先方ヨリ左ノ受取書到来ス

受納目録（〔抹消〕〔紙〕表書）（紙ハ親類附ニ同シ）

記

（品書略ス）

以上

右結納トシテ被差遣幾久敷目出度受納候也

明治三十一年一月二十二日　大築千里

(8)

菊池武夫殿

此方ヨリモ先方ノ目録ニ対シテ同様ノ受納書ヲ差出シ且左ノ親類附ヲ遣ハシタリ

実父　従四位法学博士　菊池武夫
継母　海軍大薬剤官水野加以智妹武夫妻　峯子
祖母　武夫母　多代子
弟　武夫長男　香一郎
妹　武夫二女　貞子
妹　武夫三女　濱子
妹　武夫四女　操子
妹　武夫五女　鶴子
叔母　武夫妹　恵機子
従姉　恵機長女　薫子
従弟　恵機長男　啓麿
叔母　岩手県士族豊川孝一母　芳子
叔母　検事正六位勲六等大竹長寿妻　澄子
従姉　判事従七位榊原周次郎妻　初子

（朱書）〔(109-14)〕

二三

昨年ハ母君ノ還暦ニ当リタレトモ増築ノ出来上リ思ノ外ニ後レ引続キ峯(抹消)〔出〕分娩ノ混雑抔アリタルカ為メ祝儀ヲ挙ル折ヲ得ス今日漸ク其運ニ至リタリ還暦ノ祝ト云ヘハ或ハ手拭或ハ盃ナトヲ来会者ニ配ルカ通例ナレトモ此方ヨリ寿ノ印ヲ押付クル様ニテ面白カラス其代リニ福引ヲ催フスコト、シ客ニハ孫共ヲ初メ孫共ノ友達ナル児供等ヲ主トシテ成ルヘク多ク集メ新築ノ奥広間ニテ朝ヨリ随意ニ遊ハシメ余興ニハ先ツ太神楽ヲ観スル積リナリシニ時刻ノ解シ違ニテ来ラネハ円遊ノ落語ヲ第一トシ山登万和及ヒ笹貞ノ弾琴ヲ第二トシ昼食ハ折詰ニシテ膳ニハ汁ト刺身位ヲ添タルノミ昼後再ヒ円遊ノ落語ヲ第三トシ雨降リ出シタレハ第四ニ太神楽ヲモ室内ニテ演セシメ最終ニ福引ヲ執行ヒ薄暮散会シタリ大竹、榊原ノ孫共ヲ招キタレトモ途遠ケレハ来ラス那珂通世氏ハ丹冊ニ左ノ歌ヲ書テ持参シタリ

菊池ノ母君ノ六十一ノ賀ニ詠シテ奉ル

岩手山イハネシメタル老松ノイヤ若え行ク春ノ色カナ　通世

本宿ノ叔母モ左ノ二首ヲ詠ミテ呉レタリ

御祝ヒニ侍リテ

御園生ノ根サシモ深キ老松ノ
イヤ栄えユク今日ノ目出タサ　直子

鶴亀ノコヱモ聞ユル庭ノ松

此他吉川義質等モ和歌詠ミテ出シヌ

(9)

日　月

八　三

産婆宮田ケイ同堀カメノ下媒酌ニテ薫ハ長崎県平戸

町士族工学士松野千勝ト結婚ノ約整ヒ結納ヲ取替ハシタリ先方ヨリ帯地一巻ニ宛金二〇・〇〇（朱点）此方ヨリハ袴地一巻ノ代トシテ金一〇・〇〇（朱点）受渡ス先方ノ親類附ハ左ノ如シ

祖母　従七位　松野千勝
妹　利寿子
妹　節　子
叔父　小亀久子
伯母　酒井政規
伯母　奥平廣包母　玉　子
伯母　石原正次母　銀　子
叔母　天野宗孚妻　四女子
従兄　奥平廣包
従兄　正七位　石原正次
従兄　小國　貞
従兄　松平定静

浅沼大吉父去月末病死ニ付キ〇・五〇（朱点）香奠遣シタリ（朱巻）〔武七日〕

一七

加賀野本宅門前ノ矢羽某住宅〔地〕（抹消）ハ八畳、六畳、四畳、板敷、二階畳無シノ四畳半ニテ代価二二〇・〇〇（朱点）位ナラ手ニ入ルヘキ旨申来レヒ住人ハ小六个敷人物故明渡等ニ故障ナケレハ求メテモ宜シト答ヘタリ

浅沼庄左衛門ヘ明治十九年中畑四反一畝田二五歩抵当ニテ二八・五〇（朱点）貸置タルニ元利積リテ五〇・〇〇（朱点）余ト為

リタルヲ三五・〇〇（朱点）ニテ勘弁ヲ受ケ度旨申出タル由承諾シテ登記取消ニ要スル委任状ヲ送リタリ

父存生中ヨリ太田孝ヘ貸置タル和訓栞何時マテモ返サヌ故東京ニテ入用トノ書状差越シ呉タキ旨申来ル（朱巻）〔武一六日〕

(10)

二月曜　癸未

松野ノ同郷人時ノ警保局長牧朴真夫婦ノ媒酌ニテ午後六時麹町山王台星ケ岡茶寮ニ於テ千勝薫結婚ノ式ヲ執行フ松野ノ祖母妹共ニ郷里ニ在リテ此地ニハ千勝一人ナレハ石原ノ伯母カ母分トシテ求会ス先方ノ注文ニ依リ里帰ノ儀モ混同シテ済スルコト、定メ当夜ノ入費ハ総テ折半トセリ松野ハ鉄道局技師ニテ新橋停車場内機関部詰ナリ当日正午送リ込ミタル荷物ハ

箪笥　二桿・長持　一桿
乗台　二荷　此人足一〇人
外ニ鰹節折詰　一箇　土産料　金一〇・〇〇（朱点）

茶寮ニ於ケル儀式書ノ写ハ左ノ如シ

第一　御式
白木三宝　長熨斗（抹消）〔二人前〕
白木三宝
瓦
巻寿留女　吸物　御二方前
田付
結ヒ昆布
白木三宝

(11)

土器三組盃
御銚子
蝶花形
第二　御親盃
白木三宝　長熨斗　床ノ間ニ
吸物膳　御一同ヘ出ス
小皿（巻スル女、田作ムスヒ昆布）　蛤吸物
花月台
三組盃
御銚子
蝶花形
式済ミテモ吸物膳ハ其侭ニ置テ直ニ御料理ヲ出ス御料理ハ
五色取肴　刺身　鉢肴　茶碗
本膳
膾汁　千代口　香ノ物　平飯（青籠入）　焼物（鯛、伊勢海老、蛤）
此場合ヲ予想シ兼テ恵機名前ニテ三菱銀行部ヘ預ケ溜タル金高四九五・〇〇（朱点）余アリタレハ其侭恵機ニ渡シ総テ其心侭ニ任カセタルニ諸物価膳貴ノ折柄余程支度調度ニ困難ヲ覚ヘタル様子ナリシ入費ノ概略左ノ如シ
四九五・九二三（朱点）　総入費　外ニ茶寮入費折半高三九・五九（朱点）別支出
内訳
三〇二・〇七二（朱点）　衣服、夜具、染、仕立
六九・七四五（朱点）　道具
五三・〇四六（朱点）　小道具、化粧品、筆墨紙
四六・一八〇（朱点）　結納、土産物、祝儀料
二四・八八〇（朱点）　下仲人其他ヘ挨拶費
濱月経収ラサルコト一ケ月余ニ亘リ顔色追々蒼白ト為ルニ付キ濱田玄達ノ診察ヲ得テ第一医院ヘ入院ス母君付添ナリ
二七　浅沼庄左衛門用委任状并薫結婚届落手ノ旨申来ル（朱書）〔（武二六）〕
三〇　外加賀野本宅表門北側第一番ノ杉腐朽ニ付剪倒シ度旨申来リ承知ス（抹消）〔（武二九日）〕
浅沼庄左衛門貸金受取済ニ付キ第六期地祖及予備金ニ当ル旨申来ル（朱書）〔（武二九）〕

(12)

日　月
四
一〇　外加賀本宅下水樋、土蔵通廊下敷板、井桁及ヒ柱並七七番戸門修繕ヲ要スル旨又米価ハ町米ニシテ一〇・一（朱点）〇位ノ由申来ル（朱書）〔（武九日）〕
一六　蔵米一駄一一・〇〇（朱点）以上ナラハ売ルヘキヤヲ尋ネ来リ承知ス（朱書）〔（武一五日）〕
一九　蔵米一駄一一・三〇（朱点）ニテ一五〇駄売払ヒ一，六九五・〇〇（朱点）ノ内手金三〇〇〇〇請取リ安田銀行送金手形ニテ送来ル残金一，三九五・〇〇（朱点）ハ来二五日米ト引換ニ

落手ノ筈糯米ハ一二・三〇（朱点）ナル由ナレハ売ルヘキ旨申遣ハス又和訓栞六五巻入二函太田孝ヨリ受取済ノ由〔（朱書）（武一八日）（15（）『』&217）〕

二三

米代残金ノ内二五・〇〇（朱点）第六期地租及ヒ市町村税ニ宛余金一，三七〇（朱点）送リ来ル糯米代一二・三〇（朱点）ハ請取次第矢張右税ニ当ル積仕付米トシテ金太郎ヘ一駄片馬福太郎ヘ片馬貸付ク〔（朱書）（武一二日）（15）〕

三〇 土曜 癸亥

午後八時江戸川端〔（加筆）新〕諏訪町大築方ヘ笆ヲ送ル媒酌人三浦自孝夫婦ニテ儀式首尾能相済ム尤モ千里ハ一年志願兵服役中ニ付キ各本籍地市役所ヘノ届向ハ来ル十一月兵役満期ノ後取計フ筈斯ル折ノ用意ニトテ笆名前ニテ三菱銀行ヘ千円近クノ金子預ケ置タレハ必要ノ費ヲ支ヘテ尚ホ数百円ノ金ヲ婚家ヘ持参スルニ足ルヘシトノ予算ナリシニ嫁期ハ見込ヨリ早ク来リタルト日清戦争後物価暴騰シタルトニ因リ目算大ニ外レタリ費用ノ概要ハ

一，五〔（朱点）（抹消）〕〔五九八二〕一　呉服、染物、仕立物、夜具、
〔（加筆）（朱点）七五・四〇〕　肩掛類
一六一・九〇（朱点）〇　櫛笄、紙入、帯止、半襟類
一四一・七〇（朱点）〇　箪笥三長持ニ用箪笥一机、本箱、下駄箱類
一二八・九四（朱点）〇　膳椀、日用小道具、雑品類、
七二・二一（朱点）五　祝儀、答礼類、笆当用五・〇（朱点）〇共

一二

合計二，〇八〇・一五（朱点）六（朱点）ナリ笆乳母竹原タメハ当夜附添テ大築ニ一泊ス荷物ハ箪笥三桿長持二桿釣台二箇ニテ送リタリ

日　月

五

(13) 一五

小作米収支調、引米請書、年賦借用米証、一月乃至四月予備金収支明細帳トモ送リ来ル　松尾前畑返丈量済　本宅ヨリ三丁許隔リタル市内字新庄八地割五一・五二番田五反二歩小作米一〇駄〔（抹消）一〕ノ場所ヲ一，一五（朱点）〇・〇〇（朱点）ニテ買入マシキヤト問来リ意ナキ旨答フ

〔（朱書）駄斗升合勺〕
二〇一・一三（朱点）一〇　平年収納米
内　二四・三四（朱点）八〇　異作引米

内　鶴子

三・三（朱点）八六〇　藤村助次郎
三・一（朱点）九四〇　佐藤金太郎　一割引
六五（朱点）四〇　佐々木福太郎

下飯岡

四・六（朱点）四七五　浅沼大吉
三・一（朱点）八〇〇　猿舘命助
二・二（朱点）四〇〇　福嶋榮助
一・五（朱点）三六五　福嶋清藏　一割五分引

羽場

三・五五五〇（朱点）　猿舘政之助

浅岸

・五五五〇（朱点）　上村喜藏

内

三・三七〇〇（朱点）　年賦貸米

内

三・〇〇〇〇（朱点）　佐藤金太郎

・三七〇〇（朱点）　佐々木福太郎

内　一〇・〔三七〕〇〇（朱点）（抹消）　仕付米貸付

〔〇〇〇〕（加筆）

内

一・三七〇〇（朱点）　金太郎

・三七〇〇（朱点）　福太郎

二・〇〇〇〇（朱点）　大吉

二・〇〇〇〇（朱点）　命助

一・〇〇〇〇（朱点）　栄助

〔駄斗升合勺〕（朱書）

一・〇〇〇〇（朱点）　松太郎清藏跡

二・〇〇〇〇（朱点）　政之助

〔三口合〕（朱書）

〔三七・七一八〇〕（朱書）　総引貸米

一〔七七七〕（抹消）五三〇　差引残米

〔六四・一〕（加筆）（朱点）

七・〇〇〇〇（朱点）　三十年度仕付米返納

一・二〇〇〇（朱点）　中野仁助畑返増石

・三七〇〇（朱点）　藤村助次郎同前

合計

一七二・七二三〇（朱点）　総収納米

〔内・三七〇〇（朱書）　糯米武平外二人へ歳暮〕

〔一五〇・二〇〇〇（朱書）　売払米〕

〔一・〇〇〇〇（朱書）　糯米売払〕

〔合一五一・五七〇〇（朱書）　支出米〕

二一、一五三〇（朱点）　差引現在米〔武一四〕（朱書）

一九　金一五、〇〇ノ為替落手〔武一八〕（朱書）

日月

六

五

笹里帰ノ式ハ千里ノ兵役了リタル後ニセントハ思ヘトモ媒酌人ヘノ挨拶ヤ大築家トノ附合上何モセステハ都合悪シケレハ今日ノ日曜ヲ幸ニ略式ノ祝宴ヲ催フシタルニ大築ヨリハ病気ナル父ヲ除クノ外一同及ヒ媒配（ママ）三浦自孝夫婦モ来リ母君及ヒ濱モ第一医院ヨリ仮ニ戻リ例ノ通リ山登万和ノ弾琴ヲ余興トシテ相応ニ賑ハシク相済ミタリ濱モ目下ハ出血止リアレハ其儘退院サスルコト、シタリ

一三

門側杉ハ金一〇八ニテ首尾好ク伐倒シタリ　当年度地租割前期追加ハ地租金一・〇〇ニ付キ〇・一五当ノ半額凡ソ一二・〇〇（朱点）徴収アリ勝手建足シ〔口〕（抹消）下水土管埋立入費凡ソ一〇・〇〇（朱点）総垣結、庭樹生垣手入費凡ソ三・〇〇（朱点）請求シ来ル〔武一二〕（朱書）

二〇

八六番戸裏座敷袖垣腐朽ニ付キ四ツ目垣ニ仕立直ス

(15)

日　月

七

二二　八六番戸勝手通模様替、土管埋伏、井戸柱根継、七七番戸門建直共残ラス金一五・一二二（朱点）テ出来上リタリ

二六　湯島天神町家屋ヲ金三三〇・〇〇（朱点）ニテ渡邊金次郎ニ売渡ス〔（朱書）旧旧帳一四三・二六年八ノ三一〕

二九　残米二一駄ノ内政之助下作人納ノ四駄ハ水冠米ニテ更ケ二斗位ノ挽減アルヘキニ付キ八・五〇（朱点）他ハ一〇・二〇（朱点）ニ売レル見込否ヤ問合セアリ宜キ旨答フ　高屋キヨリ救助金ヲ請来リタレ𪜈事情審カナラサレハ篤ト取糺ノ上必要タケ渡スヘキ旨ヲ以テ北海道福山行ノ妻弟水野惠ニ托シ一〇・〇〇（朱点）武平ヘ送リタルニ落手〔（抹消）セル由〕（加筆）〔シ先〕ツ五・〇〇（朱点）丈給与シタル由〔（朱書）武二八〕（12＆217）

三〇　内幸町事務所ニ対シ明治火災保険会社ト三・〇〇〇（朱点）ノ保険契約ヲ取結ヒ置タルニ満期ニ付キ更ニ来三二年七月三十一日一个年ノ約ヲ継キ五一・〇〇（朱点）支払タリ尤モ会社ハ保険金ノ請取証ノミヲ差出シ契約書ハ書替サル規則ナリ〔（朱書）旧帳七一〕

日　月

八

九　米価下落ニ付キ一七駄八九・九〇（朱点）四駄ハ八・〇〇（朱点）ツ、ニテ合計二〇〇・〇（朱点）三二売払ヒ内四〇・〇（朱点）三予備金ニ繰入レ一六〇・〇〇（朱点）送リ来ル　薪炭トモ価下落ニ付キ山役銭収納早俄取ラヌ由　南近在虫害発生ニ付キ田五反歩位ヘ駆除点灯一箇取付ノ協議定マリ鶴子ヘ点灯器具一二箇飯岡ヘ一一箇羽場ヘ四箇及ヒ二〇日間ノ器械石油ノ代トモ一一・三〇（朱点）渡シタリ　愈豊年ノ兆アリ〔（朱書）武八〕（12＆217）

一三　朝七時上野発ノ列車ニテ峯、貞、香一郎、啓麿ヲ伴ヒ盛岡ヘト出立自分ハ長岡ニテ下車シ家族ハ仙台陸奥ホテルニ一泊翌日ハ嶺八郎夫婦ノ先導ニテ塩釜松島ヲ巡覧シ自分モ飯坂ヨリ行テ仙台ニ同泊ス

一五　朝九時三五分仙台ヲ発シ水沢ヨリハ横濱幾慶モ乗合セ四時頃盛岡自宅ニ入ル横濱、嶋田、山本ノ家族小作人、出入ノ輩多勢出迎呉タリ上野盛岡間二等賃金大人三人小児一人ノ分一六、三〇カト覚フ　翌朝自分丈北海道ヘ出発

二四　北海道ヨリ盛岡ヘ帰着

(16)

日　月

九

二　遠畑嘉藏ハ家屋買入ノ為メ無記名軍事公債波号第三二九一七番額面一〇〇・〇（朱点）〇ヲ買取呉度旨当時山田町ヨリ帰省中ノ長男清吉ヲ以テ申入レタルニ付キ額面ニテ求メ遣ハスコトシ薪山役銭三一・〇（朱点）五三炭同四〇・〇（朱点）〇

○合計七一・〇五三（朱点）ノ内五〇・〇〇（朱点）武平ヨリ請取リタル分ヲ其儘清吉ニ渡シ公債証書ヲ請取リタリ残金五〇・〇〇（朱点）ト外ニ買入地所家屋ヲ抵当トシテ〔八〕（抹消）六〇・〇（朱点）

○貸遣ハス分ヲ帰京ノ上送ル筈ナリ

三　去ル一日ノ舟流シニテ盆モ過キタレハ昨日出立ノ積ナリシモ雨天ニ付キ延ハシ愈今朝七時三五分盛岡ヲ発ス新タニ全通シタル常磐線ヲ経テ上野迄ノ二等賃金四・九（朱点）六布施カメ女同伴ニ付キ五人半分ニテ二七・二八（朱点）ナリ

五　仙台ト水戸ニ一泊ノ上自分ハ午後一時余ハ八時過帰京ス

一七（朱書）〔129〕　遠畑嘉藏ヘ金六〇・〇〇（朱点）貸シ左ノ証文請取ル　五月以降ノ出入明細帳来ル

金子信用証書（用紙半紙）

一金六拾円也　但無利子

此抵当物左ニ

盛岡市大字上田四拾五地割六拾番字西組裏

一市街宅地　七拾坪

同　上五拾九番字同球〔上〕（抹消）

一田反別弐拾四歩

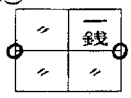
同　上六拾壱番字同

一市街宅地八拾四坪五合

同処ニアル

一建家木造茅屋平屋　壱棟

建坪弐拾坪　但造作附



(17)

右地所建家抵当書入トナシ前顕金額正ニ請取借用仕候処実正也御返金ノ義ハ明治三十一年ヨリ明治三十三年マテ毎年十二月二十日ヲ期シ金弐拾円ツヽ三个年賦ニテ済崩シ御返金可仕候若シ壱期タリトモ延滞候トキハ御督促人御遣ハシ被下度其節ハ宿賄ノ上壱日壱人ニ付キ金参拾銭ツヽ人頭ニ応シ日払可仕候為後日金子借用証書仍テ如件

明治三十一年〔五〕（抹消）〔九〕（加筆）月十六日

盛岡市上田組町百五番戸

借用人　遠畑嘉藏（黒）㊞

同市加賀野八十六番戸

菊池武夫殿

盛岡区裁判所構内

代書人　北館理助（朱）㊞

右依頼ニ付キ代書候也

明治卅一年九月十六日

盛岡市大字上田四拾五地割六十一番字西裏市街宅地ニアル

一建家木造茅葺平屋　壱棟

建坪弐拾坪　但造作附

(18)

地所第二百五十八号（朱書）　貸主　菊池武夫
〃　第二百二十五号　代人　菊池武平□（朱）
建物第百廿三号　借主　遠畑嘉藏○（黒）
明治三十一年九月十六日
登記済　盛岡区裁判所印

土蔵小屋、室蓋修繕費及ヒ第一期地租ニ宛テ金三一・〇〇（朱点）送ル　鶴子助次郎作虫害アリ目下一反歩程収獲皆無（獲カ）ノ見込ナル由（朱書）〔（武一六）〕

〔（抹消）二一〕

濱ハ学校始業ノ日出席シタルニ翌日ヨリ月経又通シ尚ホ収マラサルニ付キ再ヒ臥床

二一　送金三一・〇〇（朱点）落手　瓦家根葺直賃瓦代共九一・六六（朱点）ノ見積書藤原勘之助ヨリ差出シタル由ニテ送越ス（朱書）〔（武二〇）〕

二五　二三日夜七時頃久昌寺出火庫裏ノ方僅十分一程焼残リ手前位牌焼失シタリ　具足ニ領ノ内一領見ヘサル趣ナリシニ負櫃入ノ分モ発見不日外箱出来次第送ル由

飯岡村税八・二八三（朱点）向中野七・三八八（朱点）及ヒ垣庭樹手入費請求シ来ル　鶴子虫害六七反歩ニ及フ（朱書）〔（武二四）〕

日　月

一〇

二　久昌寺炎上ニ付キ位牌、膳具焼失打敷袈裟ハ無事定絞付位牌箱二・一（朱点）五ニテ出来スヘキ由箱ヘ収ムヘキ板位牌一枚ヘ二人宛ノ戒名ヲ記入スルコトトシ代々ノ戒名俗名死亡年月ヲ報シ遣ハス

鶴子虫害地収獲（穫）ノ際実検スルニ

一五地割六四番字幅ノ内凡ソ一反歩　助次郎作　皆無
同　〃　二反歩　同　半毛
一六地割九番字鶴子ノ内〃　二〃〃　同　三分減
同　一四・一五番ノ内　〃　二〃〃　金太郎作同（朱書）〔（武一）〕

(19)

一二　厨子、位牌、外覆箱トモ五・二〇（朱点）ニテ出来　久昌寺仮建築費ノ内ヘ寄附ノ義内談アリ一〇・〇〇（朱点）乃至二〇・〇〇（朱点）世間ノ振合ニ応シ差出スヘキ旨指図ス　室蓋、孫庇、土蔵小屋ノ修繕ハ去五日（加筆）ヨリ一〇日マテニ出来上ル（朱書）〔（武一一）〕

二七　瓦屋根修繕ハ去二二日落成三个年間ハ大小破トモ無賃修繕ノ約位牌ハ去二五日久昌寺ヘ納済又其節寄附金二〇・〇〇（朱点）差出ス　後期地租割一九・三五（朱点）追加一二・九（朱点）六第二回追加地租一・〇〇（朱点）ニ付キ〇・〇四（朱点）割ニテ六・三（朱点）〇合三八・六一（朱点）第二期地租一六・二八（朱点）　弘前ノ師団盛岡市ヘ宿泊ニ付キ本宅ハ大隊本部宿舎ニ宛ラルノ由右ニ付接待費ノ内ヘ一〇・〇〇（朱点）請求シ来ル（朱書）〔（武二五）〕

日　月

一一

五　去月二九日夕ヨリ三一日昼マテ第八師団第三一聯隊

第一大隊本部員小佐(ママ)中尉軍医軍吏各一人下士五人兵卒八人馬丁三人乗馬三頭トモ宿舎シ各機嫌好ク出立タル由右宿舎料トシテ三・三六(朱点)受取リ此方ノ失費ハ米噌薪炭油ノ外二七・六八(朱点)五掛リタル由　送金六四・八九(朱点)請取ル〔(朱書)武四〕

一〇　第二第八両師団歓迎費加賀野分ノ内ヘ三・〇〇(朱点)寄附ス宿泊シタル本部員ヨリ礼状到来ノ由　松尾前畑返ノ収獲(穫)昨年度ノ一束ノ籾平均三升六合七勺五才ニ対シ今年ハ四升六合九勺ニシテ納米蔵米三駄程ト為リ昨年ヨリ片馬半俵相増ス今三・四年経ハ四駄半俵乃至片馬ノ収入アルヘシトナリ〔(朱書)武九〕

一五　鶴子ヨリ初穀四〔五〕(抹消)〔三〕(加筆)駄片馬〔収〕(抹消)去一三日附入〔(朱書)武一四〕

一八　同所ヨリ引続キ附入合計七五駄片馬収納済尤モ助次郎作凡ソ五反歩金太郎作凡ソ二反歩ノ収獲(穫)ハ皆無又ハ多分ノ減少ナルカ故ニ特別手当トシテ助次郎ヘ二駄金太郎ヘ一駄給与シ度之ニ当ル駄数ノ附入リ差止メ置タル由ナレモ虫害テハ無クシテ肥料過度ノ結果ナル由ナレハ本年ノ如キ豊作ニ漠然ト手当モ給シ難ク外ニ悪例ニ為ラヌ事由見付次第救助致スコト、シ先ツ皆納致サスヘキ旨申遣ハス〔(朱書)(武一七)〕

(20)二三　昨日ヨリ俄カニ寒ク今朝雪降リ手冷テ執筆困難ヲ覚フ

二五　鶴子ノ虫害ト称スル分ノ小作米ハ一先ツ収納ノコトニ相談取極マル飯岡ヨリ羽場ヨリ去ル二二日五八駄附入アリ〔(朱書)(武二四)〕

二八　日本郵船株式会社旧株一五〇株ニハ毎株二・〇〇(朱点)ニテ三〇〇・〇〇(朱点)新七五株ニハ一・八三(朱点)三ツ、ニテ一三七・四(朱点)〔七〕(抹消)〔七五〕(加筆)ノ処厘位ハ次回ノ配当勘定ヘ繰入ル、コト、シテ一三七・四七(朱点)合計四三七・四七(朱点)即チ年八朱ノ割ノ配当アリ又仮株券ト引換ニ左ノ本株券ヲ受取ル

乙第七〇壱参番ヨリ第七〇壱五番ニ至ル千円券（二〇株分）三枚

丙第九壱四弐番五〇〇円券（一〇株分）壱枚　〔戊〕(抹消)丁

第七弐四壱番第七弐四弐番一〇〇円券（弐株分）弐枚

戊第七九壱六番五〇円券（壱株分）壱枚

発行日付ハ明治三十一年十一月二十三日ナリ

三〇　本宿敷代ヨリ左ノ保管証券ヲ抵当トシテ預リ二五〇・〇〇(朱点)来年六月マテ貸シ遣ハス利子ハ二七銀行当座預ケ金利子ノ割合ニ依ル筈此預リ品ハ返金ノ際引替ニ可渡旨ノ証書ヲ遣ハシ置ク但利子勘定ノ都合ニ寄リ日付ハ十二月一日トセリ

一整理公債証書額面円　以六三一三二番

此保管証書番号戊八八四　明治二四年七月六日付

一同　以六三一三四番

同　戊八八六　同

一同　五十円以二五五二三番

同　甲八四一八同二八年六月十八日付

日　月

一二

三

前月中ノ収納米ハ一九六駄片馬山役銭ノ内三〇・〇（朱点）〇（抹消）〔三〕（加筆）〔山〕王畑賃ノ内一五・〇〇（朱点）取入タリ松尾前畑返ノ収納ハ三駄鶴子同二駄ニテ松尾前ハ元石ヨリ二駄鶴子ハ元石ヨリ一駄片馬ノ増穀トナリタリ松尾前ハ武平ノ発意鶴子ハ武平ノ周施ニテ畑ヲ田ニ変シタルヨリ此増収ヲ見ルニ至レルカ故ニ其功労ニ報ユルカ為メ増石全部即チ三駄片馬同人ヘ呉遣ハス（朱書）〔（武二）〕

七

笆ノ夫大築千里ハ前月ニテ志願兵ノ現役ヲ了ヘ最早迎妻ニ差支ナケレハ愈表向テ結婚願出ルコト、ナリタルニ妻タル者ノ身元ノ証明書ヲ添フル成規ノ趣ニテ左ノ願書ヲ盛岡市役所ヘ差出シタルニ品行端正ナル旨ノ証明書来リ直様千里ヘ送リタリ

(21)

身元証書願

岩手県岩手郡盛岡市加賀野八十六番戸士族
貴族院議員従四位法学博士
菊地武夫長女
菊池　笆
明治十五年十月二十九日生
明治三十一年十二月十六年二ケ月

右ノ者今般東京府東京市小石川区新諏訪町拾六番地士族大築尚志長男予備陸軍歩兵一等軍曹大築千里妻ニ呉遣シ申度ニ付御規則ノ通リ身元（保）（抹消）証書御渡被下度此段相願候也

明治三十一年十二月　日　（右本人父）（抹消）

右本人父　菊池武夫○
岩手県岩手郡盛岡市加賀野八十六番戸士族
親戚　菊池武平○
岩手県盛岡市長清岡等殿

九

賞与米三駄片馬ノ謝礼申シ来ル（抹消）〔（武六）〕

福太郎ハ小作米一駄片馬ト端米外ニ仕付米年賦米トモ一駄命助ハ小作米六駄片馬外ニ仕付米年賦米共三駄未納ノ由

助次郎金太郎ヘ戻米（抹消）〔ノ理由〕ハ培養過当ニテ収穫不足ニ付キ都合次第返納ノ旨ノ借用米証書ヲ取置テ米ヲ渡シ追テ証書ヲ呉遣ハスコトニ致サント云フ

町米（抹消）〔上〕一駄上ハ六・一三下ハ五・七八（朱点）ナレハ五〇乃至七〇駄買入テハ如何ト問来ル（朱書）〔（武八）〕

一三

大竹長壽ハ水戸ヨリ京都ノ検事正ニ勤補セラレ赴任スルニ付キ其費用ニ充ツルカ為メ金四〇〇・〇〇（朱書）借用シ度トノ依頼ナレトモ親戚同士ノ貸借ハ好シカラネハ他ヨリ周旋シ遣ハ（抹消）〔サレ〕（加筆）〔スコ〕ト（抹消）〔答〕（加筆）〔二〕約シタリ左レトモ二ケ年賦利子一割以下トノ注文ナレハ実際ハ他ヨリ借ルコト能ハス南部晴景名義ニテ自分ノ金ヲ用立ルコト、シ大竹ヨリハ左ノ証書ヲ入レサセタリ

(22)

十二銭　十八銭　証

一金四百円也　但利子ハ年八朱ノ割
右借用仕候処実正也返済ノ儀ハ明治三十二年二月ヨリ以後二十四ヶ月間ニ毎月元利合金九円参拾参銭宛無滞返済可仕候為後日証書如件
水戸市上市北三ノ丸三番地
明治三十一年十二月十二日　借主　大竹長壽□
市ヶ谷砂土原町一丁目二番地
保証人　菊池武夫○

一六

南部晴景殿
収納米二二一駄片馬（内糯米一駄片馬）　蕎麦一駄　小豆一斗五升未納米ハ左ノ如シ
一駄片馬一斗四升七合　本年小作米
片馬　仕付米　福太郎
二駄　年賦借用米
一駄　同　大吉
一駄　同　政之助
一駄片馬　本年小作米　喜藏
小以七駄片馬一斗四升七合
福太郎ハ高利貸兼平市太郎ヨリ家具家財小屋持馬共書入公正証書ニテ一〇〇・〇〇（朱点）余借用シ最早分散ノ外ナキ趣ナレハ小作地ヲ取揚ケ同人ヲ本家佐々木勘太方ヘ引取ラセ小作証ハ助次郎金太郎勘太名義ニテ徴シ家屋ハ右三名ニ守護為致テ如何トノ問合致方ナケレハ同意シ遣リタリ

(23)

一九

歳暮トシテ雑穀ノ分配味噌ハ五樽昨年ノ通取計フヘキヤト問来リ（朱書）〔（武一五）〕
前二廉ハ問合ノ通リト答遣ハス
大竹ヨリ借用金ノ半額二七銀行送金手形ニテ送リタル分請取リタル旨申来ル（朱書）〔（Dec. 29th）〕
岩手県知事末弘氏加賀野本宅借受度旨横濱幾慶ヲ経テ内談アリ武平ヘ申込ノ有無問合遣リタルニ未タ申来ラ（抹消）〔ヌ〕ス同氏ニハ一五、六歳以下ノ子供五六人アリ住荒ラサル、惧アル趣
福太郎ノ小作地取上ケ家追ノ処分俄カニシテ恨ヲ買フノ惧アルニ付キ金主ノ督促ニ堪兼ネ自カラ退去スル迄見合ハセ其場合ニハ一両年間助次郎、金太郎、本家勘太ニテ小作致サセ助次郎ノ見立ニ係ル仮小作人ニ家番サセ福太郎身代持直次第帰参ノコト、シ仮小作人ノ勤惰見極メノ上取据ル方然ルヘシトノ意見申来ル
炭竈役銭八月以後ノ分一一・〇〇（朱書）山王畑代残金一五・〇（朱点）〇収入炭薪ノ価下落ニ付キ明年ハ山出銭アル間敷見込大豆ノ価騰貴ニ付味噌大豆仕入ヲ見合ハス（朱書）〔（武一八）〕

二五

一週前ヨリ左向脛ニ小サキ腫物出来真中ニ針頭程ノ黒キ点アリ周囲次第ニ赤腫レト為リ歩行ニモ軽痛ヲ感スルコトアルニ因リ宮本ノ診察ヲ受ケタルニ根太ナリトテ膏薬ヲ施シ呉レタレ𪜈益マス腫レルノミニテ膿出テス再診ヲ請タルニ癰ナリトテ切開シタリ（抹消）〔午後四時

(24)

二六

頃嘔〕

午後四時頃嘔気ヲ催フシ便所ニ於テ遂ニ吐キ臥床ニ時間許リニシテ再ヒ吐ク昼食ノ物消化セスシテ出ツ数日前ヨリ遽カニ寒気ヲ催フシタルカ為メ胃カタルニ罹リタルナラントノ診断

例年ノ通歳暮トシテ左ノ如ク雑穀ヲ分配シタルニ対シ礼詞ヲ申シ来ル

蕎麦一駄、糯米半俵、小豆四升　武平

小豆四升ツヽ　横濱幾慶

嶋田善躬

乳母クラ

マサ

糯米九升二合五勺ツヽ、

小豆三升　山本　縁

本年度収納米人別調

〔朱書〕

〔駄斗馬斗升合〕

三八　一六　藤村助次郎

三八　一一二一　内片馬糯　佐藤金太郎

一　一〇〇〇　仕付米貸ノ分返納

一　〇〇〇〇　二九年度年賦米皆納

一〇〇〇　三〇年度ノ内

〆四一　一一二一

三六　一〇〇〇　浅沼大吉

内　三三　一〇〇〇　内一駄糯　小作米

二　〇〇〇〇　仕付米貸ノ分返納

(25)

一　〇〇〇〇　二七年度年賦米皆納

八　一〇〇〇　佐々木福太郎

内　一三　一〇九三　猿館命助

二一　一〇九三　小作米

二〇〇〇　仕付貸米返納

一六　一一〇〇　内小豆一斗　福嶋栄助

内　一　〇〇〇〇　仕付貸米返納

一四　一〇〇〇　福嶋清藏

内　一　〇〇〇〇　仕付米返納

一　二九年度未納皆納

三〇　〇〇〇〇　猿館政之助

内　二　〇〇〇〇　仕付貸米返納

一　〇〇〇〇　二九年度未納皆納

一五　〇〇〇〇　上村喜藏

三　〇〇〇〇　中野仁助

一　一〇〇〇　内一駄蕎麦　片馬町米　佐藤治太郎

二一八　一三五四

〔朱書〕

三　一〇〇〇　武平へ賞与

二　〇〇〇〇　助次郎へ返戻ノ分

一〇〇〇　糯　武平、両乳母へ歳暮

一　〇〇〇〇　蕎麦　武平へ同上

一五〇　小豆　横濱外三人へ同上

×七　〇一五〇

二一一　一二〇四　差引残米

未納米

一　〇〇〇〇　三〇年度年賦米本年度返戻ノ分ト差引　金太郎

一　〇〇〇〇　二九年度未納ヲ仕付米ヘ向　大吉

一　一一四七　本年度小作米　福太郎

二　一〇〇〇　仕付及年賦米　同

一　〇〇〇〇　二七年度年賦米ヲ仕付米ヘ向ク　命助（抹消・朱書）〔（武二四）〕

〆　七　〇一四七

右ノ外来春仕付米貸付予約ノ分左ノ通リ

一　一〇〇〇（朱消）〔ツヽ〕片馬ツヽ　命助、栄助

清藏

一　〇〇〇〇　政之助（朱書）〔（武二四）〕

二八　大竹長壽家族一同京都ヘ赴任ノ途中一泊

二九　炭竈役銭二〇・〇〇（朱点）収入　高屋キヲヨリ五・〇〇（朱点）借用ノ義申込アリ　承知ノ旨返答シ遣ハス　遠畑クラヨリ母君、自分、ゑきノ写真懇望ノ旨申出タル由（朱書）〔（武二八）〕

大吉借用ノ馬買入代金ノ返済ハ明秋マテ延期願出タリ大竹長壽ヘ去ル一六日送リ届ケタル残金二〇〇・〇（朱点）

〇渡ス此ニテ四〇〇・〇〇（朱点）ナリ

明治三十二巳亥年

日　月

一　一　朝ヨリ一天麗カニ晴渡リ凧揚ル子供ノ喞ツ日和ニテ目出タキ元日ナリ脛痛ミノ為拝賀ノ礼ヲ尽シ両陛下ノ玉顔ヲ拝スルコト能ハス家ニ閉籠リ稍人并ニ雑煮餅ヲ喰得タルハ先ツ幸ト云フヘシ娘聟大築千里ヤ新井要太郎抔年賀ニ来リテ廻礼者少ナキ由語レリ

二　年始状ト共ニ昨年九月以後ノ国許出入明細帳ヲ送リ越セリ（朱書）〔（武一）〕

六　佐々木福太郎ハ農具ヤ肥料マテモ高利貸ニ書入レ田地仕付ノ力皆無ト為リタレハ利息ノ出宗（ママ）マタ今ノ中ニ小作地ヲ返シ一家分散スル方然ルヘシ就テハ其道理ヲ当人福太郎ノ会得スル様ニ書キ送リ呉ルヘキ由申シ来ル（朱書）〔（武五）〕

八　大築千里ノ結婚願許可ト為リタルニ付キ愈戸籍吏ヘ結婚届ヲ差出スコト、為リ笹ノ戸籍入用ノ趣ナレハ昨暮武平ヘ申遣ハシタルニ用仕舞ニ懸リタルカ為メ市役所ノ用便セス漸ク今日戸籍抄本ヲ送リ越シタリ（朱書）〔（武七）〕

(27)

九

笆ノ戸籍抄本ニ添左ノ証書ヲ千里へ送ル

婚姻同意証書

長女　菊池　笆

右長女菊池笆儀今般東京市小石川区新諏訪町拾六番地士族大築尚志長男大築千里ト婚姻取結申度旨申出候処右ハ適当ト見認候ニ付キ同意ヲ表示候也

明治参拾壱年拾弐月　日

岩手県盛岡市加賀野八拾六番戸

士族貴族院議員

父　菊池武夫○

継母　菊池　峯○

右ハ昨年認メ置キタルモノニテ戸籍謄本来ラサルニ付キ今マテ送ラサリシナリ

九州鉄道会社ニテハ又候現在株主ヨリ新株募集スル由ニテ五株配当スル旨申シ来ル因テ引受証拠金毎株三一・〇（朱点）〇ツヽニテ十五・〇〇（朱点）吉川義質ニ渡シ明日払込シムルコト、セリ

日

月

二

七

前月ノ越高二〇・〇〇（朱点）ノ内ヨリ味噌大豆一石二斗代及武平月給支払ヘハ残リナキニ付キ第四期地租金ノ回付ヲ請フ

鶴子ノ小作人佐々木福太郎ハ村役場面ハ本家勘太方ヘ

(28)

一三

引移ノ体ニシ自分ハ町方ヘ奉公ニ出テ母妻子ハ夜番名義ニテ居残リ以前ノ三分一程モ小作シ度旨鍬頭藤村助次郎ヲ以テ武平マテ内願シタルニ付表向ノ小作人ト示談ノ上ナラハ知ラヌ振致スヘキ故福太郎親類ノ中資力アル者ヲ証人ニ立テ女子共ニ作ラセ然ルヘキ旨答タル由（朱書）〔武六〕

亡父一七回忌ハ今一（抹消）〔七〕（加筆）〔六〕日ニ来ルニ付キ他ノ仏様モ一緒ニ吊ヘキモノナキヤ且当日ハ上下差別ナク一人前〇・一（朱点）〇位ノ茶菓ヲ出シテハ如何ト尋ネ越ス

県知事末弘直方ハ本宅借受度旨斉藤寛柔ヲ以テ申込ミアリ一ケ月一五・〇〇（朱点）位ニテ貸サル、趣

例年ニナク寒気薄ク流レ前モ水桶モ凍ラス月ニ入テ雪一度降リタルノミ田畑ノ畦畔見ヘル様彼岸中日頃ニ似タル由（朱書）〔武六〕

地租金三二・〇〇（朱点）落手　七七番戸建物容易ノ手入ニテハ維持六ケ敷ユヘ取毀チテ空地ト為シ太田所有ノ空地ト交換シ古材木取交ヘテ新築スレハ二五〇・〇〇（朱点）位ニテ武平住居ニ適当ノモノ出来スヘク末弘ニ一五・〇〇（朱点）ノ家賃ニテ本宅を貸ストスレハ一ケ年半ニテ新築費ノ消却済ム勘定ナル趣

伯母ミヲ子殿ノ二七回忌当一〇月二六日相当ナレハ繰越シテ亡父ト同時ニ回向相営ムコト、シ金銀蓮花一対ハ忠治ヘ申付ケ寺ヘハ布施一・〇〇（朱点）卒塔婆二本及ヒ蝋燭料トシテ〇・五〇（朱点）差出ス由（朱書）〔武一二〕

一八

亡祖母亡伯母亡父三人ノ年回ヲ纒メテ営ミ金銀蓮花一対菊花一台代一・〇〇（朱点）布施一・〇〇（朱点）卒都婆蝋燭代〇・五〇（朱点）吉野饅頭一五人前一・五〇（朱点）結城屋へ払

〔（武一七）（朱書）〕

二一

当方ニテモ妹共ヲ待夜ニ招キタリ尤モ本宿ハ来ラス

末弘ノ借家談ハ先方ヨリ断リ来リ　太田持ノ空地ハ六〇・〇〇（朱点）ノ打歩ニテ交換スヘク尤モ六〇・〇〇（朱点）ハ月賦又ハ年賦ニテ聞済ミ呉ヘキ旨先方ノ挨拶ナル由　新築ハ図面ノ通リ六、八、四、六畳ノ四間ニ湯殿台所土間ナリ　七七番戸建具ノ中襖二枚襖障子二枚ハ本宅ニ用ヰアリ武平カ自費ニテ据付ケタル障子八枚アル由

〔（武二〇）（朱書）〕

日月

三

二　第五期地租及ヒ予備金ノ回送并太田空地交換ノ返答催促〔（武一）（朱書）〕

四　株式会社二七銀行ハ明五日ヨリ当座預リ金利足日歩〇・〇一六（朱点）乙種同〇・〇一八（朱点）（従前ノ通）ニ定ムル由通知アリ

六　三五・〇〇（朱点）落手　太田空地ハ七七番戸ヨリ一〇坪程広ク堰代ヨリ二尺程低ケレモ堰縁厚シ一坪一枡（六尺四方一尺高）土盛セハ建築ニ差支ナシ砂利一坪〇四〇ニテ四〇坪代一六・〇〇（朱点）井戸桁及堀代共一〇・〇〇（朱点）地固メ人夫賃トモ凡ソ三〇・〇〇（朱点）ノ見込　七七番戸建物ノ価土蔵ハ精々二〇・〇〇（朱点）潰家ノ見積ニテ総代六〇・〇〇（朱点）位ナル由〔（武五）（朱書）〕

八　左耳ノ中瘡物出来タルニ付キ本郷元町一丁目小此木耳科医院ニテ治療ヲ受ク元来聴感鈍キ故序ニ診察ヲ受ケタルニ旧痾ナレハ全治ハ難〔シ（抹消）〕ケレトモ平生ノ対話ニ差支ナキ位ニ維持スルコトハ叶フヘシ蟬ヤ蚯蚓ノ鳴クカ如キ音ヲ止メントテ服薬ヲ始メタリ

一九　笹千里ノ結婚ハ昨年中内輪ノ式ヲ済セタルモ千里除隊ト為リタル後表向ノ婚姻ヲ為ス筈ニテ夫々手続ヲ運フニ陸軍ノ方モ相応ニ面倒ナルニ新民法新戸籍法ノ実行以来区役所ニ於ケル戸籍吏ノ注文六个敷結婚届ハ漸ク一月一九日頃受理済ト為リタリ夫ヨリ双方ニ故障アリテ延々ニナリ居タル処双方ノ両親ノ名ニテ親族及ヒ親子ノ友人ヲ富士軒ニ案シテ長男長女結婚ノ披露ヲ為スコトニ相談一決シ今日午後三時ヨリ右西洋料理店ニテ立食ノ饗応ヲ為シタリ案内状ハ百枚許リ出シタルモ差支人多ク五〇人程集マレリ尤モ大築ノ父ハ頃日来不例ノ為メ母モ来兼ネタル故自分等夫婦ニテ彼等ノ名代ヲモ勤メタリ

二四　二〇〇〇落手　米相場ハ最上今挽六・四〇（朱点）新六・二〇（朱点）最下六・〇〇（朱点）位ノ由　福太郎ハ夫婦トモ本家勘太方ヘ引移リ債権者ヘ小屋及家財引渡シテ一段落付キタル後私カニ元ノ家ニ帰リ居レトモ不安心ナル故下小作致サ

セス小作望ノ者数人アレトモ母子カ怨言云フニ付キ極リ難ク去レトモ不仕付ハ決シテ致サヌ旨助次郎請合タル由〔朱書〕〔武二三〕

(30)

日　月

一　四　京都ニ開カル、院友会ニ赴カントテ出発名古屋ニ一泊ノ上京都ニ入リ大竹ヲ見舞始メテ祇園ノ掛茶屋夜桜ヲ観一輪モ咲カヌノニ嵐山ニ遊ヒ始メテ京都鉄道ニ乗リ大悲閣下ノ温泉ニ浴ス此頃雨勝ニテ興少ナシ帰路名古屋ニ藤田隆三郎ヲ訪五日帰宅ス

一四　右股膝ノ少シ左上ニ又候根太（血瘍）発シ佐藤三吉ノ切開ヲ受ク

一七　県税地租割三二一〔朱点〕・〇〇（一〔朱点〕・〇〇ニ付キ〇〔朱点〕・四〇ノ半額）村税凡ソ二二一〔朱点〕・〇〇回付ヲ請来ル飯岡村ノ分昨年度半期八二一〔朱点〕八三二対シ今年度ハ九〔朱点〕・六八八ニテ凡ソ二割増他村ノ村税モ同様ナラントノコト〔朱書〕〔武一六〕

二一　五〇〔朱点〕・〇〇落手　左ノ通仕付米貸遣ハス

一駄片馬　佐藤金太郎片馬ハ別家奥物次分

一駄片馬　但一駄旧袋米ヲ其侭向ケタルニ付キ帳合上ノミ　浅沼大吉

一〃片馬但同上　猿館命助

一〃　猿館政之助

片馬　福嶋栄助

片馬　福嶋清蔵

合計六駄片馬実際ハ四駄片馬〔朱書〕〔與惣治分片馬ノコトハ武五ノ一〕

本宅土蔵戸前漆喰塗、七七番ヨリ手水石引移、霜降松植替其他庭手入母家ノ下家根土蔵同栗三分板柾ニテ一寸六分足ニ葺替三六坪許ニテ三四〇〇位三〇年ハ請合ノ由　武治一二〇〇給ニテ県庁土木課雇ト為リタル趣〔朱書〕〔武二〇〕

三〇　昨年一〇月炎上ノ久昌寺再建資本トシテ一口〇〔朱点〕・〇三ノ寄附金ヲ募リ一个年三六〇〔朱点〕・〇〇十个年目ニハ利息共凡ソ五〔朱点〕・〇〇〇〔朱点〕・〇〇ト為リ旧本堂位ノ建築出来ノ見込ニテ総檀家五〇〇戸許ノ中四〇〇戸程寄附ヲ為シ自分ノ分限ニテハ二〇口モ引受タラハ然ルヘキ旨申シ来リ承諾ス〔朱書〕〔武二九〕

(31)

日　月

五　二　第六期地租穴口修繕費其他予備金ノ回送ヲ促シ来ル金太郎別家與惣治ハ仕付米片馬借受度申出タレトモ下小作人ノコト故直接ニハ許シ難シ乍去金太郎ノ作高ニテ一駄片馬ノ仕付米ハ不釣合ニ無之且前例モアルカ故承諾シタル由〔朱書〕〔四ノ二一ヲ見ヨ〕

八　出入明細帳一月乃至四月分送リ来ル〔朱書〕〔武一〕

所得金高届及納税管理人届去ル四日盛岡税務署ヘ差出シタル由此迄東京市ニ於テ納税シ来リタルニ新所得

(32)

税法ハ住所納税ヲ本則トスルカ故ニ盛岡ニテ納ムルコトニ改メタルナリ其書式ハ

所得金高届〔(朱書)〔九ノ一二p.40〕〕

一金弐百円　預ヶ金利子

一〃千五百円　歳費手当

一〃四千八百円　職業ノ利益

一〃百四拾円　東京市牛込区砂土原町貸家ノ所得

外ニ金百円　控除金

内

一金弐拾円　諸税金

一〃〃〃〃　管理費

一〃六拾円　修繕費

一〃参拾八円　岩手郡浅岸村田畑小作ノ所得

但合反別弐町八畝七歩、地価金四百五拾参円四拾四銭九厘　小作米参石壱石代金拾円(朱加筆)〔(九拾七銭後改)〕并畑貸賃金参拾円

外ニ

一金弐拾弐円　控除金

内

一金拾五円　地　租

一金四円　地方税

一金参円　村　税

一金拾(抹消)〔壱〕(加筆)〔九〕円　同郡同村山林ノ所得

但合反別七百参拾八町七反六畝弐拾四歩　地価金百

(33)

拾円八拾壱銭五厘

外ニ

一金拾壱円　控除金

内

一金四円　地　租

一〃壱円　地方税

一〃〃〃　村　税

一〃五円　管理費

一金弐百九円　同郡本宮村田畑小作ノ所得

但合反別拾町八反八歩　地価金弐千七百五拾五円七銭壱厘　小作米五拾七石五斗　壱石代金拾円

外ニ

一金弐百九円　控除金

内

一金九拾壱円　地　租

一〃参拾六円　地方税

一〃弐拾九円　村　税

一〃五拾参円　管理費

一金弐百参拾八円　紫波郡飯岡村田畑小作ノ所得

但合反別拾町五反壱畝弐歩　地価金弐千七百拾円七厘　小作米七拾参石五斗壱石代金拾円

外ニ

一金弐百参拾八円　控除金

内

一金八拾九円　地租
一〃参拾五円　地方税
一〃弐拾七円　村税
一〃八拾七円　管理費
合計金七千五百六拾円也
右之通相違無之候間此段及御届候也
盛岡市加賀野八十六番戸当時東京市
牛込区砂土原町壱丁目弐番地寄留
明治三十二年四月　氏名㊞
仙台税務署管理局長清宮質殿
従来差出シタル所得税納入地届ハ新法ニ依リ不要ト為レリ用紙ハ半紙

納税管理人届

拙者所得税金本籍地ニ於テ相納度ニ付キ住所菊池武平ヲ以テ納税者ト相定メ候ニ付此段及御届候也
住所寄留地番地
年月日　氏名㊞
仙台税務云々

一三

四〇・〇〇（朱点）落手（朱書）〔（武七）〕
二五・〇〇（朱点）落手　所得届今以テ何ノ故障ナシ　大吉家根修覆手伝願出タルニ付キ此迄半分ノ修覆ニ付テノ手伝ハ例ヲ聞カサル旨申遣ハシタルニ承服願下ケタル由〔（武一二）〕（朱書）
砂土原町三二年度前半期分府、市民税ハ左ノ如シ

二一

三・五五（朱点）　地方税家屋税
九・六八一（朱点）　市税家屋税付加
一・四二（朱点）　特別税家屋税

午前四時五十分女子誕生吾母多與ミネ母ツルノ片名ツヽヲ採リテたつト名ク両祖母相談ノ上ナリ

二九

過日笆ヨリ千里此頃遊蕩ヲ始メ家ニ帰リテハ何カニ付ケテ怒リ易ク母ヤ笆ニ向ヒ離縁スル旨公言シ媒酌三浦自孝及自分ヘ談判ニ参ルト云フ笆ハ飽マテ辛抱スル積ナレトモ右ノ次第内報スル趣申来ル自分ヨリ斯ル事ニ付キ返詞ヲ送ルハ宜シカラヌ故ニ濱ニ手紙ヲ書カセ辛抱スル所存ハ至極嘉シト云送レリ又其後来宅シタル時ニ此ノ如キ事ハ誰ノ家ニモ折々ハ有ルモノ且真実不縁ヲ欲スル者ハ面ト向テ言フモノニ非サレハ駭クヘカラス又自分サヘ正シケレハ怒ル、ニ足ラス兎ニ角此ノ如キ事ヲ轄スク内訴スルハ宜シカラスト申聞ケタリ

日月

六

六

たつ出生届ヲ頼ミ遣ハシタルニ夫ト行違ニ武平ハ仙台ヨリ石巻辺ヘ旅行シ前月末マテニ帰宅トノ端書到着シケレハ更ニ武治ニ宛武平ヘノ手紙ヲ開封ノ上速ニ届出ノ手続ヲ為シ呉ルヘキ旨ヲ書送リ置キタル所左ノ届書ヲ差出シタリトテ写ヲ送リ越シ且自分ヤミネノ生年月等ヲ諳ンセサルニ因リ戸籍抄本ヲ請受ケテ識ヲ補ヒ

(35)

タリ此ハ何カノ折入用モアルヘキカトテ亦送リ来セリ（朱書）〔（武治五）〕

出生届

寄留東京市牛込区砂土原町壱一丁目弐番地

岩手県盛岡市加賀野八十六番戸々主士族弁護士

父　菊池武夫

母　菊池ミネ

六女　たつ

出生　明治参拾弐年五月弐拾弐日午前四時五拾分

出生場所　東京市牛込区砂土原町壱丁目弐番地

右及御届候也

届出人

明治参拾弐年五月弐拾五日　氏　名　㊞

嘉永七年（抹消）〔六〕（加筆）〔七〕月弐拾八日出生

盛岡市戸籍吏清岡等殿

たつ出生日ハ弐拾壱日ナルニ弐日トシタルハ誤ナレトモ別段差支ナケレハ其儘ニ差置ク　戸籍抄本ハ左ノ如シ

岩手県盛岡市加賀野八拾六番戸　士族

前戸主亡父菊池長閑

明治拾四年六月八日相続

戸　亡父長閑長男

菊　池　武　夫

主　嘉永七年七月廿八日生

(36)

七

明治二十九年七月一日東京市麻布区飯倉片町

三十一番地士族水野加以智妹亡父忠雄二女入籍妻

ミ　ネ

安政五年四月七日生

自分ノ生年月ハ父君ノ遺書ニ両様ニ記載アリ他ハ安政元年九月二十八日トアリ年齢早見法ニ従テ算勘スレハ九月ノ方正シキカ故ニ近頃ハ九月ト定メ居タルニ戸籍面ハ矢張七月トアル由ナリ妻ミネノ生年月モ安政六年ト心得居タルニ五年トアリ此ハ一年ノ差ナリ（朱書）〔（七三）（一七三）（加筆）〕ページ〕

五六日前田植始マリタルニ米価却テ下落今挽上等六・一（朱点）〇乃至五・八（朱点）〇位煎餅糯極上七・〇（朱点）〇乃至六・六（朱点）〇位糯ハ更ケ易キ此際売却然ルヘシ　本邸内畑三〇〇坪ハ乙部吉太郎ニ貸来リタルニ近年手入行届カス一・一（朱点）〇ノ小作料モ不納勝取返ヘス方然ルヘシ目下ノ相場ハ坪〇・〇（朱点）一五位ノ由　山守三右衛門ノ長男ハ旧臘病死孫ハ二五歳位ナレトモ人分知ラス村松ハ極老ト云フニ非ネトモ子供等評判宜シカラス後年不安心ナルニ因リ今ノ中ニ候補者ヲ選定スル方然ルヘキニ浅岸ノ小作人上村喜藏ハ此方ノ持山ト嶺境ニ山ヲ所有シ居リ実子ハ実体ノ仁ト見受クルニ付キ同人ヲ見習ニ仕立テハ如何ト問合ハセ来レリ　山ノ案内知リタル者ヲ山守ニスルハ宜シケレハ隣接ノ山持ハ利害ノ関係深キカ故ニ危険ナシトセス篤ト人分ヲ見定メテ後ニ取極メル方ト答タ

リ〔(朱書)(武六)〕

九　昨日味噌二樽北上会社汽車便ニテ送出シタル趣一樽ハ事務所宛ナル由〔(朱書)(武八)〕

一六　横濱幾慶上京ノ便ニ托シ妻見舞トシテカタクリ落雁一箱武平ヨリ贈リタリトテ幾慶持参セリ

日月

七

三　従来二七銀行ヘ乙種当座預ケト為シ置キタル金一五〇(朱点)・三九ノ利子ハ何時モ五(朱点)・〇〇足ラス其儘預ケ足スコトモナラス詰ラヌ故残ラス引出シ前月マテノ利子二口ニテ五(朱点)・七二ヲ合セテ一五六(朱点)・一一ナルヲ操以下三人ノ名前ニテ三菱合資会社銀行部ヘ預ク操ト鶴ノ分ハ一〇〇(朱点)・〇〇トナル様ニシ其余ハ赤坊たつノ分トセリたつノ預金通帳ハ此度新タニ請取リタルモノニテ第甲四七参壱番ナリ分割高左ノ如シ

五〇(朱点)・〇〇操　七五(朱点)・〇〇鶴　三一(朱点)・一たつ〔(朱書)(前々ノ旧帳一九八)〕

久昌寺ヘ奉納シ置キタル燈籠昨秋ノ火災ニテ破損シタルニ付キ修覆シ貰度旨住職ノ願アリ聞済タリ　予備金回付請求春来気候順当麦作ハ近年稀ナル上作ニテ米価ハ日増下落スルカ故ニ今ノ中売払テハ如何ト問来ル上村喜藏長男ヘ山守見習申付タリ兼テ村松三右衛門ヘモ此趣申聞ケ置キ彼等ノ感情ヲ悪シクセヌ様取計タリ

新見習ハ村松ノ子三右衛門ノ孫同道ニテ山境見分スヘク多分旧七月頃ナルヘシ〔(朱書)(武二)〕

五　明六日ヨリ当座預金利足ヲ日歩〇(朱点)・〇一四トスル旨二七銀行ヨリ通知アリ

二〇　明治火災保険株式会社ニ支払フ事務所ノ保険料ハ従来五一(朱点)・〇〇ナリシニ競争ノ結果ニモヤ今年ヨリ三九(朱点)・〇〇ニ引下クル旨同社ヨリ通知アリ

二八　昨暮収納米〔(抹消)ノ内〕二一六駄片馬三斗五升ノ内

四駄片馬　大吉外五人ヘ仕付米貸

三駄片馬　武平ヘ賞与

二〃〇〇　助次郎ヘ虫害手当

一〃〇〇糯　六月九日売払

〇片馬糯　武平及乳母ヘ歳暮

合計一一駄

差引残米二〇五駄ト端米トル一五五駄ハ毎駄六(朱点)・〇〇ニテ九三〇(朱点)・〇〇ニ五〇駄ハ毎駄五(朱点)・九〇ニテ二九五(朱点)・〇〇ニ売払ヒ合計一,二二五(朱点)・〇〇盛岡銀行送金手形ニテ送リ来ル尤モ端米ハ鼠喰等ニ因ル減量ノ足シ米トセル由板倉奥積ノ分ハ更ケ方烈シキニ因リ駄ニ付キ(朱点)・一〇ツヽ直引シタル趣〔(朱書)(217)〕

昨夏帰国ノ折書改メサスルカ為メ小作証ノ大部分持参シテ武平ニ預ケ置タル処其後何等ノ申出ナキニ因リ問遣ハシタルニ孰レモ認メ替済ナレハ好便ニ送ルト申来ル〔(朱書)(武二七)〕

(38)

畑ノ地価ハ修正セラル、筈ニ付キ随テ地租モ〔抹消〕〔減少〕変更セラルヘシ幾許ニ定メラレシヤ問遣ハシタルニ尚ホ取調中ナル由

納税期ハ近来変更セラレタル様見ユルニ付キ尋ネタル処県税、市税ハ四・一〇ノ両月村税ハノ四・九ノ両月ナル旨申来ル

邸内貸畑引上ノ筈ノ処〔〔朱書〕〔六ノ七ノ部〕〕跡貸付ノ都合上暫ラク従来ノ儘差置ク旨ナリ〔〔朱書〕〔武二七〕〕

一五　日

八　月

六月中鎌倉ニ貸家ヲ探シタレトモ見当ラス七月初ニ奥津ニ赴キタレトモ矢張失望ニ終リタリ元来濱ハ長血ノ為メ極メテ貧血ト為リタルカ故ニ海辺ニ出養生ヲ要スル旨主治医中嶋ノ勧アルニ因リ詮議ヲ始メタルニ其後便所ニ通フ途中卒倒シ直チニ蘇生ハシタレトモ容易ニ旅行出来ソウモナキカ故貸家アリタレハ迚致方ナケレハ中絶シ置キタルニ追々元気付テ近所散歩モ差支ナクナリタレハ此月初メニ鎌倉三橋ノ一室ヲ借受クルカ為メ母君出張セラレタル処矢張然ルヘキ空部屋ナカリシカ三橋主人ト向角ナル蔦屋主人ノ世話ニテ大仏道ノ中程南部伯別荘ノ前ナル百姓家ノ二室ヲ月二〇〇〇ニテ借受ケラル、様ニ運ヒタリ然ルニ母君ハ耳疾ニ罹ラレ二三日ニテ治ラントノ見込当ラス追々長引クニ香一郎操

(39)

抔学校通ノ輩モ行カント云ヘハ行テ直クニ帰ル様ニテモ面白カラネハ母君ニ代リテ濱、香一郎、操、ト昨日信州ヨリ富士山ヘ登リテ戻リタル啓麿ヲ伴ヒ午後一時四十分ノ汽車ニテ出発シタリ鎌倉停車場ニ着テ見レハ三橋主人鶴見（蔦屋）番頭ト出迎居リ甚タ申訳ナケレトモ三橋番頭ノ失策ニテ約束ノ家ヲ昨日ヨリ一週間弾琴家山勢トヤラヘ貸シタリ〔抹消〕〔卜云フ〕〔加筆〕〔就テハ〕俗ニ金吾様ト唱フル庵寺〔加筆〕〔収〕玄〔抹消〕〔妙〕庵ヲ掃治シ置タレハ夫処ニ休息セラレ若シ気ニ入ラスハ三橋ニ宿ラルヘシト云フ一旦約束済ノ家若クハ室ヲ直段ニヨリ他ヘ貸替ヘル悪風近頃行ハル、由伝聞セルニ此モ果シテ其手ナリヤ否ヤ分ラネトモ甚タ不都合ナル次第ナリ左レトモ東京ヘ引返スモ馬鹿ラシケレハ兎モ角モトテ玄妙庵ニ到テ見レハ今シモ後庭ヨリタ日ハ日覆幔幕ヲ洩リテ座敷二間ニ照込ミ〔加筆〕〔汚レタル〕古〔抹消〕〔□□〕畳ハ〔抹消〕〔一〕〔加筆〕〔特〕種ノ臭ヲ放チテ愈ヨ不快ヲ催サシメタリ今朝早ク来リタル〔抹消〕〔齊□〕佐々木キクハ家ハ変リ茂七ハ来ラ〔抹消〕〔ス〕〔加筆〕〔ヌ〕為メ茫然ト待受ケタリ先ツ約束ノ家ノ明クマテトテ持来リシ荷物ヲ解キ抔スル中ニ茂七モ兼テ預ケ置キタル勝手道具其他ヲ荷車ニ積ミテ持来レリ夜食済蚊帳釣ラレ除々寝ニ就カントスルニ頃日来ノ強南風猶未タ収ラス開放シニテハ子供ニ涼シ過クルカ故ニ障子ヲ建サセントシタル満足ニ箝マルモノ少ナクガタ々々スル雨戸ヲ閉チサシテ臥シタリ

翌日約束ノ家ナリト云フヲ道路ヨリ眺メタルニ前室ハ東ニ面シ後室ハ西ニ面シ朝夕ノ日ヲ受クルコト〔収〕(加筆)玄〔妙〕(抹消)庵ニ異ナラ〔ネトモ〕(加筆)〔スシテ〕南ハ全ク塞カレリ庵ハ西向ノ室二東向ノ室一外ニ東西室ノ間ニ物置ニ用フヘキ室アリ東室ノ前ニハ入口ノ土間長ク突出シアリテ朝日ハ余リ苦ニナラス西室ノ縁側ハ南ニ折曲リテ些少ナカラ南風ヲモ引入ルヘシ畳ノ表替ヲシテ月一六〇〇ニテ貸サント云〔ヘ〕(抹消)〔フ〕(加筆)下女キクノ意見ヲ問タレハ此方ハ勝手ノ都合モ彼方ヨリ好シト云フニ付キ此処ニ落着クコト、ロリ大仏道ノ家ヨリハ海ニ近キコト四五丁ニテ水浴ノ便モ宜シ

二一　用事出来テ帰京シタルニ母君ハ病癒タリトテ鶴ト大築笆ヲ伴ヒ十二時半ニテ出発セラレタルニ付キ其儘滞京ス貞モ翌朝駒ヶ嶺良太郎ヲ伴テ鎌倉ニ行タレハ夫婦ハ赤坊タツト共ニ留〔ニ〕(抹消)〔ニ〕(加筆)〔守〕居ヲ為〔シ〕(抹消)〔ス〕(加筆)

二八　過ル二八年一〇月二五日伊藤悌次ニ用立タル二一(朱点)・三〇〇(朱点)・〇〇ハ今日皆済ト為リタルニ付キ同人ノ都合次第何時ニテモ其宅地抵当ノ登記ヲ取消スヘキ旨申送ル〔(朱書)〔(新帳29旧帳347)〕〕

二九　昨三一年法律第三一号田畑地価修正法律ニテ岩手県ハ畑地価ノミ修正セラル、コト、ナリ〔タル〕(加筆)処所有ノ分ニ付テハ何程ノ差生シタリヤヲ問遣リタルニ加賀野ヲ始メ各処ノ持畑一筆限〔ニ〕(抹消)〔ノ〕(加筆)畝歩地価改正地租調即チ市村役場備付ノ土地台帳謄本ヲ送リ越シタリ右ノ中向中野一八地割三三番畑返四反九畝一歩及ヒ赤林二地割七〔七〕(抹消)〔三〕(加筆)番上野一反一畝三歩ノ地租ハ地価ノ三歩三厘ニ当ラヌ故誤写ニ非サルヤヲ問返ス

真木一一二間五〔歩〕(抹消)〔厘〕(加筆)ノ山役銭三三六一五収入アリタリ

前月二〇日土用入ニ雷雨降雹以来五〇日近ク快晴ノ日トテハナク暑気ハ相応ニアレトモ出穂ハ後ル、由

(40)

日　月

二九　東京法学院々友会東北支部会ヘ赴クカ為メ奥田義人江木衷戸水寛人田中文蔵ト共午前七時過上野ヲ発シ仙台国分町菊平ニ一泊翌三日午〔後〕(抹消)〔前〕(加筆)伊達家ノ廟、林子平、支倉ノ墓〔ヲ〕(抹消)〔ニ〕(加筆)詣テ午後ハ椹翠館ニ於ケル講談会及支部会ニ臨レテ同処ニ泊翌四日ハ岩切ヲ経テ塩釜ニ到神社に詰タル後舟ヲ僦フテ松島ニ赴キ瑞巌寺ヲ観松ホテルニ於テ昼食ヲ調ヘ松島停車場ヨリ仙台ニ帰ル同行院友小松林蔵ノ案内ニ任セ清水小路ナル橋本屋ノ支店ニ晩餐ヲ為シ給仕小女等カ主婦ノ三味線ニツレテ躍ル塩釜甚句一名ハツトセー踊サンサ時雨踊ヲ見テ椹翠館ニ帰臥ス仙台ニテハ〔猶〕(抹消)〔尚〕(加筆)ホ蚊帳ヲ用ヒタリ翌四日戸水、田中ト共ニ岩沼ヨリ左ニ折レテ常磐線又ハ海岸線ト称スル方ヲ通ル昨年ハ家族同伴ニテ矢張此日ニ此鉄道ヲ過キタリ平町ニテ院友新田目善次郎新井

秀夫外一名出迎ヒ水戸土浦ヲ経テ無事帰宅

一二　去月末問合遣リタル二筆ノ地租高ハ誤写ニモ違算ニモアラス地価ノ(朱点)・〇二五ヘ其(朱点)・〇〇八ヲ加ヘ四捨五入ヲ行タル高ナル由吾算法ハ地価ニ〔直(加筆)チ(朱点)ニ〕・〇三三ヲ乗シタルカ故ニ〔成(抹消)ル程〕成果ハ異ナレリ収税署ハ地価ノ(朱点)・〇三三ト云ハス(朱点)・〇二五ト(朱点)・〇〇八ナリト云フ成程法文ニハ千分ノ八ヲ増徴ストアレハ署ノ解釈ヲ容ル、カ如シト雖トモ議会ハ百分ノ三歩三厘ノ積ニテ協賛シタルカ故ニ此解釈若クハ法文ハ余リ巧妙ニ過クルカ如シ先般届出置タル所得金高ノ内田畑ノ収入ハ一石ニ付キ一〇(朱点)・〇〇ノ割ニテ算出シタル〔ニ(加筆)〕前三年間ノ平均ハ一〇(朱点)・九七ナル趣且地租ハ(朱点)・〇三三ノ割ニテ計算シタル二(朱点)・〇二五ナル由ニテ届高ヨリ四六〇(朱点)・〇〇増シタリ平均石代ハ左モアリナンカ田畑地租ノ増率ハ修正地価実施ノ日ヨリ適用セラル、定メ(三一ノ法第三二号附則)ナルニ此日ハ明治三二年一月一日ナル旨公布アル(三一勅第三六一号)カ故ニ(朱点)・〇二五ナル筈ナキカ如シ兎ニ角仙台税務管理局長清宮質ハ八月二十七日付ヲ以テ第三種所得金八千弐拾円ナル旨ヲ通知シタリ〔(朱書)(五ノ八p.31)〕福嶋栄助ノ作地用水堰橋架換ニ付キ木材代、工賃トモ四(朱点)・二二渡シタリ

入梅ノ頃ハ照続キタルニ此一月半余ハ降リ続ニテ出穂アルモ実入悪シキ由又赤痢大流行ニテ武平隣家ニモ死人アル由〔(朱書)(武一一)〕

一八　総下家柾葺朽損ニ付キ葺換ネハ冬凌覚束ナク門馬柾ヲ用フヘキ処右品払底ニ付キ〔□(抹消)〕雫石産杁柾ヲ以テ破損ノ个所ノミ修覆シ置クトノコト一〇月下旬船越長度上京ニ付武平モ同行シ度旨申来ル〔(朱書・抹消)(武一七)〕去ル九日以来快晴ト為リタレハ平年ニハ劣ルヘキモ作合サシテ悪カル間敷由〔(朱書)(武一七)〕

三〇　東京市税ナル今年一月ヨリ五月マテノ所得税附加金二九(朱点)・二四今日限リ納ムヘキ旨ノ賦課令状牛込区長ヨリ盛岡市役所ヘ回ハシタル由ニテ武平ヘ届〔ケ(抹消)〕〔キ(加筆)〕タ〔ン(抹消)〕〔リ(加筆)〕トテ送リ越ス〔(朱書)(武二九)〕

日月

一〇　七　猿舘命助住家ノ家根大破ニ付キ葺換度〔旨(加筆)〕三〇年秋申出タリシカ異作ノ為メ延ハシ此度実行スルニ付キ米片馬遣ハスヘキ処正米ナキニヨリ其代金三五〇恵与スル旨申来ル〔(朱書)(武六)〕

一七　一四日鎌倉連（母君、濱、鶴）見舞ノ為メ同所ニ行今夕帰宅シタルニ去月三〇日ノ風雨ノ折西向ノ崖地ノ内高キ部分ノ南端滑リ落チタレハ其修覆方考案中過ル一五日ノ大雨ニテ北端ノ一部ヲ残シテ其余ハ亦モ滑リ落チ居タリ前後両度ノ風雨ニ庭樹重モニ松ト檜ハ吹倒サレ家根西端ノ棟漆喰及ヒ軒近ノ瓦、西向ノ両樋ハ吹落サレ又ハ捩チ断テ吹飛サレ、長家廻リノ建仁寺垣并

(42)

表門右側ノ板塀ハ吹倒サレトモ此等ハ格別ノ傷ミニモアラネトモ崖ノ崩レタルニハ殆ント閉口シ土木業服部長七ナル人ニ工事ノ考案ヲ委嘱セリ

二四　後期地租割及追加三七・〇〇（朱点）第二期地租一八・〇〇（朱点）請求シ来ル

松尾前新田ノ収穫米ハ昨年ヨリ一二、三束相増シ一七四束苅取リタル由新田〔一〕（抹消）〔八〕（加筆）五三年間毎年増穫アルモノト云フ〔（武二三）〕（朱書）

日　月

一一

三　東京法学院院友会関西、名古屋両支部ノ連合会ヘ出席ノ為メ朝六時二十分ノ急行列車ニ乗リ名古屋ニテ関西鉄道ニ乗変ヘ夜十一時頃奈良ニ着

五　午後大阪鉄道ニテ大阪ニ出テ更ニ阪堺鉄道及南海鉄道ニテ紀伊和歌山ヲ経テ和歌浦蘆辺屋ニ着

大築千里〔笆〕（抹消）ハ過般京都帝国大学理科大学助教授ニ任セラレタルカ為メ去月末一年志願兵ノ役期満タルヲ以テ妻笆ヲ伴テ今日出発任地ニ赴ク

七　母君、濱、鶴鎌倉ヨリ帰宅ス濱ノ長血亦始リテ収マラサルカ為メ医療ノ便ヲ謀リ静カニ連戻リタリ元朔ノ説ニ従ヒ築地栄女町ノ医浦嶋ノ治療ヲ受クルコト、シタリ

八　六日夜ハ和歌山富士屋ニ泊リ七日夜ハ名古屋志那忠ノ新築西洋旅館ニ宿リテ今夜帰宅ス明日ノ観菊御宴ニ列センカ為メ今ヲ盛リノ京都ノ紅葉ヲ見スシテ帰ヲ急キタルニ妻ハ吾帰京ノ日取不定ナレハ迚御断リヲ申上ケタル由間ノ抜ケタル心地ス

秋荒続ナルニ拘ハラス旧福太郎作分目下助次郎等引受分ノ小作米一〇駄去ル〔六〕（抹消）〔五〕（加筆）日ニ初穀入アリ乾燥モ充分ナル由〔（武六）〕（朱書）

一二　炭竈銭八・〇〇（朱点）収入　予備三〇・〇〇（朱点）請求〔（武一一）〕（朱書）

二〇　近頃咳出テ、息マス以前ハ確ト記臆セサレトモ明治二六年三月インフルエンザニ罹リタル〔折〕（加筆）咳ヲ患タ〔リ其後咽頭〕（抹消）〔ル〕（加筆）為メ断然喫煙ヲ廃シタリ其後（加筆）時折咽喉ニ故障起リタルモ咳出タリトモ覚ヘス此度宮本ノ調剤ヲ服シ居タレトモ感応ノ模様ナケレハ駿河台耳鼻喉専門医金杉英五郎ノ治療ヲ受ク元来吾胸膈ノ発達充分ナラス且昨年ナリシカ頸部ニ瘰癧ラシキモノ現ハレタルコトモアリ亡父ハ久シク喘息ニ苦ミタレハ旁咳ノ出ルトキハ用心スルニ若クハナシト思フ疾ヲ得テ死スルハ兼テ覚悟ノ前ナレトモ家族ニ長ク看病ノ労ヲ執ラセ又ハ之ニ累ヲ及ホスノ惧アル性質ノモノヲ患タクナシ吾ノ如キ貧血性ハ卒中ヲ望ミ難シ唯肺病抔ハ避ケタク思フノミ

(43)

日　月

一二

一　横濱幾慶出京ノ便ニ托シテ左ノ小作証文送リ越セリ

明治三一ノ九　藤村助治郎
〃　佐藤金太郎
〃（抹消）三二ノ四　佐藤勘太
〃　三二ノ四（旧佐々木福太郎分）　高橋仁左衛門
〃　三一ノ九　長沼長兵衛
〃　藤村助治郎
〃　浅沼大吉
〃　猿舘命助
〃　一五ノ八　福嶋栄助
〃　二九ノ一　福嶋清藏
〃　一五ノ八　佐藤治太郎

右ノ例文ハ左ノ如シ

右地所私預リ手作仕候処（抹消）〔実正也〕相違無御座候小作米ノ義ハ精々相撰上米ヲ以テ年々十一月中貴殿御差図ノ通リ何方ヘナリトモ急度上納可仕候万一相滞候ハヽ、私持馬并ニ馬屋肥杭長木梁下家財御引取可被下候其上不足御座候ハヽ、請合ノ者相弁上納可仕候若及延引候ハヽ、御催促何人成共御附可被下候其節ハ御賄仕候上日雇銭壱人ニ付金弐拾五銭宛御渡可申候右ニ付一言ノ子細申間敷候尤凶作其外虫喰青立等ノ節ハ貴殿ヘ御断リ申候間御見分ノ上鎌入可仕候万一自儘ノ義仕候ハヽ、貴殿御存分ニ御取扱可被下候依テ小作証書如件

前月二七日迄ニ附込タル小作米ハ左ノ通リ

三六　五三（朱書）〔駄斗升〕　助治郎
一　三七　畑返新田増石　〃
一〇　一四七（朱書）〔合〕　（抹消）〔金太郎〕（加筆）〔〃外三人〕
（旧福太郎分）
三二　三七　残七四九一（朱書）〔駄斗升合〕（六二一一三七〇）小作米仕付米　金太郎
九　三七　〃六一〇〇（朱書）〔駄斗升合〕（六一〇〇）米小豆　榮助
六　〃六三七〇　清藏
二　三七　〃三一　大吉
三五　治太郎

一　蕎麦

未納　二一四（三三）（抹消）（朱書）〔駄斗升合〕五〇　米小豆　命助

松尾前ハ束数増タレトモ実入宜シカラス昨年ノ出籾四升七合八勺ニ対シ四升一合五勺ニテ一斗一升ノ減（獲）獲ニ当ル右ヲ地頭五分五厘小作人四分五厘ノ割ニテ五分五厘挽即チ四分五厘ノ挽減アリトシ玄米二駄七斗三升四合ト為ル右ハ近日附入ノ積　糯米ハ一般宜シカラス大吉納一駄ノ内一俵ハウル米納ニ致シ呉度願出又金太郎納糯米一俵ハ武平始メヘ歳暮ニ贈ル為メ白米ニテ納メサセ来リタルニ今年ノ分ハ非常ニ槝減アルヘシトナリ（朱世）〔武一一ノ二七〕

一六　命助小作米三駄仕付米一駄片馬栄助小作米二駄仕付

米一駄ノ外収納済（詳細ハ来一月ノ部ニ譲ル）大場振舞ハ年始祝ト一緒ニ開ク　鍬頭、山守、忠治ヘノ歳暮雑穀ノ分配、早納賞与共例年ノ通リ取計フ　山王畑代金三〇・〇〇（朱点）収納　勝手入口敷居及敷板半坪腐朽ニ付キ修繕ノ見込〔（朱書）〔武一五〕〕

二　〔（抹消）〔〇〕（加筆）〔一〕〕本宅ノ諸建物即チ〔（加筆）〔イ〕〕住宅木造瓦葺二階建一〇六坪七五二階一五坪五合時価八，一〇〇（朱点）〔（加筆）〔ロ〕〕「倉庫、土造瓦葺総二階建六坪価一，五〇〇（朱点）（ハ）物置木造板葺五坪時価六〇（ニ）車夫部屋木造瓦葺平家建七坪価三〇〇（ホ）車置場木造柿葺平家建四坪価四〇合計金壱万円ヲ保険金高トシ明後一八日ヨリ翌三三年一二月一八日正午マテ保険料年額八五ニテ東京火災保険株式会社ト契約シ東第三一七五一号保険証書ヲ請取ル〔（朱書）〔15/12/33, p.101〕〕

三　昨年末帰省シタル大築千里、榊原周次郎来ル

昨年度小作米及返納仕付米ノ収納ハ左ノ通

〔（朱書）〔駄斗升合勺〕〕

三八	一六〇〇		藤村助治郎
三八	四九〇〇	小作	佐藤金太郎
一	三七〇〇	仕付米返納	
一〇	一四七〇	（旧佐々木福太郎分）	藤村助治郎外三人
三三	三七〇〇		
一	三七〇〇	仕付米返納	浅沼大吉
二七	〇〇〇〇		猿舘政之助
一	〇〇〇〇	同	
一五	三七〇〇	外ニ小豆一斗	福嶋榮助
	三七〇〇	同	
一二	三七〇〇		福嶋清藏
	三七〇〇	同	
二一	〇九三〇	外ニ小豆五升	猿舘命助
一	三七〇〇	同	

(45)

明治三十三庚子年

日　月

一　朝香一郎ハ食事前ニ早出シ貞、操ハ続テ学校ヘ行クカ故先ツ雑煮餅タケヲ済シ屠蘇酒ハ学校連皆帰リテノ後ニ譲レリ山田龍子、那珂通世、真鍋波子、大築尚志、南部信方、ヘ廻礼午飯後三浦自考、佐竹チカ子、田中栄秀、本宿ツネ子ヘ回礼ノ後三時頃御所ヘ参リ拝賀ス曇天故カ両陛下ノ御座所辺薄暗クテ遺憾ナリシ

一　同打揃フテ屠蘇酒ヲ祝フ近隣及柏井登ヘ廻礼ノ末南部伯邸ヘ参リ祝詞ヲ述フ新井、細谷、宮沢、吉川来ル

（小作米片馬未納永借ノ事ニ聞置）

〇三五〇　外蕎麦一駄　佐藤治太郎

五〇〇〇　上村喜藏

二〔四四〕（抹消）〔七〇〕（加筆）四　中野仁助

合計
二一一　四六四　米　（小作米返納米　二〇五〇九四　六三七〇）（朱書）（駄斗升合）
一　〇〇〇　蕎麦
一五〇　小豆

外ニ
三〇〔円〕（朱書）〇〇　畑代

一一

過日送リタル四〇・〇〇（朱点）落手シタレトモ尚ホ一五・〇（朱点）〇ヲ請求ス〔武九〕（朱書）

昨臘横濱幾慶ニ托シテ送リ越セル小作証中左ノ相違アリ依テ助治郎金太郎ノ小作証送リ返〔ス〕（抹消）〔シ〕（加筆）尚ホ一五・〇〇（朱点）モ送ル

地割	番号	字	地目	反別	小作証反別	人名
一五	九ノ二	幅宅	三一二畝	三一〇畝		佐藤金太郎
〃	六四ノ一		田	九二二五	九二一五	藤村助治郎
一八	二九	畑返	〃	八二〇五	八〇二五	〃

咳尚ホ全治セス鶴ハ昨臘胃悪キ由ニテ打臥シ年始ニ起キタレトモ三日ニカ又床ニ就キタルニ麻疹ノ軽症ナルモノト判レリ最早熱ノ頂ヲ経過セリ貞ハ昨日ヨリ感冒ノ気味ニテ引籠リ濱モ五日頃ヨリ又臥床ス尤モ悪クナリタリトニハ非ス

一二

横濱幾慶ハ先般武平ヘ送リタル助次郎、金太郎ノ小作証訂正ノ分及松尾前畑返分ノ田成反別地価地租ノ問合ニ対スル地目変換届写ヲ持参ス尤モ右地租ハ明治三一年ヨリ向五个年ハ矢張畑ニ対スル旧高ヲ徴〔ス〕（抹消）〔シ〕（加筆）筆唯納期ハ田租ノ期ニ従フ由

地目変換届

陸中国盛岡市
大字志家

第三地割八十六番
字松尾前
朱書
元一等畑反別弐反七畝廿七歩
此地価金六十一円九十三銭八厘
此地租一円五十四銭八厘
一四等田成反別弐反八畝十三歩
内反別十六歩丈量増
外反別弐畝歩　畦畔
此地価金百弐十弐円三十七銭（反金四十三円三銭八厘　同地利八十六番ノ一四等田ニ比準）
此地租金三円五銭九厘

右ハ今般地目変換致候ニ付地価修正相成度丈量図相添此段御届候也

盛岡市加賀野八十六番戸当時東京寄留
右地主菊池武夫代人
菊池武平〇

明治三十一年五月廿三日

仙台税務管理局長那珂通文殿

日　月
二　二

だい四き　ちそきん　四一(朱点)・〇〇　よびきん　一五(朱点)・〇〇　つがふ　五六(朱点)・〇〇　にふよう　かねて　たのみつかはしおきたる　イちかは　の　はなまがりしほびきさけ　は　いつから　いつに　なく　かへりて　ネむ(抹消)〔ら〕(加筆)〔ろ〕さん　など　さかなや　の　みせにかざりある　よし　あるひとの　はなし　に　せんねん　の　つなみ　このかた　イちかは　に　のぼりるを　すくなく　かつ　むかしは　しほ　を　なんべんも　しかへたるに　いまは　しかせさる　ゆへ　でもの　ありたれは　とて　いぜんのごとく　あぢよきしほびき　あるへからず　となり(朱書)〔〔タけひら二ノ一〕〕

日　月
三　三

マがき　の　ひな　へりたるに　つき　タつの　ぶん　かひたして　れいのごとく　ざしきの　にしかはに　ひなだん　とりたて、　かざり　テいやかういちらう　まで　ひなさま　の　ちひさき　ぜんわんにて　しよくじ　を　なしけるに　ミさほ　のみ　はかぜひきて　ば、さま　の　六でうのま　に　とぢこもり　ねて　さしき　には　えゆかず

五

だい五き　ちそきん　四二(朱点)・〇〇　よびきん　二〇(朱点)・〇〇　つがふ　六二(朱点)・〇〇　おくりくるへき　よしまをしこす　また　オほた七らう　の　もちやしきと　わが(抹消)〔六六〕(加筆)〔七七〕ばんこ　と　かうくわんせんとの　はなし　は　しばしば　ありて　しばしば　やみたるに　オほた　の　は、なるひと　きたりて　われ　に　い　なきや　を　とひきたる　わがかたにはたてもの　あるに　かなた(抹消)〔に〕(加筆)〔の〕は　さらち　なれば　このぜんには　一二〇(朱点)・〇〇　うちきんせば　とまで　はなし　す、みたりをる　ゆへ　このたび(抹消)〔は〕(加筆)〔も〕それにて　よきや　と　たつねたる　おもむき　くわぶんの　うちきん　を　もとむるには　あらねとも　いぜんよりは　しよぶつか　とうきしたるには　さうゐ　なければ　いまの　さうば　に　みつもりて　へんたう　を　すべきむね　まをしやる　みぎ　くうち　と　八六ばんこ　せきばた　との　さかひがき　そんじたるに　つき　ひばがき　に　しかへたきむねも　まをしきたる(朱書)〔〔タひ四〕〕

一〇

ご、一じ　レいがんじま　しゆつぱん　の　ふね　にて　きさらつ　にゆ(抹消)〔く〕(加筆)〔き〕よくじつ　かへる
ハま　の　しゆつけつ　や、　をさまりたれは　このまに　しきうに　しゆじゆつ　を　ほどこす　はうしかるべき　むね　か、りい　ウらしまが　いふに

大築　伏見稲荷　桃山　男山八幡 (49)

八

まかせ　ツきぢ　なる　ウらしまびやうゐん　に
いれたり　つきそひ　は　さんば　カもざはユき　な
り　びやうゐん　は　せいやうれうりや　せいやうけ
ん　の　にしどなり　に　あたる
二がつじふ一にち　には　まだ　さむかりし　ゆへ
じふ二じはん　の　きしや　にて　たち　シつをか
の　だいとうくわん　どまりにて　ナごや　に　ゆ
きしが　キさらつゆきの　ため　このたびは　いたし
かたなく　さくじつ　あさ六じ　二〇ぷん　の　きう
かうれつしや　にて　きたり　れいの　ごとく　シな
ちゆうほてる　に　いつぱくし　こん　ごゞ一じ五ふ
んの〔抹消〕〔にて〕　くだりぎしや　に　のりたるに　セきが
はら　より　ヒこね　へん　までは　ゆき　ちらづき
たり　マいばらにて　オほつき　ふうふ　へ　てんぽ
う　を　うたんとしたるに　その　しゆくしよ　を
しかと　おほへず　とゞかねば　それまでと　かくご
してカはらまちどほり　イしやくし　として　さした
したり　七じすこしすぎ　きやうとほてる　に　つき
みれば　でんしん　とゞきしと　みえ　ふうふとも
まち　ゐたり　ともに　ばんめし　を　たべなどして
一〇じころまで　はなしあへり　マがき　の　はら
だいぶん　おほきくなりて　はしごだん　のあがり
おり　めいわくなりと　いふにつき　したの　おうせ
つま　にて　はなしたり　されど　いたりて　すこや

笆出産準備　薫肺炎　八六番桧葉垣　常盤線 (50)

一三　一〇　九

かなる　おもむき　わがめにも　しか　みへし
チさとが　ツきのせ　へ　どうかう　せんと　いへ
ど　キやうとにても　ときをり　ゆき　ちらつく　ほ
となれば　こゝろもとなく　けさ　ウへの　の　ソが
ちゆう　へ　でんしん　にて　とへやりたり　その
へんしん　きたるまで　たいくつ　なれば　ヲとこや
まはちまん　へ　まうで　フしみ　へ　まはり　モも
やま　に　のぼり　さらに　イなりしや　に　さんけ
いし　ホてる　に　かへれば　じふ四、五にちが　み
ごろ　との　へんしん　あり　それ　を　しらせ　か
たがた　オほつき　を　たつねたれは　すまゐ　は
あんくるい　よく　ふうふ　には　ひろすぎる　くら
ゐなり　タなか　の　スてこ　ゐあへり　オほたけ
をも　みまひ　ナがとし　を　まねきて　ホてる　の
ばんしよくを　さしだしたり
八じごろ　の　きしや　にて　カうべ　の　シやう
セいじらう　オほさかの　ナかはしトくごろう　など
どうしやし　よる　一一しごろ　かへる
一七　三三ねんど　こうはん　しよとくぜいきん　一〇
〇・二五（朱点）　えうきうし　きたる　さくてう　一〇じは
んごろ　モりをか　に　きやうしん　ありたる　よし
一〇か　に　おくりたる　きん　五二一〇〇（朱点）（朱書）（タ、ヒ一二はがき）　一四
か　の　一〇〇・二五（朱点）　いつれも　まさに　たうちや

く したる よし 一四か の よる より ゆき
ふりどほし なる おもむき ことしは いつこも
きこう おくれたり〔朱書〕〔タ、ヒ一六はがき〕

一九

あさ 七じはん ウへの はつ の きしや にて
せんだい へ たつ オうしうせん の れつしや
は しゆつぱつ じこく ふつがふなる のみなら
ず シらかは へん より さきには せきせつ あ
りて さむき よしに きこゆれば てうばう も
よく あたゝかくも ある〔抹消〕〔じゃく〕ジやうばんせん
を〔抹消〕〔ゑ〕〔加筆〕〔え〕らひたり ゆふ七じはん ムつほてる
に ちやく 二一にち よる 八じごろ きゝやう
ハふてんてうさくせい の てあてきん 一〇〇・〇〔朱点〕
〇〔抹消〕〔み〕〔加筆〕〔ミ〕ね へ わたす

二一

八六ばんこ にしざかひ おほよそ 一二けん に
ひばがき しつらひ の ひよう 五・四四〔朱点〕 よび
きん 二〇・〇〔朱点〕〇 えうきうし きたる
〔朱書〕〔タ、ヒ二四〕

二五

マつのカ〔抹消〕〔ほ〕〔加筆〕〔を〕る このほどより あたまかさ
でき また ぜんそく の きみ なりしに ふと
はいえん に かゝりたり さいはひに ねつ たかゝ
ら〔抹消〕〔す〕〔加筆〕〔ず〕れば きつかはしき こと なかるべしと
なり

二八

オほつきマがき は 五ぐわつ すゑ か 六ぐわ
つ はじめ に ぶんべんすべき みこみ なれば
は、に きたりて せわし くるゝやう たのみこ
しける ゆへ オほつき の は、 なるひと とも
さうだん の うへ わかふうふ の のぞみ に
したがふ ことゝしたり それに つき あかんぼ
う の やぐ そのほか しゆつさん に つき こ
ちら にて したくし やすき もの の よう い
も あらがた できたれば らいげつ さしいり に
は マがき より やの さいそく に おうじて
いよ〳〵 は、 を しゆつたち さすべきに くわ
じつ いんふるえんざ を わつらひし いらい メ
いじ〔抹消〕〔八〕〔加筆〕〔二一八〕ねんらい の ぢびやう さいはつ
の きみ ある に より キたざと はかせ の
しんだん を うけさせたるに はいせん に ま
をしぶん あり いまのうちに れうぢする はう
しかるべき むね ちゆうい せられたれば ざんね
ん ながら〔抹消〕〔き〕〔加筆〕〔キ〕やうと ゆき を おもいとゞ
まりたり かういちらうはじんじやうせうがくくわを
三さほはおなじくだい二ねんきうを そつげうす

三〇

テい は ヂよしかうとうしはんがくかうふぞく
カうとうぢよがくかう の ぜんくわ を そつげう
す きたる 四ぐわつ じふいちにち よりは なほ
どうがくかう の ほしうくわ に いる は〔抹消〕〔つ〕
〔加筆〕〔ず〕ご、 は、 は キくちゲんさく に ともな
はれて アざぶ シろがね サんくわうざか なる

ツつじがをかやうしやうゑん　に　にうゑんせらる
さいはひに　いつとうしつ　に　あきま　ありて　そ
れを　かりうけたり　これに　ゐる　もののの　やうじ
やうれう　ひに　二・二〇（朱点）　なり
オほた　シちらう　もち、　は　八六ばんこ　よし
三じやく　よ　〔ぢびく（抹消）〕カがの　の　とほり　よし
一しやく　よ　ひくき　よし　また　わが　ていない
より　オほた　と　シちのへ　それがし　の　もち、
との　あひだ　を　ながる、　おがはの　りやうが
は　二　しやく　ばかり　は　くわんち　なる　おも
むき　げんまい　一だ　じやうとう　は　八・〇〇（朱点）
より　七・五〇（朱点）　ぐらゐ　なりと　いふ
〔（朱書）（タ、ヒ二八）〕

三一

ケいまろ　は　じんじやうちゆうがく　を　そつげ
うす　きたる　七ぐわつ　ごろ　かうとうしやうげう
がくかう　の　しけん　に　おうする　はず
すねん　らいの　けいけん　に　よれば　こんいん
や　おほぶしん　の　ごとき　りんじ　の　しゆつ
ぴ　をのぞけば　ほんたく　に　くわんけい　する
ひよう　は　一かねん　おほよそ　四・五〇〇・〇〇（朱点）
いない　なるに　べんごし　としての　しうにう　を
ほかにすれば　ぎゐん　の　さいひや　こさくまい
うりはらひ　だいきん　や　こうさい　あつけきん
の　りそく　や　かぶしき　の　り〔ゑ（抹消）〕〔え（加筆）〕き　と
う　〔を（抹消）〕〔の（加筆）〕がつさんだかは　おほよそ　この　ひ
よう〔すれ（抹消）〕〔だか（加筆）〕に　ひつてきす（ペエジ二三一ー
三五さんせう）ほんたく　に　くわんする　でいり
ことに　くにもと　しよういうち　に　かゝる　こと
は　ミね　も　かねて　しりぬる　はう　わが　しご
は　もちろん　その　ぜん　に　おいても　ひつえ
う　なるが　ゆへ　この　しゆの　しうし　は　すべ
て　ミね　に　あつかはせ　その　ちやうめん　に
しるさする　こと　に　さうだんし　こんげつ　より
はしめたり

日月

一

四

二七ぎんかう　たうざあつかりきん　の　りす　は
こんげつ　こんにち　より　ひぶ・〇一六（朱点）　に　あ
くる　むね　さる　二八にち　つうち　ありたり
きやうと　なる　マがき　の　もと　より　かねて
テい　の　らいう　を　うながしきたれる　ゆへ
は、と　どうかうする　つもり　の　ところ　は、
にうゐんしたるに　つき　かはりに　ケいまろ　を
つきそひ　と　なし　こんてう　六じ二〇ぷん　シ
んばし　はつ　の　れつしや　にて　しゆつたゝせた
り　よる　九じ　二五ふん　キやうと　はつ　の　て
んぽう　にて　あんちやく　の　むね　しらせこす

三

コしがや　の　もく　の　はな　さがりなる　よし
に　つき　けふ　の　さいじつ　を　さいはひ
カういちらう　コまがみね　ヨしだ　を　ともなひ
九じはん　ウへの　はつ　に　のり　キたせんぢゆう
にて　トうぶてつだう　に　のりかへて　一一じ
ごろ　コしがや　に　つき　まつ　ひだり　に　ゆき
て　はな　を　み　かはすち　を　もどり　さかや
けんたいの　うなぎや　にて　ちゆうじきし
さらに　まち　の　ひがしうら　の　はな　を　みた
り　いつれも　はたなか　に　あり　つぎの　ゑき
なる　がまう　より　五じ　ごろ　の　れつしや　に
のり　七じ　すぎ　ウへの　に　かへる

六

モりをか　カがの　七七ばん　こ　の　たてや　ど
ざう　とう　を　ふるだうくや　に　ねぶみさせたる
に　たてや　九〇・〇〇（朱点）　どざう　六五・〇〇（朱点）　たゝみ
たてぐ　二五・〇〇（朱点）　がうけい　一八〇・〇〇（朱点）　ぐら
ゐ　のぞみにん　に　よりては　二〇〇・〇〇（朱点）　ぐら
ゐ　にも　かひうくべし　との　こと（朱書）〔（タ、ヒ五）〕
さくじつ　ごゞ　ハま　ウらしまびやういん　より
かへる

八

あさ　一〇じ　ウへの　はつ　の　れつしや　にて
クまがや　に　おもむき　マつむらろう　に　ひら
かれし　トうきやうはふがくゐん　ゐんいうくわい
サいたま　グんま　りやうしぶ　れんがうくわい　に

四〇

のぞむ　あたかも　クまかやづゝみ　の　さくら
まんかい　の　をり　にて　どて　に　かけじやゝ
など　あり　ひとで　おほかりし
キうしう　テつだう　クわいしや　の　はいたうきん
六二・六〇（朱点）　ミね　へ　わたす

日　月

〔五〕（朱書）

〔六〕（朱書）

せんげつ　すゑ　には　りよかう　の　ため　しよ
とく　とゞけ　を　さしたし　かね　やうやく　さ
の　とほり　むゆか　つけ　にて　おくり　やり　た
り　しよしき　は　しよとく　しんこくがた　ちゆう
い　と　いふ　たり　ものに　よれり

所得申告（朱書）〔（ペえじ五九にいるべし）〕

一金〇三〇〇・円　預ケ金利子
一〃二四〇〇・　歳費及手当
一〃〇一一二・　東京市牛込砂土原町貸家四棟七七
坪五合ノ所得

外ニ

一金〇五・　府税
一〃一六・　市税
一〃一六・　給水税
一〃二〇・　管理費
一〃八三・　共用栓敷設費

一〃六〇・　修繕費
一〃四八〇〇・　職業ノ収益
〔朱書ハ税務管理局訂正ノ分ナリ〕
一金〇〇二〔三〕（抹消）・円　岩手郡浅岸村田小作三反四畝二〔五・九八七〕（朱書）　三歩地価金一五三・〇六七二対スル所得
外二
一金〔五〕（抹消）〔四・一四七〕（加筆・朱書）　国税
一〃〔四〕（抹消）〔一・六〇〇〕（加筆・朱書）　県税
一〃一・〔一六四〕（加筆・朱書）　村税
一〃〇〇一〔〇〕（抹消）〔七・三一九〕（加筆・朱書）
同郡同村畑小作一町七反三畝一四歩、地価金二七三・〇五二対スル所得
外二
一〃〔九〕（抹消）〔七・三七二〕（加筆・朱書）　国税
一〃〔八〕（抹消）〔一・八五三〕（加筆・朱書）　県税
一〃〔三〕（抹消）〔一・四四六〕（加筆・朱書）　村税
一〃〇〇一〔七〕（抹消）〔九・八六二〕（加筆・朱書）
同郡同村山林七三八町七反六畝二四歩、地価金一一〇・八一五二対スル所得
外二
一〃〔四〕（抹消）〔一・九九二〕（加筆・朱書）　国税

所得米及代金高計算方 (55)

一〃〔三〕（抹消）〔一・一五八〕（加筆・朱書）　県税
一〃〔一〕（抹消）・〔九八八〕（加筆・朱書）　村税
一〃五・　管理費
一〃〇四〔〇七〕（抹消）〔七二・七三三〕（加筆・朱書）
同郡本宮村田畑小作一〇町八反八歩地価金二七二九・二一九二対スル所得
外二
一〃〔九〇〕（抹消）〔七三・六八八〕（加筆・朱書）　国税
一〃〔六一〕（抹消）〔一八・五二〇〕（加筆・朱書）　県税
一〃〔三〇〕（抹消）〔一三・〇五九〕（加筆・朱書）　村税
一〃五〇　管理費
一金〇〔五五一〕（抹消）〔六一〇・四九一〕（加筆・朱書）
紫波郡飯岡村田畑小作一〇町五反一畝二歩、地価金二七〇一・六九七二対スル所得
外二
一〃〔八九〕（抹消）〔七二・九八六〕（加筆・朱書）　国税
一〃〔五九〕（抹消）〔一八・二三二〕（加筆・朱書）　県税
一〃〔三〇〕（抹消）〔一七・二九一〕（加筆・朱書）　村税
一〃八七・　管理費
所得金合計八〔六二〇〕（抹消）〔七七八〕（加筆・朱書）円〔六三〇〕（加筆・朱書）也
右之通相違無之候也
明治三十三年四月六日

盛岡市加賀野八六番戸東京市牛込砂
土原町一丁目二番地寄留
菊池武夫

仙台税務署長
清宮質殿

みぎ　の　うち　サどはらちやう　かしや　の　こう
ぢよきん　ちゆう　ぜいがく　は　かおくぜい　を
せつぱん　したる　たか　くにもと　でんぱた　こさ
く　の　あがり　こく　すう　は　すべて　さくねん
の　ぶん　に　おなじ　すなはち　アさぎし　三
モとみや　五七・五(朱点)　イひをか　七三・五(朱点)　なり　また
一ごく　の　あたひ　は　一一・一〇(朱点)　と　して
つもれり　けんぜい　は　ちそ　一ゑん　に　つき
〇・七三(朱点)　の　わり　の　よし　なれども　なほ　つ
ひか　ある　べし　との　こと　ゆへ　この　じゝつ
を　しんしやく　せり

一二　モりをかしやくしよ　より　はいたつ　せり　とて
しよとく　しんこく　ちゆうい　と　だい　する
すりもの　を　おくりこせり　七七ばんこ　かおく
だいか　を　つもらせ　たる　かんていしや　の　し
やぎ　は　ばい〳〵　さうだん　とゝのひ　たる　う
へ　にて　うちきん　の　ひやくぶん　の　一　ぐら
ゐ　つかはせば　よろしき　よし
きん　三二・〇〇(朱点)　しやくよう　したき　むね　た

四

(57)

のみこす　アさぎしむら　こさくにん　ウへむら　キ
ざう　の　せかれ　イ(抹消)〔さむ〕〔し(加筆)〕らう（伊四郎）　は
げん　やまゝはり　サんゑもん　ムらまつ　を　せん
だうしや　と　して　サんゑもん　ちやうそん　ムら
まつ　ちやうなん　と　つがう　五にん　にて　わが
しよいうざん　の　さかひ　を　じつけん　した
る　よし　みぎ　に　つき　くわいさんまい　一　と
の　だい　一・二〇(朱点)　しよまう　せられ　これ　に
さかだい　〇・三〇(朱点)　そへ　つがう　一・五〇(朱点)　つか
はし　たる　よし〔(朱書)（タ、ヒ一一）〕

一三　タけひら　へ　きん　三二・〇〇(朱点)　かしやりたり

一四　シつをか　の　ゐんいうしぶくわい　へ　のそむ
ため　一〇　じ　一〇ぷん　にて　シんばし　を　は
つし　〔し(抹消)〕キういうてい　に　いれり　よくじつ　エ
じり　テうやうくわん　に　ゆきて　しほひがり　を
み　しつをか　に　もどりて　ダいとうくわん　に
とまり　一六　にち　きたく　せり

一六　ほんねんど　けんぜい　ぜんはんき　イひをか　二
四・六五一(朱点)　モとみや　二五・三〇(朱点)　モりをかしない
一・四四四(朱点)　アさぎし　五・一五(朱点)　そんぜい　は　イひ
をか　一二・六(朱点)　モとみや　おほよそ　一〇・〇〇(朱点)　に
て　けんぜい　は　ちそ　一ゑん　に　つき　〇・七三(朱点)
なるに　なほ　つひか　あるべし　との　こと　さ
くねん　に　くらぶれば　二ばい　に　ちかし　七七

崖地人造石々垣　ゑき京都行

一八

ばんこ　と　りんち　かうくわん　に　つき　りんち
ぬし　オほた　シちらう（太田七郎）　に　めんくわい
し　一八〇・〇〇（朱点）　の　うちきん　にて　とりひき
すべき　よし　まうしいれ　たるに　おつて　へんた
う　する　との　あいさつ　ありし　よし
〔（朱書）（タ、ヒ一五）〕

二一

は、　ぎみ　びやうき　に　かゝられ　たる　に
つき　その　かはり　と　して　いもうと　ヱきが
ゆく　こと、　なり　けさ　一ばんぎしや　にて　キ
やうと　へ　たち　たり

さくねん　りんう　の　をり　がけ　の　たかき
はう　二　かしよ　くづれ　その　つち　さかひ　の
さゝがき　を　おし　または　もりて　りんち　の
ながや　ずまひ　の　ひとぐ　に　めいわく　を
かくる　のみ　ならず　なほも　くつれん　か　と
おもはるゝ　に　つき　とりあへず　かきね　の
つち　を　とりのぞかせ　たる　うへ　あと　の　つ
ちどめ　がた　を　ハつとり　チやうしち　なる　ひ
と　に　はかり　けるに　さかひ　どほり　ながさ
二二　けん　は　ねいり　とも　たかさ　一二しやく
あつさ　二しやく　また　ひくき　はう　の　がけ
ながさ　一八　けん　は　たかさ　八しやく　あつ
さ　二しやく　の　じんざうせき　の　いしがき　を
つきたて　しかるべき　よし　その　ひよう　は

神戸観艦式　弁護士協会大阪臨時会　平均米価　借家課税県令 (58)

二二

すべて　一二三五・七四（朱点）　なり　と　いふ　に　つき
それ　に　まかせ　たり　一二ぐわつ　ごろ　ちや
くしゆし　かんちゆう　は　やすみ　やうやく　この
ごろ　できあがり　たる　に　より　さいしうの　わ
りばらひきん　一三五・七四（朱点）　を　わたし　たり　が
けち　には　ちゆうだん　けだん　ふたすち　の　み
ち　を　つけ　くつ（抹消）〔れ〕（加筆）〔る〕、　おそれ　ある　とこ
ろ　へは　やじの　だけ　を　うゑつけたり

こんねん　はつぷ　の　けんれい　にて　かしや
かしきん　に　せい　を　くわする　こと、　なりた
る　に　つき　けんぜいなふぜいと、げ　と　いふ
しよめん　を　さしだすべき　むね　シやくしよ　より
ちゆういし　こしたる　よし　されど　七七ばん
こ　は　むちん　にて　かし　おき　かしきん　は
いつさい　せざる　こと　なれば　けんれい　の
めいぶん　は　いかゞか　しらね　ども　とゞくる
に　およぶ　まじ　と　おもひ　ねんのため　シちや
う　キよをか　に　あてたる　てがみ　を　タけひら
に　やりたり（朱書）〔（タ、ヒ二一はがき）〕
ぜん　三が（抹消）〔□〕ねん　へいきん　の　しくだい　は
一一・一〇（朱点）なる　よし　しよとく　とゞけ　の　さん
かう　に　まうし　きたる（朱書）〔（おなじくじやう）〕

二七

オほさか　に　ひらかる、　べんごし（抹消）〔きやう〕
（加筆）〔けふ〕くわい　の　りんじ　そうくわい　に　しゆつ

せきする　ため　一二じ　はん　かりぎり　の　二と
う　きしや　にて　どうげうしや　一六、七にん　と
ともに　しゆつたち　せり　よくあさ　九じ　ごろ
オほさか　に　つき　オほさかくらぶ　に　やどり
ごゞ　えんぜつくわい　あり　二九　にち　ごゞ
クらぶ　の　しよくだう　にて　こんしんくわい　あ
り

二八

あまみつ　を　には　の　みちすち　どほり　ひき
ゆきて　はたけ　の　そば　より　ながや　の　ぢめ
ん　に　どかん　を　ふせ　それ　より　ぢさき　わ
うらい　がは　の　みぞした　に　やはり　どかん
を　うめ　したどなり　の　ぢさき　に　はく　やう
に　せんと　したるに　シやくしよ　の　きよか　が
いる　よし　にて　せんげつ　一七　にち　に　ね
かひおきたる　ところ　やうやく　きゝとどけ　の
しれい　あり　やがて　ちやくしゆ　させたり

三〇

あさ　カうべ　に　むけ　ムめだ　を　はつしたる
に　じようしやにん　おびたゞしく　のりぎれぬ　も
の　いくにん　と　いふ　かず　を　しらず　やがて
カうべ　に　つき　スはやま　へ　のぼりて　みれ
ば　はや　かんかんしき　は　はじまれり　おめしか
ん　は　へいれつせる　ぐんかん　の　あひた　を
しづ〳〵　と　すすみ　つゝ　ありし　こくちゆう
の　あらゆる　ぐんかん　が　あつまれる　ことゝて

伊藤悌次　貞同伴帰宅　人形屋丸平　京都 (59)

めつらしくも　さかんにも　あれど　ふね　は　お
もひし　〔より〕(抹消)〔ほど〕(加筆)　おほきくは　みえ〔ぬ〕(抹消)〔さ〕(加筆)り
し　ごゞ　一じ　きやうと　に　むけ　ムめだ　を
いで　きやうとほてる　に　つき　オほつき　や　オ
ほたけ　を　みまひ　よる　マるやま　なる　ヒらの
や　に　もよほされたる　ゐんいうくわい　つきなみ
くわい　に　まねかれたり

日　月

五

一

二じうしちぎんかう　は　この　ひ　より　たうざ
あつかりきん　の　りそく　を　ひぶ　一せん七り
ん　と　する　よし　さる　二六にち　つうちし　こ
したり　ヱき　と　テい　を　ともなひ　ダいごくで
ん　まへ　の　ぼうえきひん　てんらんくわい　を
み　チおんゐん　より　ギおんしや　に　かゝり　シ
でうどほり　に　いで　マるへい　と　いふ　なだか
き　にんぎやうや　にて　ハま　へ　の　みやげ　に
こにんぎやう　を　かひ　また　ミさを　ツる　ぶ
ん　をも　もとめたり

二

あさ　七じ　五六ぷん　にて　テい　を　ともなひ
しゆつぱつ　よる　一〇　じ　ごろ　シんばし　に
つきたり

六

しよとく

七

〔四（朱書）　くわつ　八　か　のぶ　ぺえじ五三―五〕

イとう　テいじ（伊藤悌次）に　きん　四〇〇・〇（朱点）

〇　を　かす　きたる　六　ぐわつ　より　一〇〇・〇（朱点）

〇　づ、　の　げつぷ　ねん　一　わり　の　りそく

との　しやくようしやうしよ　を　おくりこす

一〇

ヤまもと　ユがり（山本縁）に　たくして　おくり

こしたる　てがみ　に　オほた　シちらう（太田七郎）

は　よういふ　一八〇・〇〇（朱点）　の　うちきん　を　い

だし　さう　なく　また　かしや　かしきん　の　とゞ

け　は　さしだす　に　およはぬ　よし　モりをかし

〔ちやう（抹消）〕〔の（加筆）〕シちやう　あいさつす　また　しうな

ふまい　に　ね〔つ（抹消）〕〔す（加筆）〕み　〔入（抹消）〕りたる　〔に（抹消）〕〔の（加筆）〕

はうち　また　まさぶき　やね　そうつぼ　ふきかへ

〔に（抹消）〕〔の（加筆）〕　えう　あるに　かどまゝさ　せん　まい

一・一（朱点）〇ぐらゐ　にて　しかも　しなぎれ　なれば

ひろえん　の　ぶん　二三　つぼ　は　〔つ（抹消）〕てつい

た　に　しては　いかに　また　だいろくき　ちそき

ん　四一・五（朱点）〇　おくれ　また　しつけまい　かりい

れ　の　ねがひ　あらば　れいねん　の　ごとく

一〔だ（朱書）〕三〔ど（朱書）〕七〔しよう（朱書）〕　キんたらう（金太郎）

一〔だ（朱書）〕〇　〇　ダいきち（大吉）

一〔だ（朱書）〕〇　〇　マさのすけ（政之助）

一〔だ（朱書）〕〇　〇　メいすけ（命助）

三〔ど（朱書）〕七〔しよう（朱書）〕　エいすけ（榮助）

(61)

一五

三〔ど（朱書）〕七〔しよう（朱書）〕　セいざう（清藏）

がうけい　五だ　かたま　かしつけ　しかるべき　や

〔を（抹消）〕の　たつね　あり　よりて　ねずみ　の　がい

はけしければ　こめ　は　やすく　とも　うれ　て

ついたぶき　は　いかぬ　しつけまい　かしつけ　は

し〔や（抹消）〕〔よ（加筆）〕うちしたる　むね　へんじせり

〔タ、ヒ八が（朱書）〕

さくてう　一ばん　ぎしや　にて　ナごや　に　き

たり　れい　の　とほり　シなちやう　ホてる　に

やどり　けさ　コうそゐん　の　ようじ　を　たつし

トう〔し（抹消）〕〔せ（加筆）〕うぐう　の　まつりび　なる　よし

なれば　オほば　シげま（大場茂馬）に　いざなはれ

て　ホんちやう　を　くだりけるに　りやうがは　と

も　しろ　あを　の　すぢ　たがひ　ちがひ　の　ま

んまく　を　はり　きんべうぶ　を　た〔て（抹消）〕〔つ（加筆）〕るも

あり　まうせん　を　しくも　あり　とを　あまり

の〔の（抹消）〕だしやたい　わうらい　を　ねる　やたい

の　うへなる　にんぎやう　は　みな　うごく　やう

に　こしらへられし　は　めあたらし　ほんしや　に

は　かつちう　を　きたる　をとこ　じようめ　など

あまた　ひかへたり　みこし　の　ぐぶ　を　なす

もの、　よし　ちゆうじき　ご　キやうと　に　む

かへり　さる　こゝのか　の　よる　キやうと　テい

こく　たいがく　にても　〔く（抹消）〕〔ク（加筆）〕わうたいし　でん

かこげつこん　の　しゆくがくわい　あり　をはり
に　がくせいら　は　けうじゆれん　を　どうあげし
たるに　チさと　は　せうゐ　の　せいふく　を
つけゐたりしが　いつの　まにか　さあべる　の　ぬ
けたると　みえ　おろされし　とき　けんさき　が
ぐんふく　を　とほし　よこはら　の　うしろ　より
まへ　に　ぬけ　こし　たゝぬ　やうに　なりて
きたくせる　むね　マがき　より　しらせこしたれば
みまひ　に　ゆける　なり　れい　に　よりて　き
やうとホてる　に　とまる

一六

オほつき　に　ゆき〔抹消〕〔み〕みたるに　おもひのほか
かろき　けが　の　やうす　にて　ねつ　は　つひに
いでさりし　おもき　ヱキ　は　あひかはらず　た
いくつ　を　うつたへたり　ホうづがは　を　くだら
んと　せるに　もはや　つゝじのはな　なき　よし
なれば　やみぬ　ヒえいざん　に　のぼらんと　くは
だてたるに　〔抹消〕〔ホ〕ハふがくゐん　の　ゐんいうら　き
たりて　つひに　ギおん　の　ナかむらや　に　いざ
なはる　きやうと　に　きて　めあたらしき　ところ
を　みぬは　ゐかん　なり　よくあさ　一ばん　に
て　きゝやう

(64)〔一八〕（朱書）

べいか　げらくし　しやうまい　一　だ　七・四〇（朱点）
にても　かひて　なき　ほど　なるに　ねずみ　の
がい　も　さほど　ならねば　うりまい　は　いま

すこし　みあはせ　たし　さくねん　の　しうなうま
い　そうけい　二一一　だ　かたま　の　うち　タけ
ひら　その　たへ　せいぼ　に　かたま　しつけまい
に　かしたる　は　五　だ　かたま　にて　さしひ
き　二〇五　だ　かたま　げんざい　なり　まさぶき
の　ぶん　ふきか〔抹消〕〔え〕〔加筆〕〔へ〕　は　なほ　きん　一
五・〇〇（朱点）　おくり　くる、　やう　まうし　きたる
〔（朱書）（タ、ヒ一七）〕

(61)二六

トうきやう　ハふがくゐん　ヰんいうくわい　ナが
の　シぶ　の　かいくわい　に　おもむかん　とて
あさ　八　じ　はん　の　きしや　にて　ウへの　を
はつし　タかさき　にて　くわんせん　に　のりか
へ　ゆふ　六　じ　すぎ　ナがの　に　つき　サいほ
く、わん(犀北館)　に　いる　よる　ほつきにん　の
せうえん　に　まねかる〔抹消〕〔よし〕

二七

ゐんいう　しよし　と、もに　きんじよ　の　しや
しんや　にて　しやしん　を　させ　それより　ぜん
くわうじ　に　むかふ　七　ねんめ　ごとに　四ぐわ
つ　一〇　か　より　この　三〇　にち　まで　かい
ちやう　あるに　あたかも　ことし　は　七　ねんめ
にて　もくか　なほ　かいちやう　ちゆう　なり
まつ　ダいくわんじん(大勧進)　を　みん　とて
二・〇〇（朱点）　さしだしたり　でんう　および　はうもつ
を　みたる　のち　ちやくわ　の　きやうおう　を

大本願　大勧進 (62)

二八

うけ　なほ　ふくほつす　の　あま　に　めんえつ
せり　ぜんくわうじ　にては　まつくらなる　くわい
らう　めぐり　を　なし　ないぢん　の　もつとも
ちかき　ところ　にて　かいちやう　を　みたれども
いちめん　に　きんびかり　して　ほんたい　は
いつくに　あるやら　さらに　みわけ　がたし　きと
ダいほんくわん(大本願)に　いたる　だう、ふ
しん　ちゆう　にて　みるべき　もの　なし　この
あたり　さる　メいち　二四ねん　に　やけたる　よ
し　にて　たてや　みな　あたらし　ダいほんぐわん
の　べつたう　は　そう　なるに　ダいくわんじん
の　ちゆうしよく　は　あま　なり　しかるに　い
つれ　に　おいても　はうもつ　の　あんないしや
は　はなかけ　ばうず〔か〕(抹消)なるぞ　くしき　ごゞ　四
じ　より　〔し〕(抹消)ジやうざんくわん(城山館)　にて　ゐ
んいう　そのた　ナがのし　の　おもたちたる　くわ
んみん　が　もよほせる　えんくわい　に　のぞみ
しよまう　に　まかせて　かうだん　を　なせり
さくや　の　えん　に　つらなれる　キぞくゐん
ギゐん　イろべ　ギだいふ(色部義太夫)　せちなる
す、め　に　まかせ　九　じ　はん　すぎ　ナがの
を　いで　ふたつめの　ヤしろ(屋代)　に　おり　や、
五　ちやう　ばかり　はしりて　イろべし　の　た
く　に　つく　かど　には　イろべぎんかう　の　か

けふだ　あり　カはなかじま　せんさう　じたい　よ
り　ひきつ、きたる　いへの　よし　にて　かまひ
も　こふうなり　まつ　なんめんの　せいもん　を
いり　ひがし　に　むかつて　ちゆうもん　を　いれ
ば　ひだり　に　なんめんの　げんくわん　あり　そ
の　しやうめん　に　つくりには　あり　これ　まさ
に　いにしへぶり　なり　ひるちかく　より　べんた
う　ぢさん　にて　くるま　を　かり　チぐまがは
を　わたりて　サらしなごほり　イなりやままち(稲
荷山町)　に　かゝり　ひだりに　をれて　ハちまん
むら　に　いり　やがて　くるま　を　すて、さか
みち　を　のぼる　こと　五、六　ちやう　にして
いうめいなる　ヲばすてやま　に　つく　だう、は
きうはい　に　ちかし　と　いへども　いこひて
べんたう　を　つかふ　には　さしつかへ　なく　て
うばう　は　むかし　に　ことならず　サらしな　ハ
にしな　を　ぶんりうする　チぐまがは　えんがん
の　けいしよく　は　つき　なくとも　すて　かだく
びいる　を　のみ　ながら　すゞかぜ　に　ふか
る、こゝち　また　え　かだし　うしろの　おほい
は　に　のぼりて　かへりみれば　うしろやま　の
ちゆうぶく　に　きしやだう　つうじ　ヲばすてやま
の　まうしろ　あたり　に　ヲばすて　と　いふ
ていしやば　でくる　よし　にて　はしらだて　すで

に すみゐたり この せんろ は シの丶ゐ より
マつもと に いたる もの なり ばんしよく
は イなりやま丶ち の ダいしやう（大正） しだし
の れうり の きやうおう に あつかり どう
かう 四 にん いつれも ちやうもんつきの かい
まき を きて やすみたり〔朱書〕〔ホウガクシンポウだい
一一一ごう五七ー八ぺいじ〕 二ほんいうせんくわい
しや の はいたうきん 五六二一・五〇〔朱点〕 ミね うけ
どりて その とりひき ぎんかう なる ダいひや
くぎんかう に あつけたり
あさ より あめ ふりいで 九 じ ごろ イろ
べし の たく を じして やしろ に いたり
一〇 じ すぎ はつしやせり とちゆう なにごと
も なくて 七 じ ウへの へ つきたり

現在米駄数 (64)

二九

一　日
六　月

モリオカ の ヨコハマ、キヨシ より かの ち
の ほんたく お かりうけたし と ゆう ひと
あり かす い ありや お といこしたるに つ
き タケヒラ も いまわ ふうふ ぎり にて ふ
きそうぢ にも こまる ならんと おもわる丶 ゆ
え かりて わ のぞましきも ぜんぶ の かりう
け〔れ〕〔抹消〕わ めんわく なれば しきりがし にて
よくば かしあたえん それとも ぜひ ぜんたい
かりたしと ならば 六か げつ も ゆうよするな
ら のぞみ に おうじらる丶 よし こたえたり
もうしこみにん わ しんにん の コウザン、カン
トクシヨチヨウ、マツモト、イクロウ なる よし
この なつ も カマクラ あたりに ゆかんかと
おもいたち かの ち ハセ、サカ〔セ〕〔抹消〕〔ノ〕〔加筆〕シタ な
る ムラタ、ヒサキチ（村田久吉） に こ丶ろあたり
の かしや あらば しらせ くる丶 よう たの
みやりたり
センボクチヨウ の こめしよう に たつねたる
ところ 一 だ 七・五五〔朱点〕 までなら かわんと
ゆう いかゞすべきや お といこす うるべき よ
し こたえやれり〔朱書〕〔タ、ヒ四〕
ヨコハマ、キヨシ より かりて〔れ〕〔抹消〕わ ぜんぶ し
よもう なれども あらたに タケヒラ の きよし
よ お かりうけ またわ けんちく するわ なか
〳〵 の おうごと なれば しきりがし ならねば
ふしようち の おもむきに へんとうしてわ い
かゞ と ちうい しこしたり どうい の むね
い丶やりたり
カマクラ の ムラタ、ヒサキチ より ハセ、カン
オン の もんぜんどうり に つごう 四ま に
だいところ ゆどの つきの〔か〕〔抹消〕にかいだて の か

鎌倉長谷借家 (65)

六

九

しや ある むね しらせこす 二、三 にち ちう
に みに ゆく よし い、やれり やちん わ
七、八 りようげつ にて 八〇・〇〇（朱点） の よし
さくじつ カマクラ に ゆき ムラタ の ぢよ
ちう に あんないせられ かの かしや お みた
るに ハセ、カミマチ 一六 ばんち さがんしよく
スゞキ、ナオジ（鈴木直次）の かおく にて げ
んかん 四 ぢよう そのおく に 八 ぢよう の
さしき あり いつれも えんかわつき なり に
かい わ おもて 六 ぢよう に うら 八 ぢよ
う じき なり まだ かべわ ろくに かわかぬ
くらいの しんちく にて たてがた ぞうさく と
も そまつ なれども とうじ の そうば にてわ
たかいと ゆうほうにも あらず かざとうし わ
よさそうなり みづ わ きんじよ にて ひよう
ばん なる よし なれば きたくご さいし と
そうだん の うえ いよ〳〵 かりうけることに
きめ ムラタ え このむね しらせやりたり

一〇

八六ばん こ しきりかたわ せんねん の あん
どうり にかい か うらざしき の うち 一か
しよ かつて わ ながしもと とも はんぶん に
しきりたし センボクチヨウ の こめ しよう
にん お たつねたるに るす にて あわつ た
にも あいて あり あたい わ かえりて つりめ

大築尚志死去

一二

なれども まだ そうだん できず（朱書）〔（タ、ヒ九）〕
あさ 六 じ すぎ （抹消）〔おうつき〕（加筆）〔オウツキ〕 の
しよせい きたり きうよう にて めんくわいし
たき むね もうしいる ゆえ この ごろ より
キヨウト に ゆきたる ヱキ が なに やら は
つきと わからぬ わけがら にて しきりに かえ
り たき よし い、こし たり ナゴヤ ざいきん
の シンヂ（宍道）まで とて でかけたる オウ
ツキ の は、 この ごろ ひそかに キヨウト
え ゆきたる ようす なれば ヱキ の こと に
つきての よう ならんと おもいのほか かねて
のうびよう ある ち、なるひと さくやはん ひ
としれず たんとう を もちて みつから のど
を かき、り はてたるを かないのもの 五 じ
はん ごろ みいだし キヨウト の は、 や チ
リ えわ とりあえず きとく との でんぽう を
かけたるが るすい わ （抹消）〔を〕（朱書）〔お〕んな こども
のみ なれば きて もらい たき よし のぶる
に さつそく うけがいて かえしたり いたれば
オウツキ の どうきよう（抹消）〔じん〕 サクラ しゆつし
ん の サクライ（櫻井）りくゞん しよう〳〵 お
りて しゆぢい とも そうたん の うえ （抹消）〔け〕り
ようぢ を くわいたる のち うせたる こと、し
けいさつ の けん（抹消）〔く〕し を うくる に けつ

したるが　きんねんらい　の　き〔め〕(抹消)〔みよ〕(加筆)うなる
ふう　にて　たいびよう　にて　くわいふく　の　の
ぞみ　なき　おり　に　ころ　を　しようし　おん
〔を〕(抹消)〔お〕(加筆)　くわうる　こと　な〔し〕(抹消)〔る〕(加筆)に　しゝや
わ〔しやく〕(抹消)〔ふつう〕(加筆)の　くんい　の　しようしん　の
みならず　ことに　よれば　しやく　をも　え　かね
ぬ　ひと　なれば　すぐさま　し　を　はつぴようす
る　わけ　に　ゆかず　さりとて　けいさつえの
とゞけ　お　なおざる　こと　も　ならず　やむなく
〔さく〕(抹消)〔サク〕(加筆)ライ　わ　じよしやく　とう　に　つ
き　リクゞンシ〔や〕(抹消)ヨウ　え　ゆき　われ　わ　コイ
シカワ、ケイサツシヨ　え　ゆきて　しよちよう　え
ないじよう〔を〕(抹消)お　うちあがし　けんし　の　ゆう
よ　および　かんりやく　ならん　こと　お　らいだ
んしたり

キヨウト　にて　わ　よる　八　じ　五　ふん　ごろ
によし　お　あんざんした〔る〕(抹消)〔り〕(加筆)　との　でんほ
う　一〇　じ　すぎ　とゝきたり　いま　すこし　の
こと　にて　なきひと　も　まご〔を〕(抹消)お　もちたり
しに　おしきこと　したり

べいか　げらくし　一　だ　七・二〇(朱書)　ぐらい　と
なり　さきに　七・五五(朱点)　に　ねつけしたる　こめや
わ　いるす　お　つかい　あわぬ　よし　また　か
しや　に　つきて　わ　そのご　なんの　さた　もな

しと　なり(朱書)〔(タ、ヒ一一)〕

カマクラ　の　ムラタ、ヒサキチ　より　スゞキ　の
いえ　わ　七、八　りようげつ　わ　四〇・〇〇(朱点)
つ、　九　くわつ　わ　二五・〇〇(朱点)　にて　かさん
と　ゆう　よし　しらせこせり　それにて　かりうけ
ん　との　へんじ　さしいたしたり

しゆつさん　ご　ぼし　とも　ひきつゞき　ぶじ
なる　よし　ヱキ　の　てがみ　きたる

一四

マツノ、チカツ　の　いもうと　きしや　に　しかれ
て　しゝたるに　とりあえず　かのち　え　ゆきたる
チカツ　より　カオル　え　でんぽう　きたり　し
ゆつたち　の　よういすべき　よし　いゝこしたり
くにもと　シマバラ　にわ　八一　さいの　ろう〔ぼ〕(抹消)
そぼ　ちゆうぶ　に　あたりて　ふしおり　すえの
いもうと　かたつきて　きんじよ　に　いれども　そ
れ　のみ　に　せわさする　わけ　に　ゆかず　また
チカツ　わ　しやくざい　おうくして　トウキヨウ
に　一　か　お　かまえいてわ　へんさい　むつか
しき　ゆえ　かたゞく　カオル　お　くにもと　に
やりて　そぼ　の　かんびよう　お　さする　しゆこ
う　なり　この　もと　の　いえ　お　たゝみ　シマ
バラ　え　しゆつたつ　に　つきて　わ　カオル　も
は、　に　きて　もらい　たく　ヱキ　も　かえり
たし　と　ゆふ　ち、　の　しぼう　にて　さくち

(68)

菊江誕生届　松野夫婦出発　元朔ゑき交代

よう　き、ようしたる　ばかり　の　チリ　に　そう
だんする　も　えんりよなり　また　マガキ　も　う
んだ　ばかり　にて　おば　に　かえられ　てわ　こ
まるならん　とわ　おもえども　マツノ　の　しゞよ
う　も　もつとも　なれば　ついに　チリ　〔と〕(抹消)〔に〕(加筆)
はなしたる　ところ　あかんぼう　の　せわ　〔の〕(抹消)
わ　さいわい　マガキ　の　うば　タケハラ、タメ
か　とうりうちゆう　なれば　それ　に　たのみ　よ
ろしきも　きんす　や　いんぎよう　とう　お　ヱキ
に　あつけおきたれば　その　しまつ　に　こまる
と　ゆ〔ふ〕(抹消)〔う〕(加筆)　よりて　じむしよ　に　いる　キ
クチ、ゲンサク　お　キヨウト　に　やり　ヱキ　と
こうたい　せしむる　こと、し　ゲンサク　に　は
かりたるに　しようちしたれば　ゆう　六　じ　の
れつしや　にて　しゆつた、せたり

一六　あさ　九　じ　ごろ　ヱキ　キヨウト　より　かえ
る　また　しようご　すぎ　マツノ　チカツ　シマバ
ラ　より　き、ようす

一七　オウツキ　の　そうしき　あり　よてい　の　ごと
く　ごゞ　一　じ　シンスワチヨウ　の　じたく　お
しゆつくわんし　アオヤマ　キヨウドウ　ボチ　に
て　ぶつしき　の　くよう　あり　ぼぜん　え　もく
せい　一　つい　きふす

一九　マツノ　わ　いもうと　の　へんし　や　ひきこし
に　つき　にうよう　ある　よし　にて　さくじつ
一五〇・〇〇(朱点)　ようだて　また　カオル　え　ふじ
の　よういきん　として　三〇・〇〇(朱点)　つかわしたり

二〇　一二　じ　はん　の　れつしや　にて　ふうふ　に
こども　しゆつぱつせり　オウツキ　の　いつしち
にち　にて　ばんめし　に　よばれたり
マガキ　しゆつさん　の　とゞけ　わ　そうしき
すみて　のち　に　する　こと、し　おきたるに　こ
んにち　コイシカワ　クヤクシヨ　え　一三　にち
ごゞ　八　じ　うまれ　の　ことに　とゞけたる　よ
し　かねて　そふ　が　えらびおきたる　よし　にて
キクエ（菊江）と　なつけたる　よし

松野島原安着　上総大原行 (69)

二二　ぐんじこうさい　二〇五〇・〇〇(朱点)　の　りす　五
一・〇〇(朱点)　よ　うけとる　もつとも　しよとくぜい
お　さしひきたる　たか　なり

二三　モリオカ　おもて　の　べいか　しだいに　げらく
し　七・四〇(朱点)　ぐらい　なる　よし　一げつ　より
五　ぐわつ　まて　の　でいりめいさいちよう　お
おくりきたる　また　よびきん　二〇・〇〇(朱点)　せいき
うす〔タ、ヒ二二〕(朱点)
カトウ　ヒロユキ　くん　〔の〕(抹消)が　だんしやく　に
じよせられたる　いわい　お　コイシカワ　シヨク
ブツエン　に　ひらきたる　おり　どうしよ　えんて
い　が　ないしよく　に　せいする　ちよちゆうぎく

こ(除虫菊粉) お ちゆうもんし また この きく
の せい お もつて つくりたる けんとうえき
(健稲液) わ オウサカ ヒガシク ヒラノマチ ヤ
スゞミ イサムロウ(安住伊三郎) うりさばく よし
にて これ おも ちゆうもんせり
ヒゼン シマバラ マツノ チカツ より いちどう
ぶじ ちやくしたる むね の でんぽう あり
〔抹消〕〔ほうてん〕〔加筆〕〔ホウテン〕 チヨウサ クワイ より て
あてきん 一〇〇・〇〇〔加筆〕 うけとる

二五

さくじつ くにもと え 七・四〇〔朱点〕 よろし と
でんぽう お うちたるに 七・四三〔朱点〕 うつた との
でんぽう あり

二七

かねて やくそくしたる とうり あさ 六 じ
ナカ、ミチヨ(那珂通世) その でいりの したてや
どうどう にて ホンジヨ キンシボリ なる ソ
ウブ テツドウ ていしやば お はつし チバ に
て ボウソウ テツドウ に のりかえ ダイトウ
(太東) に げしやし どうしよ の いしや ナカ
ムラ し お あんない に たて チヨウジヤマチ
の はし より かいがん お つたい オウハラ
に いたり タケヤ(竹屋) にて ちゆうじき お
したゝめ なお コハマ まで ゆき 五 じ 二
五 ふん オウハラ お たち 一〇 じ ごろ ホ
ンジヨ に つきたり これ わ オウハラ へん

わ よき かいすいよく じよう にて また よき
ちしよ も ある よし ゆえ み に ゆきたる
なり かくべつにも おもわず
らいげつ 一〇 か かぎり ひきかえ の やく
にて ねずみくひまい お のぞき 一 だ 七・四〔朱点〕
三 づゝ に とりきめ てきん 五〇・〇〇〔朱点〕 ほか
に 五〇 だ ぶん 五〇〇・〇〇〔朱点〕 うけとりたる
うち よびきん と して 二〇・〇〇〔朱点〕 さしひき
五三〇・〇〇〔朱点〕 おくりきたる このほう より わ
よびきん おくるに およばぬ むね もうしきたる
〔朱書〕〔タ、ヒ二六〕(71&217)

三〇

オウツキ チリ じよぶく しゆつし の たつし
お うけたるにつき けさ 六 じ 二〇 ぶん
にて キヨウト に かえり マツノ チカツ わ
シマバラ より かえれり とて よる きたる ど
うにん わ ひとまつ いえ お たゝみたる ゆえ
じむしよ に きぐうす

日　月

二　七

さくじつ ごゞ 一じ〔抹消〕〔ゑつぜん〕〔加筆〕〔エツゼン〕ボリ
しゆつぱん キサラヅ(木更津) に おもむき タマ
ヤ(玉屋) に いつぱくし こん しようごすぎ キ
サラヅ お しゆつぱんして 四 じ ごろ き、

三

〔や〕(抹消)〔よ〕(加筆)うせり

せんげつ　二八　にち　に　三五　だ　この　一じつ　に　六〇　だ　わたし　だいきん　の　うち　五〇〇・〇〇(朱点)　うけとり　れい　の　かわせ　にて　おくり　きたる　ねずみくひ　の　ため　らんびょうと　なりたる　ぶん　二三　びょう　ほど　ありなお　二〇　ぴょう　も　あるならんとのこと〔(夕、ヒ二)〕(朱書)

キヨウト　の　オ、ツキ　のうじゆうけつ　にて　うちふしたる　よし　マガキ　より　しらせこす　おやの　しきよ　いらい　しんぱい　つゞき　にて　つかれたる　わけ　ならん

一〇

うりまい　の　だいきん　の　のこり　四六一・七(朱点)

六　おくりきたる　うりまい　の　しわけ　わ　さのごとし

二〇五三七(だどしょう)〔も〕(抹消)〔もと〕(加筆)こく

一八五三七(だどしょう)〔一〕(抹消)　一三七八、二六五　七、四三(だにつき)

一七三七〃〃ねずみくい　一二六、〇〇〇　〃　七、二〇

一〇〃〃もちごめこぼれまい　八、〇〇〇　〃　八、〇〇

一〃三七へりだか　〇

みぎ　きんだか　ごうけい　一,五一二・二六五(朱点)のうち

五三〇・〇〇(朱点)　六ぐわつ二六にち　おくり

五〇〇・〇〇(朱点)　七〃　二か〃

五〇・五〇(朱点)　たわらだい

二〇・〇〇(朱点)　よびきん

四六一　七六五　このたび　おくり〔(217)〕(朱書)

こめ　とりいだしたる　あと　お　みる　に　ねたばしら　さがりたる　ばしよ　ある　よし

マツオマエ　の　しんでん　かんばつ　の　ため　ひきみつ　ぶそく　の　よし　ぼだいじ　キウシヨウジ

ほんどう　さいこん　きふきん　に　くわんする

ほうこくしよ　おくりきたる〔(夕、ヒ九)〕(朱書)

ジムシヨ　の　おもや　および　ものおき　の　ほけんきん〔これまで〕(抹消)〔三,〇〇〇・〇〇〕(加筆朱点)　に　たいする

ほけんりよう　ねんがく　これまで三九・〇〇(朱点)　の

ところ　さらに　三〇・〇〇(朱点)　に　げんする　むね

メイチ、クワサイ、ホケン、カブシキ、クワイシヤ

より　もうしきたる

一四

は、ぎみ　アサブ　サンクワウマチ　ッ、ジガオカ

ヨウシヨウエン　より　たい、んしたり　さる　三

ぐわつ　三〇　にち　より　七八　にちめ　に　あ

たる　ずいぶん　たいくつ　なりしよし　もとより

ぜんち　とにわ　あらねども　かいへん　に　ゆく

ならば　とて　たい、んしたるなり

一七

は、ぎみ　わ　ハマ　いが　ツル　まで　四　にん

の　こども　と　めしつかい　ッギ　お　つれて

かねて　かりおきたる　カマクラ　ハセ　カミマチ

一六　ばんち　さくわんしよく　スゞキ、ナオジ　の

出生届　内山邦久　ふく誕生 (72)

一八　しんちく　かしや　に　おもかれたり　ゲンサク
も　どう〳〵　したり
ニジュウシチ　ギンコウ　〔より〕(抹消)〔の〕(加筆)　とうざあづ
かりきん　の　ひぶ　わ　きたる　二〇か　より、(朱点)〇
一九　に　あぐる　よし　どうぎんこう　より　もう
し　きたる

二四　〔コンギョウ〕(抹消)〔こんぎよう〕(加筆)　二　じ　二〇ぶん　ご
ろ　だい七　ぢよ　うまる　あまり　たくさん　うま
る、　ゆ〔へ〕(抹消)〔え〕(加筆)　しんるい　え　しらするも　きの
どく　なれば　タケヒラ、サカキバラ、オ、タケ、ミ
ヅノ、オ、ツキ、タナカ、タカヒデ（栄秀）および
サタケあね　のみ　之　しらせたり
ウチヤマ、クニヒサ（内山邦久）の　たのみ　に　もだ
しがたく　らい　三四ねん　七　ぐわつ　まで　ね
ん、(朱点)〇八　の　やく　にて　四五〇・(朱点)〇〇　かし　た
り　その　ていとう　なり　とて　さの　キウシユウ
テツドウ　かぶしき　五　まい　よこしたり
新乙第一八四号（五かぶゞん）
おなじく第八四八号（おなじく）
新甲第八九四一号（一かぶゞん）
おなじく第八九四二号（おなじく）
おなじく第八九四三号（おなじく）
しめて　一三かぶ

二七　さ　の　しゆつしよう　とゞけしよ　お　タケヒラ
え　おくりたり

出生届

寄留東京市牛込区砂土原町壱丁目弐番地
岩手県盛岡市加賀野八拾六番戸々主士族弁護士
父　菊池武夫
嘉永七年七月弐拾八日生
同所無職
母　菊池ミネ
安政五年四月七日生
七女　ふく
出生　明治参拾参年七月弐拾四日午前弐時
出生ノ場所　東京市牛込区砂土原町壱丁目弐番地
右及御届候也

届出人
菊池武夫〇
嘉永七年七月弐拾八日生

盛岡市戸籍吏清岡等殿

戸籍面生年月　大築夫婦菊江出京　啓麿北海道行 (73)

二八　オ、ツキ、チリ　ふうふ　あかんぼう　お　つれて
キヨウト　より　ちやくきよう

二九　ケイマロ　わ　ホクカイドウ　お　こ、ろざし　し
ゆつたちせり　おうふく　りよひ　として　四〇・(朱点)〇
〇　もたせたり　もつとも　はんがく　わ　かわせ
にて　やりたり

日　月
八

一　フク　の　しゆつしようとゞけしよ　わ　うけとられたるよし　しかるに　かえい（嘉永）七　ねん　わ　アンセイ（安政）ぐわんねん　なれば　わが　せいねん　わ　アンセイ　なるべく　また　ミネ　の　わ　アンセイ　六　ねん　と　おぼえたるに　五　ねん　と　あり　こせきめん　わ　カエイ　七　および　アンセイ〔抹消〕〔加筆〕〔一八〕〔五〕　と　ある　おもむき　なれども　いつれ　が　たゝしきや　と　たつねこしたり　われも　アンセイ　ぐわん　アンセイ　六　と　おぼえけるに　タツ　たんじよう　の　せつ　さしこしたる　こせきしようほん　に　よれば　しからず　かつ　わが　せいげつ　わ　九　ぐわつ　なるべき　ように　おきわる〔朱書〕〔三五、一七三ページ　さんかん〕（タ、ヒ七ノ三一）〕

三　キウシユウ、テツドウ　だい　二　しんかぶ　一〇　かぶゞん　の　はらいごみきん　一かぶ　に　つき　五〔朱点〕〇〇　つ、　にて　ご〔抹消〕〔加筆〕〔ふ〕〔う〕けい　五〔朱点〕〇〇　はらいたり〔朱書〕〔224〕〕

四　めようにち　カガ　カネザワ　に　おいて　トウキヨウ　ホウガクイン　インユウクワイ　ホクリク　シブ　の　はつくわいしき　ある　につき　のりて　す

古今亭　金沢　敦賀　米原　北陸支部会

五

くなし　との　ひようばん　ある　シンバシ　一　ばん　に　ヒラヤマ、センタロウ　と　ともに　のりたる　ところ　まんいん　にて　マイバラ　までこしかけたる　ぎり　なりし　わ　お、わらいなり　三〇　ぶん　ばかり　ひま　ある　ゆえ　ていしやば　まえ　の　イツ、ヤシテン（井筒屋支店）に　いごいたれば　タカハシ、ステロク　も　かないづれ　にて　おり　どうじようして　マイバラ　お　はつし　キウシユウ、フクオカ　より　きたるべき　ハナイ、タクゾウ　ミウラ、ダイノスケ　え　おきてがみ　お　のこして　われら　わ　ツルガ　の　コメシチ（米七）に　とまりたり

五　じ　ごろ　おきて　ツルガワン　の　かいすい　に　よくしたり　五　けん　ほど　にて　せいのたゝぬ　ぐらい　ふかく　なるに　おんなこども　ら　わきしべに　はいりたり　しよくご　カネガサキ　の　カネガサキジンジヤ　に　まいる　ニツタ、ヨシサダ　の　ぢんばあと　にて　かれが　ほうじたる　ゴダイゴ　テンノウ　の　二し　を　まつれる　なり　やまかげ　には　わんに　のぞんて　かしせき　あり　かいがん　に　くだれば　みごとなる　はまいし　あり　こども　ならでも　ひろいたく　おもうなり　ていしやば　わき　の　ケビ（気比）ジンジヤ　に　もうでたれども　タケタ、コウ、ンサイ　いか　の

大聖寺　金谷館　兼六公園　鍔甚（75）

六

ぼひよう　ある　ケビノ　マツバラ　まで　わ　ゆき
かねたり　のりたる　れつしや　にわ　キウシユウ
より　もどれる　ヒチカタ、ヤスシ　オカノケイジロ
ウ　トリイ、テイジロウ　ハナイ、ミウラ　の　ほ
かに　オ、サカ　の　イトウ、ヒデオ　も　あり　フ
クイ　より　わ　タカハシ　も　のりあわせ　四　じ
ごろ　カネサワ　に　つく　むかい　の　いんゆう
ら　に　いざなわれて　ヤスエ（安江）チョウ、カ
タマチ　とう　はんくわ　なる　とうり　お　はしり
しろ　お　ひだり　に　み　やがて　サイ（犀）
（抹消）（加筆）
〔かわ〕〔カワ〕　に　かけたる　はし　お　わたり　ひ
だり　に　おれて　ノダ（野田）テラマチ　の　りよ
うりや　ツバジン（鍔甚）の　べつそう　と　しよう
する　コ、ンテイ（古今亭）に　つきたり　テイ　わ
たかき　がけ　の　うえ　に　あり　て　サイカワ
お　みおろし　カワ　お　へだて、　しろ　および
その　とうぼく　に　つらなれる　やま　お　のそ
むべし　せいぼく　にわ　なにがた　とやら　ゆう
こすい　および　かいがん　に　そうたる　まつばら
お　ながむべし　よる　わ　ツバジン（鍔甚）に
もようされたる　はつくわい　に　のそみ　やはん
ちかくに　ふしたり
なだかき　ケンロク（兼六）コウエン　に　いたり
ミヨシ　とか　ゆう　ちやてん　わき　にて　しや

山中温泉

七

しん　お　とり　コウエン　ない　お　くまなく　し
ようよう　したり　このごろ　しよき　はけしければ
モミチヤマ　の　こかげ　に　やすらいたる　おり
わ　みな　こゝろよげ　に　みえたり　おなじ　ち
やてん　にて　ひるめし　お　くい　二　じ　ごろ
より　カナヤクワン　とか　しようする　にかいだて
の　だいくわいどう　に　いたり　いわゆる　こう
だん　お　なしたり　おわりて　こうどう　お　しよ
くどう　に　はやかわり　させ　カネザワ　の　ゆう
し　と　しようする　しよにん　の　きようおう　お
うくる　はず　なりしが　たのみて　こんしんくわ
い　に　へんこうし　さいばんしよ　れん　その　た
の　ひと〳〵　と　くわいしよくせり
ひと　の　すゝめ　に　のり　イブリバシ（石動橋）
まで　の　きつて　お　かい　どうしよ　より　一
りよ　の　ヤマシロ　の　おんせん　お　へ　ゆう
めい　なる　ヤマナカ　の　おんせん　に　いつぱく
せん　もの　と　こゝろざしたるに　イブリバシ
に　わ　カネザワ　の　びようへい　きたれる　ため
じんりきしや　いつちよう　も　なき　よし　なれ
ば　さらに　のりつぎて　ダイシヨウジ　に　いたり
（抹消）
〔は〕てつどうばしや　にて　はつしたる　わ　よか
りしが　ちゆうかん　四、五　ちよう　の　やまさか
みち　の　ところ　いまだ　しゆんこう　せさるが

ため　につちゆう　に　あるかせられ　やま　の　あ
なた　より　はつしたる　くるま　に　つけたる　う
ま　わ　あらうま　にて　ぎよしや　も　せいし　き
れず　うま　お　はづして　ひとで　お　もつて　お
し　ごゞ　二　じ　ごろ　〔抹消〕〔や〕〔加筆〕〔よう〕やく　ヤマナ
カ　に　つき　ミタニヤ　に　いたりて　その　べつ
そう　お　からんと　したるに　べつそう　わ　おろ
か　へや　わ　みな　ふさがり　めし　お　くわすべ
き　ところ　も　なし　とて　まづ　さかうえ　の
てら　に　いざない　おき　ようやく　てつどうばし
や　の　はつしやば　より　かわ　に　さがりたる
ところ　に　ある　コトブキロウ　と　ゆう　りよう
りや　の　にかい　お　あけさせくれければ　かわ
に　はいり　めし　お　たべたる　ところ　なか〳〵
よけれども　しかるべき　しゆくはくじよ　の　み
つかること　とうてい　おぼつかなければ　かえる
と　いつけつし　六　じ　ごろ　また　ばしや　に
のり　ダイシヨウジ　に　もどり　八　じ　はん　ご
ろ　の　れつしや　にて　一〇　じ　ごろ　フクイ
に　つきたり　かねて　てんぽう　お　うちたれば
タカハシ　より　の　むかいのひと　おりて　キンシ
ヨウロウ　とやら　ゆう　りようりや　に　あんない
せり　このごろ　ぎようせいしつこうほう　の　こう
のう　にて　りよぢんやど　と　りようりや　と　の

八

けんぎよう　お　きんじ　たるに　そうおう　の
やどや　わ　あいにく　ふさがりたれば　タカハシ
が　とくべつ　に　けいさつしよ　の　ゆるし　お
えて　こゝ　に　とめることゝしたる　よし　いえ
も　ひろし　にわ　も　ひろし　まことに　ゆくわい
なり　しよくご　しちゆう　お　さんぽし　やはん
ごろ　ふしたり

あさ　ごゝ　あり　一二　じ　はん　すぎ　の
きしや　にて　いちどう　しゆつたち　マイバラ　に
て　ミウラ　トリイ　われ　の　三　にん　わ　ひが
しに　むかい　た　わ　にし　に　もどりたり　ナゴ
ヤ　シナチユウホテル　に　いつぱく

九

あさ　五　じ　すぎ　の　きしや　に　のり　ゆふ
六　じ　すぎ　きたく　テイ　わ　カマクラ　に
ゆきて　るす　なりし

二三

はゝぎみ　〔抹消〕〔ひ〕かぜ　の　きみ　に　て　びねつ
ある　よし　に　つき　ヱキ　と　こうだい　せしめ
ん　と　したる　に　ヱキ　わ　やぶん　うち　お
あけ　がたき　じゞよう　あり　サタケ　の　あね
お　たのみ　カマクラ　に　とまり　もらい　ヱキ
わ　はゝぎみ　お　どう〳〵　して　かえり　キタザ
ト　に　みせたる　に　べつじよう　なき　よし　も
うされ　はゝぎみ　わ　べつにん　と　おもわるゝ
まで　げんき　つき　また　カマクラ　え　かえられ

(77)

いちどう　あんどせり
まき　一七一　けん　八　ぶ　きりだし　に　たいする　やまやくせん　五一・四八（朱点）　および　五　がつ　より　八　がつ　まで　の　すみがまやくせん　八・〇〇（朱点）　ごうけい　五九・四八（朱点）　の　しうにう　ありたれども　よびきん　と　して　タケラヒ　てもとに　おく（朱書）〔（夕、ヒ二一一）〕
しよとくぜいがく　の　つうち　ある　に　しようく　ふえ　たり　これ　わ　ぜいきん　の　さ　と（抹消）〔けむや〕ケムヤマムラ　および　シケ　の　しよとく　の　くわゝりたる　が　ため　なり　よつて　五四ページ　いか　に　きさいし　おきたる　ぶん　おしゆがき　にて　その　とうり　なおしたり（朱書）〔（〃）〕
さる　一二　にち　の　こうずい　ツルコ　の　一六ノ二七ノ一　た　一　たん　八　せ　二〇　ぶ　わしつかい　むもう　と　なれり　その　たわ　イ、オカ　の　ほう　も　かくべつ　なし（朱書）〔（〃）〕

日　月
九　九

さくじつ　カマグラ　ゑ　こどもら　の　むかいがてら　七、八　りようげつ　ぶん　の　やちん　おぢさん　し　こん　ごゞ　三　じ　すぎ　の　れつしや　にて　テイ、ハマ、ミサオ、ツル　と　げぢよ

ツギ　お　ともない　ゆふがた　きたく　せり
たゞし　コウイチロー　わ　ケイマロ　と　ごぜんきゝよう　せり
八　がつ　一二　にち　の　しゆつすい　の　おりいためられたる　でんち　に　つき　さの　とーりニホンテツドーガイシヤ　ゑ　そんがい　の　ばいしよう　お　もーしこみたり
モトミヤ、ムラ、あざ、ツルコ
一六ノ二七ノ一
一みつぼれ　た　七　せ　一九　ぶ
このそんがい　きん　九一・六〇（朱点）
たゞし　一　つぼ　に　つき　〇・四〇（朱点）
このさくつけまい　きん　二一・九八四（朱点）
たゞし　〃　一二・〇〇（朱点）
一おしながされ　た　九　せ　三　ぶ
このさくつけまい　きん　一三・一〇四（朱点）
ただし　〃　一二・〇〇
〃　〃　〃　四ごーのみこみ
みぎ　わ　このほー　ほか　八　めい　にて　さしだしたる　よし　七七　ばん　この　いどがわ　さる　二九　にち　の　ぢしん　にて　くづれたる　につき　しんき　いどがわ　二　こ　いどほり　一八にん　の　ちん　をも　一一・〇〇（朱点）　ついやしたりもつとも　しやくやにん　ヤマモト、ユガリ　にて

しゆふく　すべき　はず　の　ところ　せがれ　シ
ゲオ　お　キヨート、ダイガク　ゑ　さしいるゝ　に
つき　てもと　ふじゆー　ゆゑ　この　ほー　にて
たてがゑ　ふしん　したる　よし　キクチ、ゲンサ
ク　じよーきよー　の　びん　に　まかせ　タケヒラ
より　もーしこす〔朱書（タ、ヒ七）〕

一六　きたる　一九　にち　シナノ、ニシツクマゴーリ、
ヨミカキムラ、ナギノサワ　ゴリヨーリン　に　りん
けん　の　こと　あり　たちあい　の　ため　しちつ
ちよー　せん　と　し　ウエダ　より　マツモト　に
こゑ　どーしよ　より　キソカイドー　お　ゆかん
とて　その　おもむき　お　ゴリヨーキヨク、ツマ
ゴ（妻籠）シユツチヨージヨ　ゑ　でんほーしたる
に　みち　わるく　ふつか　かゝる　ゆゑ　ナゴヤ
より　みのぢ　お　へて　きたる　べき　むね　ちゆ
ーこくし　こしたれば　にわかに　もよー　お　かゑ
一二　じ　はん　シンバシ　はつ　の　れつしや
に　ハマ、ツ　に　おり　オーゴメヤ　に　とまり
よくちよー（一七にち）五　じ　一〇　ぷん　に
て　ナゴヤ　に　ゆき　どーしよ　より　タヂミ（多
治見）ゆき　の　れつしや　に　のりうつり　チユー
オー、テツドー　の　はつのり　お　なし　タチミ
より　トキツ（土岐津）カマド（釜戸）オーイ（大井）
なかつかわ（中津川）オチアイ（落合）お　へて　八

住友定期預　母君鎌倉引揚　大屋　和田嶺　上諏訪　上松　寝覚ノ床　吾妻橋

じ　まゑ　ニシツクマゴーリ、アツマバシ（西筑摩郡
吾妻橋）の　アツマヤ　に　つく
やまけんぶん　すみたれば　ミドノ（三留野）ノジ
リ（野尻）スワラ（須原）タチマチ（立町）ネサメノト
コ（寝覚の床）お　へて　アゲマツ（上松）サカイヂ
ユー（堺重）に　とまる

二一　フクシマ（福島）ミヤノコシ（宮の越）ヤブハラ（藪
原）ナライ（奈良井）ニイカワ（贄川）モトヤマ（本山）
セバ（洗馬）シオジリ（塩尻）シモスワ（下諏訪）お
とーりこして　八　じ　すぎ　カミスワ、ボタンヤ
（牡丹屋）に　つき　よくじつ　とーりー

二二　ゆーめー　なる　ワダトーゲ　お　こゑて　ワダ
に　いで　ナガクボ（長久保）マルコ（丸子）お　へ
て　シンエツテツドー　の　オーヤ　ていしやば　に
つき　六　じ　すぎ　カルイザワ　の　しゆく　に
ある　カルイサワホテル　に　いつぱく　よく
ごゞ　四　じ　ごろ　きゝよー

二四　はゝぎみ　ゲンサク　とーはん　にて　カマクラ
スゞキ　かた　お　ひきはらい　ごゞ　六　じ　ごろ
きたく

三〇　日　月

一〇

四　スミトモギンコー、トーキヨーシテン　ゑ　きん

百草園　大国魂神社　府中 (82)　(81)

七

五、〇〇〇（朱点）　きたる　三四ねん　一〇　がつ　四　か
まで　一　か　ねん　ていきあづけ　お　なしたり
りそく　わ　七　ぶ　五　りん　の　やく　しよー
しよ　の　ばんごー　わ　たい　2／4ごー（第二／四号）にて　してんちよーこゝろゑ　ヨシダ、シンイチ（吉田真一）　しよめーなり

このごろ　にちようび　わ　あめふり　がち　なれ
ども　てんき　よき　ひ　わ　こはる　びより　に
て　うち　に　いたゝまらぬ　ほど　の　よき　きこ
う　なれば　きよう　わ　きんこう　に　えんそく
お　こゝろみん　とて　まんゆうあんないしよ　お
けみしたるに　ミナミタマゴウリ、ナ、フムラ（南多摩郡七生村）に　モクサエン（百草園）とゆうけしき
よき　ばしよ　ある　よし　なれば　ジムシヨ　の
ものと　うちあわせ　コウイチロウ、ヨシダ　お　と
もない　イチガヤのていしゃばより　コウブテツドウ
に　のり　シンジユク　に　つきたれば　ケイマロ
と　コマガミネ　は　シンバシ　より　シナガワ
お　まわりて　きたり　われら　の　れつしや　に
のりかゑたれば　うちつれて　オウクボ、ナカノ、オギクボ、キチジヨウジ、サカイ　の　五　ゑき　お
すぎ　イチガヤ　より　一　じかん　あまり　にて
九　じ　すぎ　コクブンジ　に　つきたり　ていしや
ば　いで、　みぎ　に　おれ　てつどう　せんろ　お

百草園　多摩川 (83)

よこぎりて　のみち　に　いで　一　り　ばかり
あゆみたれば　フチユウ　に　つきたり　コクブンジ
と　い、　フチユウ　と　ゆー　お　みれば　この
あたり　わ　むかし　ムサシ　の　みやこ　なりし
なるべし　みち　の　つきあたり　に　ふるき　じん
じや　あり　オウクニタマジンジヤ（大国魂神社）と
ゆう　しやでん　も　おもいのほか　りつぱ　にし
て　けいだい　も　ひろく　たいぼく　おうくして
なか〳〵　に　こう〳〵　し　けいだい　より　やし
ろ　に　そむいて　ひだり　に　まかれば　いど　の
ある　ところ　にて　モクサ　みち　に　いづる
（抹消）（また）ひだり　に　ゆけば　のち　わ　ほとんと
いつぽん　みち　なり　フチユウ　にて　わ　いゑ
ごとに　こつき　お　あげ）よし　なれども　まち
の　さま　お　みん　とて　わざと　もときし　みち
お　もどり　とりい　お　いで、ひだり　に　ゆけ
ば　いゑ　ごとに　ひのまる　の　はた　お　あげた
り　なにゆゑ　と　とうたれば　こうたいし　でん
かゞ　きじがり　とやらに　この　あたり　ゑ　なら
せられたりと　ゆう　かしや　に　たちよりたるに
せいようがし　など　あり　ゑいご　にて　ミキス
ド、ドロツプ　と　ゆう　れもんじる　など　いれて
かたち　も　まる　かく　さまざま　いろも　あか
き　しろ　いろ〳〵　に　せいしたる　ひがし　み

ゑたれば　それ　お　かわん　とて　さしゝめしたる
に　としわかき　むすめ　わ　もるとん　の　ことか
とて　のぞみ　の　しな　お　もちいだせり　なる
ほど　この　かし　の　せいぞうしや　わ　モルトン
と　ゆう　ひと　なるも　この　しな　お　しかゆ
う　こと　わ　この　いなか　まち　にて　はじめて
きゝしりたり　もつとも　かいゝれたる　しな　わ
わせい　にて　にせもるとん　なり　また　ひだり
に　おれて　ゆけば　あと　わ　ほとんど　いつぽ
ん　みち　〔抹消〕〔にて〕なり　二　り　よ　にて　かわら
に　いづ　はしせんの　でる　はし　お　わたり　タ
マガワ　おば　ふね　にて　わたる　わたしもり　わ
すぐ　そこ　なりと　いゝけれども　た　の　あい
だ　お　うねり　ゆく　こと　一五　ちよう　あまり
にして　ひたり　ゑ　さかみち　お　のぼり　ひだ
りがわ　に　いゑ　の　あるところ　より　みぎ　に
おれて　なお　のぼる　ごと　五、六　ちよう　み
ぎ　に　モクサエン　の　かたはし　お　みるべし
たかき　いしだん　お　のぼりつむれば　さゝやかな
る　ハチマンシヤ　あり　しやでん　の　まゑ　の
さゆう　に　あし　など　おれたる　ちいさき　あま
いぬ　こまいぬ　あり　おかしげなる　かつこう　な
れども　テンペイホウジ（天平宝字）　ねんだい　の
さく　にて　めつらしき　もの、　よし　しやでん

わき　の　みち　お　たどりゆけば　すぐ　ゑんない
の　すみか　に　いたる　こゝ　わ　もと　シヨウ
レンジ（松蓮寺）　とて　オウバクシユウ（黄蘗宗）　の
てら　なりしが　いしんご　ほとんど　すたれいた
るお　この　あたり　より　いで、　ヨコハマ　にて
しゆつせし　かの　ち　の　おうじぬし　と　なり
たる　アオキ　それがし　が　かいゝれて　しゆう
ぜん　お　ほどこし　しよにん　に　じゆうらん　せ
しむる　よし　いけ　ありて　こい　など　かい　き
お　うゑ　はし　お　かけ　しつらいたる　にわ
の　けしき　あしからざれども　それ　より　わ　つ
きやま　に　かたどりたる　てんねん　の　おか　に
のぼれば　ちようぼう　よき　ではな〳〵　に　ち
ん　お　しつらい　フジミダイ　とか　ジツコクダイ
（十国台）　とか　なつけたり　おもに　とうなん　と
うほく　の　ちようぼう　にて　タマガワ　お　まゑ
と　さゆう　に　なかめ　これ　お　へだて、　ひ
ろびろ　たる　ムサシノ　お　みわたす　けしき　め
つらしくて　おもしろし　きようわ　てんき　よけれ
ども　とうやま　わ　みゑざりし　ひだり　に　みゆ
る　ながき　はし　わ　タマガワ　に　かけおる　コ
ウブテツドウ　の　てつきよう　にて　その　にしき
た　に　ある　まち　わ　ヒノ（日野）　とて　ハチオ
ウジ　に　ちかき　ゑき　なり　われら　わ　にぎり

めし　お　たつさゑたるに　あたゞがき　すいもの
にても　ほしゝと　おもい　るずい　の　ぢゞばゞ
に　たつねたれば　ぢき　となり　に　キラクテイ
とて　てがる　りようり　する　うち　あり　はる
わ　ひとで　おうければ　なにか　の　ようい　も
あるなれども　このごろ　わ　さびしき　ゆゑ　ろく
な　もの　わ　あるべからず　されど　つゆもの　ぐ
らい　わ　でるべし　あつらいやらん　と　ゆう　に
　まかせ　や、　一　じ　も　たち　われら　わ　た
ゑがたくて　むすび　お　くい　おわりたるころ　よ
うやく　ふたぢやわん　お　もちはこべり　ふた　と
りて　みれば　みようが　の　たまごとぢ　とも　ゆ
う　もの　ならんか　なれども　たまご　わ　もうし
わけ　ばかり　あちら　こちら　に　ありて　なか
く、　とちべくも　あらず　ことに　みようが　お
きらい　の　ひと　おうくて　たのみたる　かい　も
　まちたる　かい　も　なかりし　されど　四　り
ちかく　あゆみ　きたりたる　けつか　にて　べんと
う　わ　つね　に　いくばいと　なく　うまく　たべ
られたり　〔抹消〕〔ゑん〕すみか　より　も　いながら　ひが
し　お　みおろすべく　このごろ　の　つきみ　わ
まことに　よかりしと　ばゞ　わ　いゑり　なるほど
　つきみ　にわ　くいきようならん　ヒノ　まで　の
みちのり　お　といたれば　一　り　ほどと　ゆう

(86)　(79)　(80)

九

　あんないしよ　にわ　コクブンジ　〔抹消〕〔より〕〔加筆〕〔にて〕
げしやする　が　じゆんとう　の　ごとく　しるし
あれども　ヒノ　より　の　きより　わ　その　四
ぶん　の　一　なりとわ　おどろきいりたり　しかし
　われらわ　ゑんそく　の　もくてき　なれば　うろ
お　とりたる　お　くやしくわ　おもわず　かゑり
　にわ　ヒノ　に　いでん　とて　うち　お　いで
すぐ　ひだり　に　みち　お　とり　けわしきさか
お　くだりて　ヒノ　かいどう　に　ゆきあたり　ま
た　ひだり　に　その　かいどう　お　たどり　ゆき
たれば　タカバタ　の　フドウ　どう　に　いたれり
　それ　より　かわ　お　わたりて　やがて　ヒノ
まち　に　いで　ひだり　に　おれて　ていしやば
に　つきたり　五　じ　まゑ　どうしよ　お　はつし
　タチカワ　お　へて　コクブンジ　に　いたれば
でんか　も　この　れつしや　に　めされ　たり　ゑ
んどう　の　ていしやば　わ　もちろん　ちゆうかん
　の　ふみぎり　にも　じゆんさ　たちいたり　はし
る　きしや　に　たいして わ　でんか　の　ありか
お　みわくべくも　あらず　なに　お　めあてに　け
いれい　お　なす　もの　にや
　けんぜい（ちそわり）こしはんき五七・〇〇（朱点）　そんぜ
い二五・〇〇（朱点）　よびきん一〇・〇〇（朱点）　つごー九二・〇〇（朱点）
きたる　一五　にち　までに　おくりくるべく　い

たぐら　ねだ　の　しうぜん　わ　このほう　の　け
んぶん　お　ゑたる　のちに　ちゃくしゆすべく　ま
さやね　ふきかゑ　わ　らいはる　まで　のばすべき
よし
ツルコ　はたがゑし　の　た　に　ついて　の　ぶん
ぴつとゞけ　わ　さる　三一ねん　一一がつ　ちゆう
さしいだしおきたる　ところ　きそく　かいせい
とう　の　ため　こんねん　五　がつ　あらためて
とゞけ　おきたるに　じつち　けんさ　の　うゑ　二
せ　一三　ぶ　まし　ようやく　すみたる　よし
すなわち　さの　ごとし〔(朱書)(94-5,124)〕

地目変換届

陸中国岩手郡〔(抹消)向中野〕〔(加筆)本宮村〕

第拾八地割字畑返シ　大字向中野

三拾三番ノ二

(朱書)元七等畑反別弐反八畝廿壱歩

此地価金弐拾八円九拾六銭

此地租金七拾弐銭

此増租金弐拾参銭

一五等田成反別〔(加筆・朱書)弐〕〔(抹消)反〕〔(加筆・朱書)八〕〔(抹消)畝〕〔(加筆・朱書)弐拾壱〕〔(抹消)歩〕

〔(加筆・朱書)参〕〔(加筆・朱書)壱〕〔(加筆・朱書)四〕

此地価金九拾〔(抹消)九銭壱〕円〔(抹消)五〕拾〔(抹消)八〕銭

〔(加筆・朱書)九〕〔(加筆・朱書)参〕〔(加筆・朱書)四〕

但反金参拾壱円九拾九銭八厘
同地割弐拾九番田五等ニ準ス

〔(朱書・抹消)しゆがさのすうじはゼイムキョクのていせいなり〕

豊作　水戸（81）

此地租金弐円〔(抹消)弐〕拾〔(抹消)九〕銭

〔(加筆・朱書)四〕〔(加筆・朱書)八〕

此増租金七拾〔(抹消)参〕〔(抹消)九〕銭〔(抹消)三厘〕

右今般地目変換致シ候ニ付地価修正相成度丈量図相添
此段御届候也

右地主菊池武夫代理

明治三十三年五月十一日　菊池武平　印

仙台税務〔(抹消)局〕〔(加筆)管〕理局長清宮質殿

地目変換丈量図

第拾八地割字畑返　陸中国岩手郡本宮村　大字　向中野

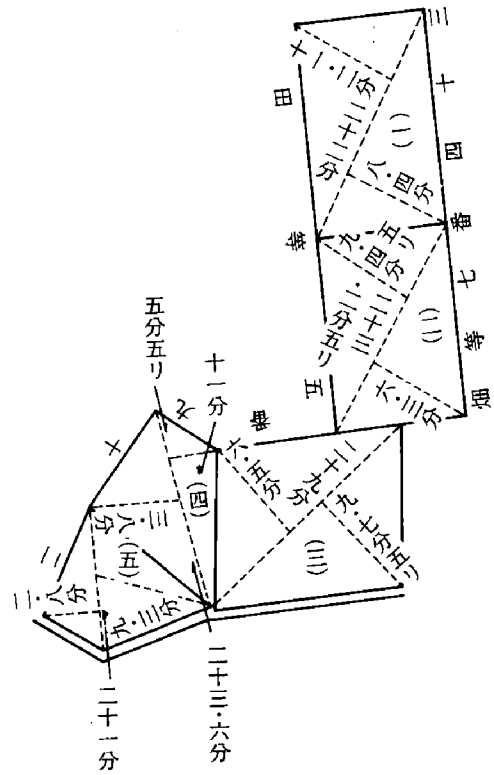
一五等田反別参反壱畝四歩　地主菊池武夫代理　菊池武平　印

(朱書)〔一〕　三百六十六坪一合八勺
〔二〕　四百三十一坪二合
三　四百七十一坪二合五勺
四　三百五十七坪五合四勺
〔五〕　二百四十二坪

計千〔(抹消)六〕〔(加筆)八〕百六拾八坪壱合八勺

些除九百三十四坪

〔(抹消)田畑果樹〕〔(加筆)ことしわ〕　た　はた　このみ　とも　じ
ようでき　くり　わ　一　しよう　〇・〇四　よな
る　よし〔(朱書)(タ、ヒ八)〕



一〇

さく　ごゞ　二　じ　はん　ウエノ　お　はつし
ツチウラ　トモベ　お　へて　七　じ　すぎ　ミト、
ウワイチ、スゞキヤ　に　ちやく　こんごゞ　三　じ
四九　ふん　にて　七　じ　すぎ　きゝよう

一七

あさ　九　じ　ごろ　テイ、ハマ、コウイチロウ
お　ともない　イチガヤ　より　しようしやし　シン
ジユク　にて　アカバネ　せん　に　のりかゑ　イタ
バシ　に　げしやし　スガモ　どうり　お　ソメイ
に　いたり　ヨウジユイン　の　はか　に　もうで
やすみぢやゝ　の　ある　とうり　お　ひだり　に
かやくこ　の　わき　より　オウジ　アスカヤマ　に
いで　オウギヤ　にて　ひるめし　お　したゝめ
うらもん　お　いで、　さか　お　のぼり　ゴンゲン
の　けいだい　に　いり　すゝき　の　ほ　にて
つくりたる　みゝづく　など　かいゝれ　もんぜんど

うり　お　しばし　ゆきて　ひだりかわの　ほそみち
お　つたい　タキノガワ　に　いたり　コウヨウジ
の　もん　お　いで、　おぼつかなくも　のみち
お　たどり　イタバシ　ていしやば　に　ちかき　ス
ガモ　どうり　に　いで　四　じ　ごろ　の　れつし
や　にて　きたくしたり　しゆうじつ　こうてんき
にて　じつに　こゝちよかりき　ミサオ　わ　じふて
りや　にて　アタゴシタ　の　キタザト　の　びよう
いん　に　にういん　ちゆう　ゆゑ　ゆかざりし

二〇

いつさく　一八　にち　二　じ　はん　の　れつし
や　にて　ふたゝび　ミト　に　おもむき　こん　ひ
る　きゝようす

二七

ハゞ　の　マサノスケ　の　こさくち　二〇〇　が
う　ほど　すいかい　に　かゝりたる　よし　にて
二　だ　の　ひきまい　お　ねかいゝでたれども　一
だ　に　じだんする　みこみ
〔イ（抹消）〕いたぐら　ねだ　おしあげ　やね　や　たゝみ
の　しゆふく　および　しんこくいり　たいぎりよ
うとう　に　あつる　ため　二〇・〇〇（朱点）　らいげつ
だい二き　の　ちそきん　一八・〇〇（朱点）　にうよう　こ
とし　わ　じようさく　の　ごとく　みゆれども　か
まいれすれば　おもいのほか　みいり　なき　むね
もうしこす　この　てがみ　わ　フセ、カメ　ぢさん
す〔（朱書）（タ、ヒ二六）〕

(87)

操退院　熊ノ平　礁氷嶺紅葉

二八

あさ　五　じ　ごろ　おきて　みじたくし　ケイマ
ロ、コウイチロウ、ヨシダ　と　ウヱノ　ていしやば
まて　あゆみ　テイ、ハマ　わ　くるま　にて　き
たり　六　じ　はつ　の　れつしや　にて　カルイザ
ワ　ゑと　しゆたちたり　あさめし　にわ　きしや
ちゆう　にて　〔し〕(抹消)〔ぢ〕(加筆)さん　の　ぱん　お　かじり
ウスイトウゲ　にてわ　とんねる　の　あいま〳〵
に　さゆう　の　こうよう　お　ながめ　つ、　一
二　じ　ごろ　カルイザワ　に　つけり　こ、　まで
三　とう　の　しやちん　一・二六(朱点)　なり　アブラ
ヤ　にて　ちゆうじき　お　したゞめ　一　じ　ごろ
より　ぶら〳〵　かいどう　お　くだり〔なに〕(抹消)　た
い、ち　の　ではな　にて　こうよう　ぜんぷく　の
けい　お　みはらしたる　わ　まことに　めさまし
かりし　くさばな　もみぢしたる　き　の　ゑだ　な
ど　おりとり　つ、　二　り　あまり　あゆむ　その
あいだ　さゆう　の　にしき　おりなす　けしき
め　も　はなされぬ　ばかり　なり　たい一三　ごろ
と　だい一二　ごろ　と　の　あいだ　に　ある
たかき　いしがき　の　ひだり　の　はし　より　あ
やしげなる　ほそみち　お　のぼるに　けわしくて
テイ、ハマ　わ　はうが　ごとくに　よちのぼれり
うゑ　わ　クマノタイラ　の　ていしやば　なり　こ、
に　つきたるわ　三　じ　はん　ごろ　なり　こ、

東陽館　名古屋支部　住友当座勘定開(88)　三一

二九

にてわ　きやく　の　のりおろし　お　せぬが　き
そく　なれども　とくべつ　に　たのめば　のする
なり　もつとも　カルイザワ　より　の　ちんせん
〇・一〇(朱点)　つ、　はろう　なり　ヨコカワ　にて　ウ
ヱノ　まで　の　きつぷ　お　もとめたるに　一・一(朱点)
六　つ、　なりし、六　じ　ころ　たかさき　にて
べんとう　お　かい　よ　九　じ　はん　すぎ　ウヱ
ノ　ゑ　つきたり
ミサオ　わ　は、ぎみ　と　ともに　キタザト　び
よういん　より　たい、んせり
スミトモギンコウ、トウキヨウシテン　と　とうざ
あつけきん　かんぢよう　お　ひらき　No. 111　の
しるし　ある　〔□〕(抹消)かよいちよう　TA　だい一ご
う　とうざこきつてちよう　および　とうざかんぢよ
う　にうきん　ひよう　つ、りごみちよう　の　三
ざつ　お　うけとる　りす　わ　〔ねん〕(抹消)ひぶ　〇・〇(朱点)
一九　にて　ねん　に　四　ど　けいさんし　こんご
わ　ミツイ、ミツビシぎんこう　の　りそつ　お
ひようじゆんとして　あげさげするも　これら　の
ぎんこう　さつこん　の　わりあい　〇・〇一五(朱点)　と
の　さ　すなわち　〇・〇〇四(朱点)　わ　つねに　かの
わりあい　より　おうくする　やくそく　なり

日　月
一一

三

きうちゆう　に　まいりて　ごたんじようび　の　めでたく　かゑりくる　お　ことぶき　たてまつる　わ　とうぜん　なるに　やまひ　と　しようして　たび　に　でる　わ　もとより　よろしからねども　が　いむだいじん　が　テイコク、ホテル　に　もようす　やかい　に　ゆく　わ　いなかで　の　ぎいん　に　わか　しんし　など　が　おうき　ゆゑ　なにとなく　やぼらしく　おぼゆ　しいて　すいじん　お　きどる　にわ　あらねども　あさ　六　じ　二〇　ぷん　シンバシ　はつ　の　れつしや　にて　ナゴヤ　ゑと　しゆつぱつ　せり　きよねん　も　ちようど　きよう　の　この　れつしや　にて　ナラ　ゑ　でかけたり　いわれ　わ　おなじ　トウキョウ、ホウガクイン、インユウカイ　の　カンサイ、ナゴヤ　りようしぶ　の　れんごうかい　ある　が　ため　なり　四　じ　すぎ　シナチユウ　ほんてん　に　つき　ゆあみ　お　おわるや　すぐに　マエツ　の　トウヨウカン　に　いたる　いりかわ　ともに　三〇〇　ぢようぐらい　の　にかい　おうびろま　に　ゑん　お　ひらき　しようめん　の　ぶたい　にて　のう　めきたる　おどり　と　きようげん　お　やきなおしたる　おどり　と　あり　のち　わ　かい、ん　の　かく

養老滝　名古屋支部会

四

しげい　ありそう　なる　もの　お　かわりがわり　かつぎあげて　ぶたい　にて　ゑんぜしめたり　こ、　に　あつまりたる　ともがら　わ　いづれ　も　せんもん　の　がく　お　おさめたる　のみ　ならず　あるいは　さいばんかん　けんさつかん　べんごし　の　ごとき　めいよ　しよく　お　とり　その　たさまざま　の　しやかい　に　おいて　いろ〳〵　の　ぎようむ　に　つき　おのおの　そうとうの　ちい　に　おる　こと　なるに　かれらが　おうやけに　ひらく　この　かい　に　げいしや　お　よび　さけ　に　よいて　さわぎ　まわる　わ　なんとしても　その　みがら　に　ふさわしからず　おうせい　いいん　に　つれて　きう　きりつ　お　はかいしたる　いきおい　の　とばしり　にて　いま　まで　わ　さほど　め　に　あまらざりしも　いつ　まで　かゝる　へいふう　が　おこなわるべき　やがて　むかしがたり　と　ならんこと　お　のぞむ　の　ほか　なし　ナゴヤ、シブ　の　れんちゆう　の　あんない　に　より　あさ　六　じ　二〇　ぷん　サ、ジマ、テイシヤバ　はつ　の　れつしや　にて　ヨウロウ、コウエン　に　おもむかん　とて　おぼつかなき　てんき　にも　か、わらず　テイシヤバ　に　いたれば　一　じ　かん　よ　おくれて　はつしやし　ギフ　より　わ　だいしよう　げいしや　四　にん　ちや、おん

菊水　千歳楼　養老滝 (90)

な　一　にん　のりあわして　にぎやかに　オウガキ
に　つきたる　わ　九　じ　すぎ　なりし　それ
より　じんりきしや　にて　つゝみ　の　うゑ　お
二　り　あまり　ゆき　ゲンジバシ　に　よりて　ツ
ヤガワ　お　わたり　タカタマチ　お　すぎ　さか
の　した　に　ある　むら　にて　くるま　お　おり
ちやゝ　に　やすみたるに　せんこく　ぐうせんに
どうしやしたりと　おもわれし　おんな　れん　も
きたれり　こ　わ　ギフ　の　れんちゆう　が　わ
れら　お　うれしく　おどろかさん　とて　たくみた
る　もの　と　いま　ぞ　しられける　みちすがら
も　こざめ　ふりいたる　に　あいにく　すこし　つ
よく　ふりだしたれども　かまわずに　さかみち　お
のぼりゆける　に　ちゆうと　に　かわしろ　の
ごとき　もの　みち　お　よこぎれり　たいう　の
せつ　やまみつ　の　あふれたる　にも　あらんか
しばらくして　トウバテイ(豆馬亭)　の　まゑ　に
いたり　みぎ　の　こだかき　ところ　に　ある　セ
ンザイロウ(千歳楼)　いちめい　〔か〕(抹消)カイラクシヤ(偕
楽社)　に　いこう　われら　わ　うち　に　いらずし
て　その　ま、　みち　お　みぎ　に　つたいて
〔いくたびも　なか〕(抹消)ヨウロウ、ジンジヤ　の　もと
に　つく　ちいさき　たき　あり　キクスイ(菊水)
と　ゆう　いしだん　お　のぼれば　たいぼく　の

養老寺　不動堂　養老滝 (91)

こたち　の　うち　に　ふるびたる　やしろ　あり
その　わき　の　いわま　より　いづる　しみつ　お
三　げん　しほう　ばかり　の　かくがた　の　い
け　たゝゑたり　はなはだ　きよく　して　また　は
なはだ　ひやゝか　なり　おんなども　わ　その　か
りう　にて　ちいさき　かなくそ　の　ごとき　いし
の　なか　ほそりて　ぜんご　や、　ひろがりたる
もの　お　ひろいとり　ゑびす　だいごく　なり
とて　ちんちよう　がれり　めいぶつ　きくすいしゆ
わ　この　みつ　にて　かもす　と　しようす　ま
た　おうがん　に　もどりて　ゆくて　の　ひだり
に　ミヨウケンドウ　および　ニツシン　せんそう
の　きねんひ　らしき　ぶゝうりうなる　もの　みゆ
たにかわ　お　あなた　こなた　に　わたり　やす
みちやゝ　の　すこし　てまゑ　にて　ふうじゆ　の
あいだ　より　たき　お　みる　この　けい　けだ
し　だいゝち　なり　まもなく　ちやゝ　に　いたる
こゝ　にて　ゆかた　ぞうり　など　たき　に　う
たるゝ　したく　お　かす　よし　なれども　じこう
はづれ　ゆえ　ためす　もの　なし　たき　に　ち
かづき　あおぎみるにたかさ　一〇　じよう　はゞ
二　けん　とやら　にて　さしたる　たき　にも　あ
らず　かたちも　めつらし　とに　あらず　たゞ　た
きつぼ　わ　ようやく　きびす　お　ぼつする　ぐら

いの　あさゝ　な[抹消][れ][加筆][る]に　おちくる　みつ　の
いきおい　も　さのみ　つよからねば　うたるゝ　に
わ　ちようど　よいほど　にて　みつ　わ　あくま
で　ひやゝか　なれば　しよちゆう　の　あそびば
に　わ　てきとう　なり　ちやゝ　の　みぎ　より
なお　のぼる　みち　ありければ　たき　お　みおろ
す　ところ　にても　ある　か　と　のぼり　たるに
ある　わ　ある　らしけれども　きけん　なれば
ゑ　こゝろみ　ざりし　もどりて　ちやゝ　に　こし
うちかけゝるに　まつちや　に　もちゆるが　ごと
き　ちやわん　に　くみて　いだしたる　わ　ちや
に　さんしよう　とやら　お　まぜたる　もの　の
よし　にて　みようなる　におい　ありて　あぢわい
も　よからず　センザイロウ　にて　ちゆうじき
お　したゝめたる　わ　もはや　二　じ　ごろ　なり
しならん　はらへらし　かたがた　やど　の　まゑ
の　すこし　みぎ　より　かわ　の　ほう　に　おり
る　みち　お　つたい　ブドウドウ　と　ヨウロウジ
に　いたる　ヨウロウジ　に　わ　ほうもつ　とし
て　かたな　など　ある　よし　なれども　みず　な
お　ひだり　に　くだりたるに　ヒガシホンガンジ
の　せつきようじよ　に　いづ　いましも　せつきよ
う　の　すみ　たりと　おほしく　おくれたる　ぢゞ
ばゞ　ども　おもてもん　お　いでゆけり　その

名古屋ビヤホール　素心庵　養老滝

六八

うしろ　の　ほう　に　のぼれば　ホンガンジ　の
なつべつそう　や、　にわ　がたち　お　なしたる
ところ　も　あれども　ゑんぼう　の　よき　に　わ
しかず　ふたゝび　ほんおうがん　に　のぼりいで
さらに　ひたり　に　すゝみ　キクスイロウ　お
みぎ　に　みつゝ　ソシンアン（素心庵）に　いこい
あるじ　の　あま　お　あいて　に　ちや　お　の
み　めいぶつ　どびんしき　や　ゑづ　あんないしよ
など　しいれ　三　じ　すぎ　やど　まゑ　より
くるま　に　のり　オウガキ　に　かゑり　五　じ
すぎ　の　きしや　にて　ナゴヤ　七　じ　まゑ　つ
き　いちどう　でんきてつどう　にて　ヒロコウヂ
の　びやほうる　に　いる　トウキヨウ　にわ　この
はる　いらい　いたるところに　びやほうる　ひら
け　あるいわ　キリン　あるいわ　エビス　と　おの
〳〵　とくい　の　びうる　お　一　ぱい　にても
二　はい　にても　きやく　の　もとめ　に　おうじ
て　ひさぐ　こと　りうこう　と　なりたるに　こゝ
にも　この　せいよう　いざかや　あり　とわ　お
もいよらざりし　ひるめし　おそかりし　ゆゑ　はら
わ　なお　すかず　さりとて　ていしやば　にて
ちり〳〵　に　わかれるも　なにとなく　たんぱく
すぎる　より　あたかも　よし　との　したごゝろ
にて　はいりたるに　あやしげなる　せいようりよう

五

り　お　いつぴん　さしいださせ　たらふく　のみた
れども　一〇　にん　にて　二　ゑん　ばかり　の
かんぢよう　なり　あん〔の〕(抹消)　の　ごとく　ゆきたり
と　ひそかに　ほゝゑみ　ながら　ホウガクイン
より　あづかりたる　ねづみいろの　じようぶくろ
より　さつ　お　いだして　はらいたる　ところ　あ
まりきん　おうすぎる　に　より　おごるべしと　い
われ　いな　とも　こたい　がたき　しぎ　と　なり
しからば　とて　フチタ、タカサブロウ　の　あん
ない　にて　カンノン　わきの　ヤチク（八千久）　と
ゆう　りようりや　の　べつそう　に　いたり　シン
チ　の　げいしや　お　まねぎて　きよう　お　たす
けしめ　三　じ　かん　あまり　あそびて　りよしゆ
く　ゑ　かゑれり

さくや　ヤチク　お　たつ　おり　しきりに　かん
ぢよう　お　もとめおれども　なにゆえ　か　さらに
おうする　けしき　なき　ゆゑ　けさ　わが　やど
に　かきつけ　お　もちきたる　べき　むね　めい
じ　おきたるに　一〇　じ　ごろ　に　なりても　お
とさた　なし　びやほうる　ゑの　あんない　だけ
わ　まるで　むだ　に　せられたり　とて　おういに
わが　しつさく　お　くやみ〔つ〕(抹消)　いたるに　はら
い　お　とりに　きたらぬ　こと　なれば　しつさく
てんじて　めいさく　と　なる　その　わけ　わ

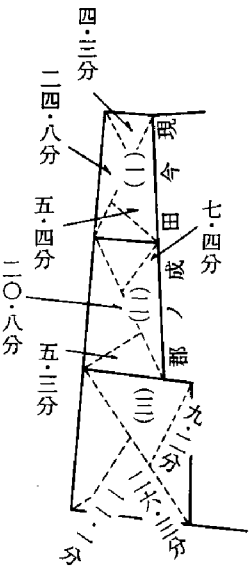
わが　おごり　とて　さくや　わ　もちろん　けさ
きた　ひとびと　にも　れい　お　いわせ　おきて
かんぢよう　おば　あんないしや　なる　フチタ　に
さする　こと　と　なればなり　もはや　きうこう
れつしや　の　しゆつぱつ　じこく　に　ま　も
なければ　しつさく　の　とりかゑし　わ　うけやい
なり　と　ひとり　うなづき　いたる　おり　フチ
タ　が　きたりて　さくや　ヤチク　わ　ふとうの
かんぢよう　にても　せざりしや　と　とう　ゆゑ
いくら　めいじても　わが　い　に　おうぜねば　こ
の　うゑ　いたしかた　なけれども　あながち　ふと
う　とも　おも〔ね〕(抹消)〔わ〕(加筆)ぬ　むね　こたいけるに
フチタ　わ　いたく　あわてゝ　それ　にてわ　たま
らぬ　とて　じぶん　の　しやふ　お　つかい　に
たて　つけ　お　とりきらしむ　しばらくして　つか
い　かゑり　なにほど　さがしても　みあたらぬ　お
もむき　ふくめいす　けだし　つけ　お　つゑ　と
あやまりたるなり　われら　の　しゆつたち　じこく
わ　いよ〳〵　せまる　フチタ　の　ふためき　か
た　ます〳〵　つのる　この　たび　わ　みつから
ヤチク　ゑ　あてたる　てがみ　お　したゝめ　しや
ふ　の　しんよう　けつぼう　に　つき　やど　の
もの　に　もたせ　やりたるに　やがて　ヤチク　の
なかい　わ　かんぢようがき　お　もたらしたれば

〔ひらきみるに〕（加筆） のりいれ の ぜんし ゑ ふて
ぶと に 七、八 かど かきつけ たり これわ
コウソインチョウ どの に たいして けいゝ お
ひようし たる わけ なるべけれども ゆいのう
の もくろく ぜんたるにわ いちざ どよめき
わたりて たれ ゆうと なく これ お かんじん
ちよう と なつけおく

六

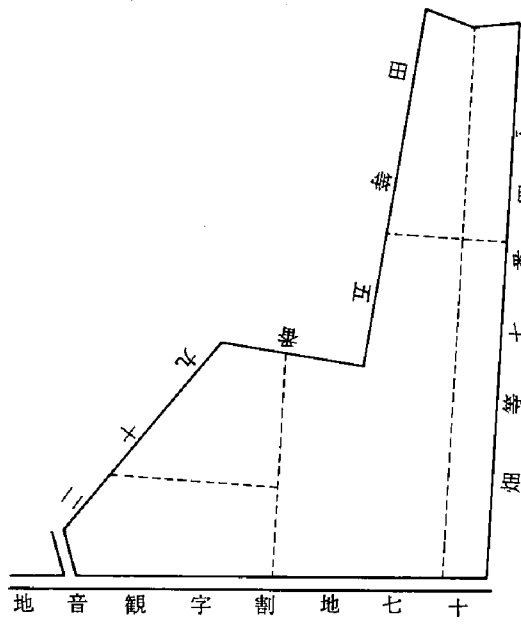
ゐどげた と おもてもん の おうど 〔お〕（抹消）〔わ〕（加筆）
しんきに こしらい もんばしら わ ねつぎ に
したるよし だい二 き ちそきん 一八・〇〇（朱点）
よびきん 三三・〇〇（朱点） せいきうし きたる さる
一〇 がつ 九 か に うけとりたる ちもく へ
んかん ぢようりよう づ〔（81）〕（朱書） お ぢわり ゑづ
に しようごうするに た に へんかんしたる
ぶゞん と はた の まゝ にて のこる ぶゞん
と の さかい も かたち も ふごう せぬ
よう みゆるに つき その だん といあわせ お
きけるに さ の とうり もうし こしたり

残畑反別丈量図



七〇

二除五一九坪反別一反七畝九歩
向中野十八地割三十三番字畑返
元反別四反九畝一歩
現田成反別三反一畝四歩 〔（80-1,124）〕（朱書）
残反別一反七畝二十七歩ノ処十八歩減ニテ右之通
リ〔（タ、ヒ三）〕（朱書）
しかるに ぢわり ゑづ の かたち わ さ の
ごとし



だい八一 ぺいじ の たなり の ぢようりようづ
と だい九四 ぺいじ の はた の ぶん と
お あわする とき わ みぎの ゑづ に おうべ
き はづ なれども ほうがく ちごう もの 、
ごとし キウシユウ、テツドウ、カブシキ、ガイシヤ

公費　水割引　小作米附入 (96)

二三

より ○・○七三（朱点） の わりやい の はいとうき
ん 六九・三四（朱点） うけとる その うちわけ わ き
うかぶ 一 かぶ に つき 一・八二五（朱点） づゝ 二
○ かぶ ぶん 三六・五○（朱点） だいゝち しんかぶ
一・四六（朱点） づゝ 一九 かぶ ぶん 二七・七四（朱点） だい
に しんかぶ ○・五一（朱点） づゝ 一○ かぶ ぶん
五・一○（朱点） なり

いつさくじつ までに こさくまい 一一四 だ
つけいり ありことし わ はる みづ ぶそく
なりしも そのご きこう ぢゆんとう なる の
みならず だんき ながく つゞき いかなる やま
おく にても しも の がい なく しよさく み
な じゆうぶんに みのりたれども かりいれて み
れば こめ わ ぞんがい しゆうかく なき よし

ハバ の マスノスケ さくち の うち せきぞ
いの ところ みつかぶり の ため 一 だ な
いし 一 だ はん ぐらい ひきまい お なす
の ひつよう あるべく イ、オカ の ヱイスケ
も みつかぶり に よる ひきまい お せいきう
すれども きゝとゞけ がたし やむ お ゑずば
ねんぷがし に とりはかろう みこみ の よし
マツオマヱ わ 一 そく の でもみ 三 じよ
う 八 ごう にて さくねん に ひすれば ほゞ
四 ごう ばかり の へり なれども げんまい

姉崎　五井　千葉 (97)

月　日

一二

二

キサラツ ゑ ゆく ようじ ありて ごゝ 一
じ ヱツゼンボリ しゆつぱん の こじようきせん
に のらんと したるに さくや カツサ ちほう
かぜ つよく かゑるべき ふね きたらねば この
ほう よりも でぬ とゆう いたしかた なく
すぐ フカゞワ お とうり ホンジヨ、キンシボリ
の ソウブ、テツドウ 一 じ すぎ の きしや
にて チバマチ の りょじんしゆく カノウヤ
に つき 二 にん びき の くるま お 五・○（朱点）
○ にて やとい 三 じ すぎ しゆつたちたり
チバ より いゑ つゝぎ にて ソガ に いづ
まち の ひがし に ボウソウ、テツドウ の ソ
ガノ の ていしやば あり この あたり せめん

二 だ とりいれ の つもり
イ、オカ ぶん あなぜき すいりどこうひ ついか
一○・八三四（朱点） なれば ムカイナカノ ぶん とも
にて 一二・○○（朱点） ぐらい なるべし けんぜい
ちそわり ムカイナカノ ぶん 四・五二（朱点） なれば
そうたい にて 一二・○○（朱点） ほど ならん
にかい した ぶりき の あまどい しゆふくひ
八・○七（朱点） お ようす と なり（朱書）〔（タ、ヒ二一）〕

木更津 (98)

と　の　せいぞう　さかんなり　まち　お　すぎて
みぎ　の　まゑ　に　みゆる　みさき　わ　ゴイ（五
井）の　さき　とか　ゆう　ヤワタ　に　いたれば
けいたい　ひろく　たいぼく　おいたつ　ハチマンシ
ヤ　あり　でんしんきよく　くさいばんしよ　しゆつ
ちようじよ　など　ありて　や、　はんか　なり　ま
ち　に　いる　まゑ　に　ムラタガワ　あり　その
かわぐち　わ　シモウサ　と　カツサ　の　さかい
なる　よし　（加筆）〔こ〕、　〔わ〕　チバ　より　二　り　よ
にて　イチハラ　ゴウリ　に　ぞくす　ゴイマチ　の
　みなみ　にて　ヨウロウガワ（養老川）お　わたり
しばらく　の　あいだ　さくらのき　りよう　がわ
に　たちならびたる　どて　の　うゑ　お　とうる
その　けしき　さながら　ムコウジマ　の　ごとし
ゴイ　より　二　り　ばかり　にして　アネガサキ
に　いたる　（抹消）〔キサラツ〕（加筆）〔アワ〕、ニシカイドウ　ち
ゆう　はんか　の　ばしよ　の　ひとつ　にて　もと
わ　ツルマキ（鶴牧）と　しようし　ミズノ　の　じ
ようか　なり　まちはづれ　の　ひだり　に　たいぼ
く　はんも　したる　（抹消）〔もり〕（加筆）〔おか〕　あり　ミヨウジ
ンノモリ　とゆう　その　いたゞき　に　アネガサキ
ジンジヤ　ありて　ヤマトダケノミコト　お　まつる
　よし　この　へん　すべて　ミコト　の　こせき
おうし　この　さき　わ　二　り　たらず　の　あい

玉屋

だ　みち　に　たしよう　のぼり　くだり　あり　さ
れど　とくに　さか　と　ゆうべき　ほど　の　もの
　なし　たゞ　ぜんご　まつたいらなる　ゆゑ　しや
ふ　ども　わ　あくろ　の　ごとく　ゆう　あり　す
こし　のぼりたる　ところ　に　みぎ　がわ　に　ち
や、　あり　チバ　より　くる　じんりきしや　わ
かならず　こ、　に　いこう　また　一　り　ばかり
　にして　モウダゴウリ（望陀郡）ナラワ（奈良輪）に
いたり　しやふら　ちようちん　お　ともせり　ぢ
よたい　と　なりて　きようり　に　かゑる　へいし
と　あやまり　かんげい　いいん　と　おぼしき
おとこ　ども　きたりて　わが　くるま　の　ぜんご
さゆう　に　た（抹消）〔つ〕（加筆）〔ち〕　など　したり　この　ひ
わ　ゑんどう　の　しゆくじゆく　そんしや　また
わ　てら　など　お　しきぢよう　に　あて　こつき
や　かんげい　の　い　お　ひようしたる　はた
お　たて　つらね　しゆび　よく　へいゑき　お　お
ゑたる　わかもの　ども　お　むこうる　の　ようい
さかん　なり　かゝる　にゆうひ　の　いる　ふう
わ　いつ　まで　つゞく　もの　にや　また　二
り　ばかり　にて　キサラヅ（木更津）に　いり　り
よしゆく　タマヤ　に　つきたるわ　七　じ　ごろ
なりし　ホンジヨ　お　三　じ　に　でたる　ミヤ
コ、ケイザブロウ（宮古啓三郎）し　わ　チバ　より

七二

桜井　吾妻神社　木更津 (99)

一　にん　びき　にて　九　じ　ごろ　らいちやくし
たり　し　の　ついやしたる　じかん　わ　われの
と　たいさ　なし　みち　たいらかなる　ゆゑに　一
　にん　びき　と　二　にん　びき　と　の　あいだ
　こうのう　の　ちがい　なき　が　ごとし　し　が
　はらいたる　くるまちん　わ　一一・八〇（朱点）　と　いゑ
ば　われ　わ　二・二一〇（朱点）　お　むだ　づかいしたる
かんぢよう　なり　キサラヅ　わ　チバ　お　さる
九　り　二一　ちよう　と　ゆう　さる　七　がつ
はじめ　に　きたりし　おり　ギヨウセイ、ケイサツ
ホウ　の　けつか　なるか　チバケン　にてわ　やど
や　と　りようりや　と　の　けんぎよう　お　きん
じたる　よし　にて　タマヤ　も　おもて　お　りよ
うりや　とし　うらざしき　お　やどや　と　せる
むね　ひろう　しけるが　いまわ　やどや　せんぎよ
う　と　なりたる　ようす　にて　さみせん　の　お
と　など　きこゑず　しつか　にて　とまりこゞち
よし

三

　まち　の　〔とう〕（抹消）〔せい〕（加筆）ぼく　の　はし　に　アヅ
マ、ジンジヤ（吾妻神社）れい　の　ヤマトダケノミ
コト　の　きさき　オトタチバナヒメ　の　しがい
こゝ　に　ひようちやくしたる　に　より　それ　お
　まつれる　よし　なれども　みる　に　たらず　か
ゑつて　まち　の　ちゆうおう　ひがし　がわ　に

小作米金仕訳　木更津 (100)

ある　ハチマンシヤ　の　ほう　りつぱ　なり　かい
がん　の　あさげしき　お　なかめん　とて　まち
の　なんたん　より　みぎ　に　おれ　まつ　の　は
ゑたる　すなやま　の　こなた　に　かいすい　お
ひきて　いきす　の　ごとき　もの　お　しつらいた
る　ところ　に　いたり　みち　なき　いそべ　お
たどる　うち　かいじよう　に　うかべる　す　そう
　の　りようせん　にて　ふなばた　お　たゝく　お
と　かまびすし　いわし　お　とる　もの　の　よし
　はなれや　の　ある　ところ　に　ゆきつきけるに
　なんぞ　はからん　かんごく　の　ひゞよういん
ならんとわ　た　の　くろ　お　たどり　よう〳〵
うがん　に　いで　みぎ　に　ゆき　こばし　お　わ
たりて　サクライ　に　いる　トウキヨウ　レイガン
〔ヤ〕（抹消）〔ジ〕（加筆）マ　より　じようきせん　にて　きたり　ア
ワ　〔ゑ〕（抹消）〔の〕（加筆）ほう　ゑ　むこう　もの　わ　キサラ
ヅ　ゑわ　こず　べつの　はしけ　にて　こゝ　ゑ
あがるなり　また　おうがん　お　もどりて　キサラ
ヅ　の　なん　たん　カイブチ（貝淵）に　いる　イ
シン　の　さい　かんぐん　に　こうしたる　ハヤ
シ、ショウノスケ　の　ぢんや　ありし　ところ　と
　いゑど　いまわ　あとかた　も　なし　けさ　やど
や　の　もの　も　おき　そろわぬ　ころ　みつから
おく　ざしき　ぐち　の　と　お　ひらき　いでた

る　ぐらい　にて　しかるべき　はきもの　の　みゑ
ぬ　ゆゑ　べんじよ　に　そなへたる　たけぞうり
お　うがちて　あるきたるに　あし　の　うら　に
いたみ　お　おぼゑ　あらためけるに　まめ　できた
り　くつ　のみ　はき　おる　ゆゑ　あし　の　した
よわく　なりたると　みゆ　おしきり　と　ゆう
ふね　お　したで、　かゑらんとしたるに　四　ちよ
う〔抹消〕〔ろ〕　ろ　ならでわ　できず〔七〕九　り　の　かい
しよう　お　七　じ　かん　にて　わたる　よし　な
れば　てんき　わ　おだやか　なれども　ちやく　お
そく　なる　ゆゑ　やはり　じんりきしや　お　やと
いて　三　じ　ごろ　タマヤ　お　たちいでたり　も
つとも　さくや　に　こりて　一　にん　びき　にし
たり　しやふ　ら　わ　ゴイ　にて　はら　お　こし
らい　ついに　七　じ　すぎ　の　きしや　の　ま
に　あい　ホンジヨ　に　つき　たる　わ　八　じ
すぎ　なれば　めい〳〵　たく　まで　かゑる　とき
わ　あまり　おそく　なる　ゆゑ　リヨウゴク　ヨ
ネザワチヨウ　まで　ゆき　トリヤス（鳥安）にて
ばんめし　お　たべたり

一七　しうのう　ずみ　こさく　べいきん　わ　さ　の
とうり

だ　ど　しよう

〔抹消〕一〔八九〕〔加筆・朱書〕〔九〇〕三　七　　こめ

〔朱書〕〔しゆがき　わ　タ、ヒ二六　に　より
ていせい　の　ぶん〕

一　三　七（だ　ど　しよう）　もちごめ
一九三　〇　〇　ごうけい
一　〇　〇　そば
一　五　あづき
みのう　わ　さ　の　とうり
〔抹消〕〔一〕〔加筆・朱書〕〔一〕三（だ　と）七　キンタロウ
三　七もとフクタロウ
五　〇　〇　メイスケ
一　〇　〇しつけまい（仕付米）〃
四　三　七　エイスケ
三　七　〃
〔抹消〕〔一〕〇　〇〕　マサノスケ
〔抹消〕〔一〕三　七　キゾウ
一〔抹消〕〔四〕〔加筆・朱書〕〔三〕〇　〇　ほんねんど　こさくまい　みのう
ごうけい
一　三　七　しつけかしまい　〃
ゑん
二〇　〇　〇　ニスケ（サンノウはたゞい）
八　〇　〇　すみがま　やくせん
〔加筆・朱書〕〔16/4, p.141；20/5, p.14〔7〕〔8〕, 27/5, p.149；15/6, p.151〕〕
キンタロウ、もと　フクタロウ　ぶん　わ　みづかぶ

一七

一五（ママ）

りの　ため　ひがい　ある　ゆゑ　ひきまい　また
わ　ねんぷがし　に　することも　あるべし　おうば
ぶるまい（大場振舞）　わ　らい　一　げつ　五　か
ごろ　に　もようし　ざつこく　の　はいぶん　そ
の　た　くわがしら　やまもり　とう　ゑの　せいぼ
わ　れいねん　の　とうり　とりはからい　二
八（朱点）・〇〇　わ　よびきん　と　して　とりおく　むね
もうし　きたる（朱書）〔（タ、ヒ一六）（10〔8〕（抹消）〔7〕（加筆）-9）〕
キウシユウ、テツドウ、カブシキカイシヤ　より
の　つうち　に　よれば　トウキヨウ、カサイホケ
ン、ガイシヤ　ゑ　きたる　一八　にち　より　メイ
ヂ　三四　ねん　一二　がつ　一八　にち　しようご
まで　一　か　ねん　かん　の　ほんたく　ほけん
りよう　八五　ゑん　はらいねたし　だい一七八八
ごう　けいぞくほけんりよう　うけとりしよう　お
とる〔（朱書）（16/12/32,p.44）〕

りゑき　はいとうきん　わ　そうかい　の　けつぎ
ろく　うつし　お　もつて　つうち　しだい　してい
ぎんこう　より　うけとらるゝ　こと　と　するに
つき　してい　ぎんこう　ゑ　さしまわすべき　い
んかん　一　まい　さしだすべく　また　かぶきん
りようじうしよう　と　かぶけん　と　お　さしだせ
ば　すぐに　けんめん　に　はらい　ごみ　きん　だ
か　お　かきいれる　ぎんこう　わ　トウキヨウ　に

一九

てわ　ゴウシガイシヤ、イマムラギンコウ　のみ　な
り　はいとう　りゑきゝん　うけどり　ばしよ　お
かゑる　ときわ　かみ　はんき　わ　九　がつ　三〇
にち　しも　はんき　わ　三　がつ　三一　にち
までに　きめい　ちよういん　の　とゞけしよ　お
さしだすべしと　なり　われ　わ　カブシキガイシ
ヤ、ダイ、チギンコウ　お　みぎ　うけとりば　に
していして　いんかん　お　さしだせり
この　二、三　にち　はら　ぐわい　あしく　さくや
わ　いたみて　一　ど　くだりたる　ゆゑ　ふくや
くす

この　ごろ　オウシユウ　へん　わ　ゆき　おうく
ふりて　ガンヱツ　せん　など　わ　れつしや　ゆ
きどめ　に　あいたり　とか　だつせんしたり　とか
ゆう　ゆゑ　あさ　七　じ　はん　ウヱノ　はつ
の　れつしや　にて　ジヨウバン　せん　お　ゆく
タバタ　より　ひがし　に　おれ　キタセンヂユ　に
て　むかし　の　しおきば　の　なごり　なる　いし
ぢぞう　お　みぎ　に　みおろ〔し〕（抹消）〔す〕（加筆）　くびきり
ば　と　い、　コツガハラ（骨ヶ原）と　い、　みの
け　も　よだつ　ほど　さびしき　ばしよ　なりしも
いま　わ　かおく　せつぴし　むゑん　の　もうじ
や　お　なぐさむるが　ために　たてられたる　ぢぞ
うそん　わ　ぶんめい　の　どうろ　に　さしはさま

石岡　霞ケ浦　常盤線（103）

れ　わつかに　さんかくけい　の　だいち　お　ゆう
〔する〕（抹消）〔し〕（加筆）　てもちぶさた　なる　も　おかし〕　アラ
ガワ　お　わたりて　ミナミ、センヂユ　に　やすむ
こ、　より　〔エ〕（抹消）トウブ　せん　に　のりうつれば
コシガヤ　とう　ゑ　ゆくべし　カネマチ　お　す
ぎ　エドガワ　お　わたれば　シモウサ　の　くに
にて　だい、ち　の　ていしやば　わ　マツド　なり
まち　の　ひがし　てつどう　の　みぎ　に　たか
だい　あり　サガミダイ　と　い、し　に　あたる
か　いま　わ　ミト　の　いんきよ　トクガワ、アキ
タケ　の　ぢゆうきよ　あり　と　ゆう　トネガワ
お　わたれば　トリデ　に　つく　こ、　に　ならづ
け　の　めいぶつ　ありて　おり　に　いれたる　お
ていしやば　に　うりきおれるに　やめたる　にや
かげ　みゑず　はや　ヒタチ　に　いりたり　と
おぼしく　ひだり　に　ウシグヌマ　お　みそめたり
そうじて　この　へん　にわ　ぬま　あまた　あれ
ども　きしや　より　ながめて　め　に　たつ　わ
この　ぬま　および　ミト　の　センバ、ヌマ　なり
もつとも〔つぎの〕（抹消）　ていしやば　アラガワオキ〕ツチ
ウラ　にて　でおう　カスミガウラ　わ　べつだん
にて　しゆうい　三四　り　よ　と　ゆう　ツチウラ
の　めいぶつ　わ　さくらゑび　にて　こ、　にて
こすい　に　そ、ぐ　サクラガワ　より　とれる

平　助川　大甕（104）

ゆゑ　か　ゑび　の　いろ　あかき　ゆゑ　か　しら
ねども　ほしたる　こゑび　お　かさねおり　に　い
れて　うる　その　ま、　たべて　も　しお　かげん
よくて　うまし　あたい　〇・三〇（朱点）　なり　イシオ
カ　わ　むかし　こくぶ　の　ありたる　ところ　に
て　〔はく〕（抹消）〔バクフ〕（加筆）　じだい　わ　フチユウ　と　と
ないたる　よし　〔タカハマ　にて〕（加筆）　コイセガワ（戀
瀬川）　お　わたり〔たる〕（抹消）〔ところ〕（抹消）　〔に〕（抹消）〔やが〕（加筆）て
〔つく〕（加筆）　ところ　にて〕　むかし　ヒタチ　の　ダイジ
ヨウ、クニカ　の　すまいし　まち　なり　その　ぼ
だいじ　ヘイフクジ（平福寺）　いま　に　そんする
よし　トモベ　にて　オヤマ　より　きたる　せん
と　がつし　二　ゑき　お　へて　ミト　に　つく
じようとう　べんとう　わ　いつも　ある　ことく
おもいのほか　ざいりよう　なくて　こしら〔い〕（抹消）〔わ〕（加筆）
ぬ　と　ゆう　〔だい〕（加筆）　三　ゑき　わ　オウミカ（大
甕）にて　これ　に　いたる　すこし　まゑ　みぎ
に　みゆる　かいがん　の　まち　わ　クジマチ（久
慈町）なり　クジガワ　お　わたりて　オウミカ　に
いたる　ヒヤクニンイツシユ　に　いわゆる　ミカ
ノハラ　にて　イヅミノモリ、ジンジヤ　など　ある
よし　タガゴウリ　に　いれば　スケガワ　に　シ
ヨウフウカン（松風館）タカハギ　に　タカハギカン
など　こんねん　はじめて　ひらきたる　かいすい

よくじよう あり イソワラ の かいがん に テンピザン(天妃山) あり わつかに すなち に よりて りく と つながる、 ちいさき しまやま の ごとき もの〔(加筆)にて〕 おいまつ はんもして かいしよう の ながめ さぞかし と おもわる、

その すこし おき に フタツジマ あり もと いわ 二 ありし よし なれども いま わ 一 のみ この へん の かいがん にわ くつきよく なく したがつて わん またわ みなと なきが めづらしくも よほど かいちゆう ゑ とつしゆつしたる みさき あり その もと に ある わ オウツマチ(大津町) にて すぐ セキモト(関本) に ていしやす こ、 より オウツ ゑも ヒラカタ〔(加筆)(平潟)〕ゑも 七 ちよう なる よし ヒラカタ わ みゑず こ、 わ ヒタチ の はし にて つぎ の ナコソ(勿来) わ はや イワキ の くに に ぞくす ナコソノセキ の あと も この あいだに あり と ゆう イヅミ(泉) ユモト ツゞレ(綴) いづれ も〔(抹消)い〕イワキ たん の しゆつに どごろ にて せきたんざん より きたる とくべつ の てつどう あり タイラ わ ゑんどう だい二 の おうまち〔(加筆)なれども〕 やどや の よき もの なし せんねん だい一 とう と とのうる スミヨシヤ に やどれる に いゑ の こうぞう あしくして だいどころ や へんじよ の におい さんがい の ざしき に しんにゆう し きたり ふかい せんばん なりし ユモト すなはち ミバコオンセン(三函温泉) の シンユ とか ゆう うち など わ はるかに まさる なり ナツイガワ(夏井川) お こし ヨツクラ に いたれば かいすいよくじよう あり つぎ なる ヒサノハマ にわ サイギヨウホウシ の うた にて なだかき コヌミカウラ(木奴美个浦) や ナミタチヤクシ とう あり この ぜんご とんねる の かず おびだゝし もつとも ながき わ 四 ふん かん かゝる もの にて これ お とうれば トミオカ に つく こ、 より みち わ や、 かいがん お はなる されど はなはだ とうざからざれば ときおり うみ お のぞみ つ、 ゆく ハラノマチ わ むかし ソウマ こう が うま お ぼくせし ち なり と ゆう きしや お いる、 いたぐら あり ナカムラ わ ソウマ こう の じようか なれども いなか まち らし、 むほんにん たる マサカド の し そん が とにかく だいみよう として そうでん したる わ しやわせ と ゆうべし まち の なん たん お ながる、 ウタガワ(宇多川) の か わぐち に マツカワウラ と ゆう マツシマ に

中村　阿武隈川　松川浦　木奴美ケ浦

平　仙台 (106)

も　おとらぬ　こう　ふうけい　の　めいしよ　あり
ちかごろ　わ　かいすい　よくじよう　として　す
こぶる　ひようばん　よし　つぎ　の　シンチ　より
わ　かいめん　および　とうゑい　お　むがむべし
やがで　イワキ　リクゼン　の　さかい　なる　ヒ
ロセガワ　すなわち　アブクマガワ（阿武隈川）の
まつりう　お　わたりて　イワヌマ　に　いたり　オ
ウシユウ　せん　に　いづ　ナトリガワ　お　わたり
て　センダイ　に　つきたる　わ　七　じ　はん　ご
ろ　なりし　すなわち　とまりつけ　の　ムツホテル
に　いる

二〇

ぼうかん　の　ようい　さいわいにして　むだ　と
なり　さくや　も　けさ　も　トウキヨウ　より
あたゝかく　コウソイン　に　ゆく　とき　がいとう
お　きる　わ　なにとなく　じゆうじやく　らしく
おぼゆる　ほど　なりしが　さすがに　ゆうがた
わ　こざむく　よる　ミネ　の　さいくん　なまび
の　ほしがき　お　もちて　きたる　こゝ　にわ　さ
かな　たくさん　あれども　みな　あぢわい　わるき
ゆゑ　さくや　こんや　とも　ぎゆうなべ　お　あ
つらいて　たべたり　ヤマガタ　の　ほう　より　く
る　とか　にて　なか〳〵　うまし

二一

あさ　七　じ　二〇　ぷん　にて　またぞろ　ジヨ
ウバン　せん　お　かゑる　二　とう　の　ちんきん

七八

収納米仕訳訂正　歳暮 (107)

五・〇〇（朱点）　たらず　なり　すこし　くもりたる　た
め　おとゝい　より　さむく　ナカムラ　にて　ゆき
の　はしり　に　であいたり　タイラ　にて　ノブ
オカ　と　わかれ　じようとう　べんとう　お　もと
めたる　に　〇・二五（朱点）　にて　おり　の　ふくいん
わ　ちいさ　けれども　かさね　にて　とつて　あり
さげぢゆう　の　かたち　なり　した　なる　わ
めし　う〔へ〕（抹消）〔る〕（加筆）　にわ　さい　なお　その　う〔へ〕（抹消）
〔る〕（加筆）　に　こう〳〵　お　いれたる　ちいさき　おり
ていさい　も　ちようり　も　よろし　タバタ　ま
で　わ　ていじこく　に　つき　たれども　なん　の
わけ　やら　れい〔の〕（抹消）　の　とうり　三〇ぷん　ば
かり　またせられ　八　じ　すこし　まゑ　ウエノ
に　つきけり　とかく　ジヨウバン　せん　わ　ま、
こ　あつかい　に　おう　もの　の　ごとし

二三

こぎつて　お　しようする　とうざ　あづかり　き
ん　わ　一〇〇・〇〇（朱点）　お　たんい　とし　その　み
まんの　はすう　にわ　りそく　お　つけぬ　こと
に　らいげつ　一　じつ　より　じつこうする　むね
もうしきたる

二四

じむしよ　いん　および　かぞく　ゑ　せいぼ　き
ん　お　ぶんよしたり　こども　ら　わ　おい〳〵
せいちようしたる　に　つき　ぶんぱい　だか〔お〕（抹消）
〔に〕（加筆）　しんしやく　お　くわいたり

二七

一〇・は、ぎみ　一〇・〔み〕〔ミ〕ネ　一〇・ヱキ
一〇・ヱキ（とくべつ　カオル　ゑ　の　こころ）
五・トヨカワ、ヨシ　五・ケイマロ　二・テイ
二・ハマ　一・コウイチロウ　五・ミサオ
三〇・ツル

ヨシダ　わ　はる　いらい　ひとり　にて　いゑ　の
ない　がい　の　よう　お　たつしたる　に　つき
とくべつに　五・〇〇　やる　タケヒラ　ゑわ　れ
い　の　とうり　一〇・〇〇　つかわす　はら　ぐわ
い　なお　なおらねば　さくじつ　より　ふたゝび
ふくやくす　テイ　も　二、三　にち　まゑ　より
ちよういあしき　ため　ねつ　お　はつしたる　お
もむき　にて　ふす

さる　一六　にち　つけ　にて　ほうこくしたる
こさくまい　とりいれ　および　みのう　だか　に
いさん　あり　また　その　ご　つけいり　も　あり
たり　すなわち　しゆうのう　ごうけい　わ　一九〇
だ　なりしに　マサノスケ　より　一　だ　キゾウ
より　一　だ　かたま　しよくち　の　はまい　かた
ま　にて　げん　しゆうにうまい　わ　一九三　だ
みのう　の　うち　キンタロウ　わ　二　だ　かたま
なり　みぎ　キンタロウ　ぶん　および　もと　フ
クタロウ　ぶん　かたま　あわせて　三　だ　わ　じ
じつ　すいがい　ある　に　つき　三　が　ねんぷ

(109)

に　き、とゞけ　たし　ヱイスケ　メイスケ　わ　そ
の　ご　いちりゆう　も　つけいらず　みのう　だか
あまり　おうければ　こさくち　とりあげ　に　と
りはこぶべきや　また　ダイキチ　より　二三〇　ゑ
ん　にて　さ　の　ち〔よ〕〔し〕よ　お　かいとり　く
るべき　むね　ねがい、でたり〔(101, 115, 123)〕

下飯岡一六地割ノ三二番字南谷地
田壱反七畝二五歩　地価　四・五八二
同　一七〃　ノ二六〃田中
〃一七歩　但谷地　〃　一・九二七
同　〃　三一〃　〃
〃五畝〇一歩　但苗代　〃　一三・〇一〇
苅敷百苅　小作米三駄〔(129)〕

もつとも　この　ねだん　にて　かいとり　くる、
ならば　せんねん　かりたる　一〇　ゑん　わ　さし
ひきする　よし　じか　わ　こさく　まい　一　だ
に　つき　七〇　ゑん　ぐらい　なれども　じあい
お　もつて　かい　つかわして　わ　いかゞ　イ、オ
カ　へん　わ　ちしよ　の　わり　に　ひと　すくな
き　せい　か　こさくにん　に　くじよう　おうけれ
ば　ダイキチ　の　もの　ならねば　す、め　かぬる
よし　ヱイスケ　および　マサノスケ　さくち　の
うち　せき　ぞい　の　ところ　わ　三　ねん　に
一　ど　ぐらい　こしよう　ある　ゆゑ　おい

三〇

わ　うりはなす　ほう　しかるべしと　なり
〔（朱書）（タ、ヒ二六）（100-1）〕
は、ぎみ　コウイチロウ　ツル　と　ともに　あゆみて　スチガイ　に　いたり　ばしやてつどう　にて　ウエノ　お　へ　アサクサ　カンノン　に　つき　スイゾクカン　ハナヤシキ　たまのり　など　けんぶつし　〔（抹消）ひ〕また　てつどうばしや　に　のりて　ウエノ　に　おり　あゆみて　サドワラチヨウ　に　かゑれり　さすがの　アサクサ、コウエン　も　としの　くれ　わ　さびしき　もの　なり

明治三十四年（かのとうし）

日　月　メイヂ三四（かのとうし）ねん

五

一　さくねん　あき　ごろ　オ、ツキ、チリ　その　たの　ひと　お　へて　二　ぢよ　テイ　と　けつこんし　たき　ない、　お　つた〔（抹消）い〕〔（加筆）ゑ〕たる　オグラ、コウヘイ（小倉公平）わ　くれ　の　きゆうかにて　キヨウト　より　しゆつきようしたる　に　つき　みあいし　たき　よし　もうしこしたる　に　より　なこうど　アダチ、マツタロウ（安達松太郎）の

六

コイシカワ、タケハヤチヨウ　の　たく　ゑ　ミネと　テイ　お　ともない　ゆきけるに　せんぽうより　わ　ち、　なる　オグラマサジ（小倉政二）と　コ〔（抹消）イ〕〔（加筆）ウ〕ヘイ　と　ふたり　きあわせたり　コウヘイ　わ　よく　ふとりて　いろあい　よく　さもたつしや　らしく　め　わ　ほそけれ　ども　あいきよう　あり　おんじゆん　にして　しかも　さいちあり　そう　なり

しようご　すぎ　なこうど　アタチ　し　わ　みつから　ゆいのう　とりかわせ　の　ししや　に　たちて　きたり　さ　の　しなじな　お　わたす

一　ながのし　二　もくろく　三　おびだい
四　しんるいつけ　〔（抹消）四〕五　ゆいのう、けとりしよ

ながのし　わ　のりいれ　に　つ、みて　こうはくの　みづびき　お　かけたり　たゞし　のりいれ　わふたつ　に　おりて　さらに　みつおり　に　した〔（抹消）る〕〔（加筆）り〕　もくろく　わ　のりいれ　一まい　かさねて　やはり　むつ　おり　に　し　〔（加筆）みづひき　おかく〕　その　しよしき　わ　さ　の　ごとし

目　録（おもて　にわ　寿　と　かきたり）

一家内喜多留　一荷
一勝男婦子　一連
一寿留女　一台
一子生婦　一台

小倉公平親類書 (111)

一志良賀　一台
一末広　一対
一帯　一筋

〔抹消〕〔一〕右之通幾久敷御受納被下度候以上

明治三十四年一月　小倉公平

菊池貞子殿

〔抹消〕〔うけ〕〔加筆〕〔おじ〕だい　わ　しへい　三〇　ゑん　お　む
つおり　の　のりいれ　に　つゝみ　うゑした　お
おり　みづひき　お　かく
しんるいづけ　わ　さ　の　とうり　みの　けいし
に　しるさる

親　類　書

京都川端通丸太町下ル下堤町八番戸寄留
東京牛込南榎町七十六番地在籍本所区
松倉町二丁目五十七番地寄留
東京府平民小倉政二長男
京都帝国大学助教授

一本人　小　倉　公　平
明治七年四月二十三日生
一父　同　政　二
弘化四年五月生
一母　同　レ　ン
嘉永六年九月生
一養祖母　同　ハ　ツ
文政十年六月生
一父方叔父　千葉県君津郡中村住平民
佐　久　間　良　平
嘉永六年十月生
〔抹消〕〔一養叔父〕
一養叔父　東京牛込区南榎町七十七番地住平民
陸軍技師
小　倉　倹　司
文久元年三月生
一母方叔父　横浜市伊勢町二丁目四十九番地住
長野県士族神奈川県外事掛
河　田　哲　哉
安政二年生
一母方叔母　神奈川県久良岐郡戸太町住
静岡県士族遠藤義郎妻
遠　藤　ヨ　シ
安政五年生
一弟　横浜税関々長官房事務官
小　倉　二　郎
明治九年十二月生
一同　同　三　郎
明治十二年十一月生
一同　同　敬　五
明治十八年六月生
一父ノ義弟　東京赤坂南町住

貞結納 (112)

長野県士族陸軍歩兵大佐
伊崎　良熙
嘉永五年生
一母ノ義妹　東京本所松倉町住
北海道庁平民首藤仲妻
首藤　タカ
慶応三年生
一遠縁ノ者　東京麹町飯田町住
東京府士族
奥平　浪太郎
慶応三年生
一同　東京本所松倉町住
茨城県平民海老原嘉市妻
海老原　ナミ
明治六年生

以上

ゆいのう、けとり わ 目録 と まゑがきし しながき わ さきの もくろく の とうり にて たゞ おび が はかま と かわり すゑがき の 御受取被下度 が 芽出度祝納申上 と なり〔抹消〕〔たる〕 むつおり なれども 一 まい がみ にて みづひき わ かゝらず

この ほう より わ はかまりよう と して 五〇 せん ぎんか 三〇 ゑん つかわす せげん

の ふりあい わ おびだい の はんぶん なる が ごとし と いゑども マガキ の とき に なこうど の せつ に したがい そうほう とう がく に したる れい も あり はんげん に すべき いわれ も こゝろゑされば やはり おな じ きんだか と したり この ぎんか わ こと さらに よういしたる にわ あらで おうねん ほ じよか も しへい にて しようか お みる こ と まれなる ころ ときおり つりせん に とり たる お しまい おきたれど〔抹消〕〔に〕 これ ぞ と ゆう つかいば も なくて すぎける に きよう わ また あやにく にちようび にて ぎんこう より かね お ひきだす こと あたわず され ば とて せんぽう より よこせる しへい お その まゝ つゝみ かゑて やる も なにと な く おかしく おぼゆれば ふと おもいつきて も ちいたる なり〔抹消〕〔しよしき や よう〕〔加筆〕〔この ほう より〕 つかわしたる しんるいつけ わ さ の ごとし もつとも はゝかた の きようだい わ あまり おうき ゆゑ そうだい に ひとり づゝ かきたれども のち に みな しるしたる もの お やる つもりなり ようし わ のりいれ に て よこしおり お みつ に おりたゝみ〔抹消〕〔たり〕お もて に 親類付 と しるしたり

貞親類書 (114)

父　菊池貞
母　菊池武夫
祖母　同ミネ
　　同多代
　　京都河原町通石薬師西入
姉　大築笆
妹　菊池濱
弟　同香一郎
妹　同操
同　同鶴
同　同たつ
同　同ふく
父方　麹町内幸町一丁目三番地
叔母　菊池ゑき
父方　牛込砂土原町一丁目二番地
叔母　豊川よし
　　京都椹木町通烏丸西入
同　大竹すみ
母（実）方　麹町富士見町
伯父　柏井登
母（継）方　横須賀中里百四十二番地
同　水野加以智
以上

アダチ　しにわ　いつこん　さしだし　その　しゃ

小作米延納 (115)

七

ふ　にわ　五〇　せん　しゆうぎ　と　して　つかわ
したり
しよしき　および　ようし　その　おりがた　に　お
いて　オウツキ　と　やりとりしたる　もの　と　ち
がい　あり　もつとも　いちじるしき　わ　もくろく
の　あてな　にて　ひとつ　わ　ちゝ　ひとつ　わ
とうにん　なり　〔抹消〕〔と〕〔加筆〕〔く〕れる　もらう　と　ゆう
〔抹消〕〔とき〕じだい　にわ　おや　に　あてる　ほう　て
きとう　なれども　けつこん　の　やくそく　お　す
る　と　ゆう　とき　わ　とうにん　に　あてる　こ
と　とうぜん　なり　すなわち　この　たび　の　ほ
う　わ　せいとう　なり〔加筆〕〔（5-8）〕
アダチ　しが　まだ　おる　うち　に　ヒラオカ、
マンジロウ　きたり〔加筆〕〔あるひと　の　ため〕テイ
の　ゑんだん　お　もうしこみたる　も　きゑん　な
りし
　ゆいのう　とりかわせ　すみたる　うゑ　わ　この
いゑ　に　でいりし　とうにん　どうし　の　こう
さい　ずいゝ　たる　べき　よし　コウヘイ　に　も
うしやる
　たい三　き　ちそ　および　しがいたくち　ちそ
とも　四三〔朱点〕・〇〇　おくりがた　もうしきたる　その
　ご　エイスケ　より　一　だ　ほかに　おつて　げ
んまい　と　ひきかゑ　の　やく　にて　もみ　一

だ　メイスケ　より　一　だ　つけいり　あり　この
よ　わ　メイスケ　より　一　ぴよう　も　きたる
べきか　おぼつかなく　ヱイスケ　が　はたして
もみ　お　ひきかゑる　と　して　どうにん　の　み
のう　だか　わ　三　だ　メイスケ　の　わ　五　だ
と　なるなり　すいがい　と　わ　な　のみ　にし
て　その　じつ　わ　ひんきゆう　なる　に　よる
いかに　しよぶんして　よき　や　おんど　わ　四五
ど　ぐらい　にて　おうらい　わ　ゆきどけし　い
かにも　はる　らし、〔（朱書）（タ、ヒ一）（101,107-8,123）〕
よめいり　したく　の　ひよう　わ　〔み（抹消）〕〔ミ（加筆）〕ネ　が
たてかゑ　おきたるに　その　あつがり　きん　ふ
そくする　よう　に　なりたる　に　つき　まづ　ミ
ツビシ、ゴウシ、ガイシヤ、ギンコウブ　ゑ　テイ
めいぎ　にて　あづけ　おきし　うち　より　一（朱点）、〇
〇〇（朱点）　とりいだして　ミネ　の　ほう　ゑ　やり
ぜんこう　の　ちそ　きん　も　おくらせたり　こさ
くにん　しよぶん　がた　わ　ひんきゆう　と　なり
たる　げんいん　お　しらべたる　うゑ　に　すべき
むね　もうし　やる

一三

ご、　一　じ　なこうど　アダチ、マツタロウ　し
きたる　しばらくして　ミネ　テイ　と　ともに
し　に　みちびかれて　イキザカ、ユシマ、キリドウ
シ、アサクサ、ウマヤバシ　お　へて　ホンジヨ、マ

ツクラチヨウ　二　ちようめ　五七　ばんち　なる
オグラ、マサジ　し　かた　に　つく　マサジ　どの
ふうふ　わ　おもてざしき　ゑんがわ　に　コウヘ
イ　ざしき　うち　に　たちて　むかゑり　コウヘイ
おとうと　ジロウ　わ　にわぐち　きど　そと　に
たち　アダチ　ふじん　わ　きど　うち　より　わ
が　いつこう　お　みちびけり　やがで　にかい　ざ
しき　にて　まづ　ふうふ　の　さかづき　ごと　あ
り　ついで　われら　ふうふ　あがりて　テイ　の
わき　に　ならび　まつま　ほどなく　オグラ　の
そぼ　マサジ　どの　ふうふ　コウヘイ　がわ　に
ざ　お　しめ　アダチ　ふじん　の　しやく　にて
おやこ　の　さかづき　あり　三　じ　ごろ　しゆび
よく　あいすみたり　コウヘイ　わ　そうにんかん
の　たいれいふく　マサジ　どの　わ　しようれいふ
く　ハツ　レン　との　わ　くろもんつき　お　きた
り　なこうど　と　われら　わ　みな　くろもんつき
お　きたり　こんれい　にわ　たいてい　つうじよ
う　れいふく　なる　に　たいれいふく　と　わ　い
かゞ　の　もの　に　や　それ　より　くるま　お
つらねて　ウエノ　の　ウメカワロウ（梅川楼）　に
いたる　オグラ　が　まねきたる　きやく　と　この
ほう　にて　よびたる　きやく　と　わ　べつ〳〵
に　おり　ゑんせき　にて　しん　ふうふ　お　し

ようめん　の　ちゆうおう　に　すゑ　その　みぎ
がわ　に　こちら　の　きやく　ひだり　に　むこう
の　ぶん　すわりたり　なこうど　ふうふ　わ　し
ん　ふうふ　お　いざない　いで、　しゆうきやく
に　しようかいしたり　つゞいて　しん　ふうふ　に
そうほう　の　しんるい　お　ひきあわする　つも
り　なりしが　ざしき　の　ぐあい　あしくて　やみ
たり　らいきやく　の　〔おう〕（抹消）〔あんな〕（加筆）い　りようり
や　の　だんぱん　さしづ　わ　オグラ、ケンジ（倹
司）し　か　つかさどり　この　ほう　より　わ　ヱ
キ　と　ハマ　お　おうせつがた　に　さしだせり
あんないじよう　わ　マサジ　どの　と　われ　と
れんみよう　に〔て〕（抹消）さしだ〕せし　も　おの〳〵　そ
の　よぶ　べき　ひとびと　〔ゑ〕（抹消）だけ　ゑ　さしだせ
り　この　ほう　の　あんないじよう　わ　さ　の
とうり

拝啓政二長男小倉公平武夫二女菊池濱義来十三日結婚致候ニ付右御披露申上度候間当日午後三時上野公園内梅川〔楼〕（加筆）へ御来駕ノ程希望致候以上

明治三十四年一月十日　　菊池武夫
　　小倉政二

宛名

尚々万一御差支モ御座候ハヽ乍御手数明後十二日迄ニ〔其旨〕（加筆）武夫〔方〕（加筆）へ御一報相煩度候

この　ほう　の　しようだいしたる　ひと　の　うち
さん　ふさん　わ　さ　の　とうり

らいかいしや　　ふさんしや
ソウマ　リクコ　　ヤスイ　テツコ
タカギ　コウ〃　　マナベ　ナミ〃
シミヅ　シン〃　　ホヅミ　ギン〃
タケタ　キン〃　　ウリウ　チヨ〃
オウツキ　モト〃　　ミヅノ　カイチ
ツチヤ　ヤス〃　　サタケ　チカ〃
タカギ　ノブ〃　　カタヤマ　カメ〃
ソウマ　ヨシ〃　　タカシマ　シン（信）
ハマ　　マスダ　サダ〃
カシワイ　ノボル　　シノダ　トシヒデ（利英）
タナカ　タカヒデ（榮秀）　〔ホン〕（抹消）〔モト〕（加筆）シユク　カズヨ
ナカ　ミチヨ（通世）　モツメ　チヨ〃
カモザワ　ツネノリ（恒順）
ミヅノ　ケイ（惠恵）
マツノ　チカツ（千勝）
ヨシカワ　ヨシカタ（義質）
タヨ
ミサオ
コウイチロウ
ヱキ
ミネ

タケオ

らいきやく　の　すう　わ　ざしき　の　つごう　に
より　そうほう　にて　五〇　にん　と　し　せき
じゆん　わ　むこう　の　ちゆうもん　に　より　し
ん〔ゐ〕(抹消)〔る〕(加筆)い　お　あと　に　したり　さとがゑり
わ　コウヘイ　ら　が　キヨウト　ゑ　しゆつたつ
まゑ　ひあい　なき　に　より　やめ　みぎ　の　ゑ
んかい　にて　すべて　の　こと　お　すます　わけ
なり　もつとも　そうほう　の　いとけなき　もの
ども　わ　たがいに　たつねたる　とき　に　ひき
あわする　つもり　にて　この　せき　ゑ　わ　つれ
きたらず　ウメカワロウ　より　きたくしたる　わ
よ　の　八　じ　ごろ　なりし　この　ひ　わ　やら
い　の　かぜ　おさまり　まことに　おだやかに
〔に〕(抹消)かつ　あたゞかく　いゝぶん　なき　ひより　な
りし　ウメカワロウ　にて　も　しやふ　いちどう
ゑ　〇二〇(朱点)　づゝ　と　ばんしよく　お　つかわし
たれ　ども　きたく　の　おり　なお　〇三〇(朱点)　づゝ
しゆうぎ　と　して　つかわせり
オグラ　テイ　わ　ごぜん　コウヘイ　わ　ご　ご
二　じ　すぎ　しようれいふく　にて　きたり　わが
かぞく　のこらず　その　た　トヨガワ、ヨシ　マ
ナベ、ナミ　サタケ、チカ　ミヅノ　の　は、　も　た
いめんせり　あす　キヨウト　ゑ　も〔な〕(抹消)〔た〕(加筆)せ　や

一五

る　べき　にもつ　やぐ　づゝみ　とも　一三　こ
お　けんぶんさせたり　いつさくじつ　ウメカワロウ
に　おける　しゆつぴ　の　せいさん　お　とげ
六　じ　ごろ　かゑり　ゆけり　かじつ　わたせる
しんるいがき　わ　あまり　かんりやくなる　ゆゑ
その　ご　さ　の　とうり　したゞめ　やりたり

東京市牛込区砂土原町一ノ二寄留
岩手県盛岡市加賀野八六士族法学博士
従四位弁護士東京法学院長貴族院議員
実父　菊池　武夫
安政元甲寅ノ七ノ二八
水野加以智妹武夫後妻
継母　同　みね
安政五戊午ノ四ノ七
北海道渡嶋国茅部郡尾白内村
岩手県士族八木橋茂昭姉武夫継母
祖母　同　多代
天保八丁酉ノ八ノ二五
京都市上京区石薬師通河原町西入寄留
東京市小石川新諏訪町一六東京府士族工学士
位京都帝国大学助教授大築千里妻武夫長女
姉　大築　笆
明治一五壬午ノ一〇ノ二九
武夫二女（実母亡楮智）

本人　菊池　貞
同　一七甲申ノ三ノ二六
武夫三女
妹　菊池　濱
同　一九丙戌ノ二ノ二六
武夫長男
弟　同　香一郎
同　二二巳丑ノ四ノ七
武夫四女
妹　同　操
同　二三庚寅ノ七ノ一〇
武夫五女
同　同　鶴
同　二八乙未ノ一ノ一
武夫六女（母みね）
異母妹　同　たつ
同　三二巳亥ノ五ノ二二
武夫七女（母みね）
異母妹　菊池　ふく
明治三三庚子ノ七ノ二四
滋賀県大津市神出三寄留静岡県駿東郡沼津町
城内四〇五士族
位大津地方裁判所判事榊原周次郎妻武夫養
女（豊川ヨシ夫亡痴癡雄長女）

義姉　榊原　はつ
同　六癸酉ノ一一ノ二六
東京市麹町区内幸町一ノ三別居武夫妹
父方叔母　菊池　ゑき
安政二乙卯ノ九ノ一
同　寄留長崎県平戸町士族
工学士
正七位鉄道局技師（抹消）（工学士）松野千勝妻武夫姪
（ゑき女）
従姉　松野　薫
明治一二巳卯ノ一一ノ二八
（抹消）（武夫）（加筆）（東京）市麹町区内幸町一ノ三別居武夫
甥（ゑき男）
従兄　菊池　啓麿
同　一五壬午ノ一一ノ九
東京市牛込区砂土原町一ノ二寄留岩手県士族
豊川孝一母武夫異母妹
父方叔母　豊川　よし
文久元辛酉ノ七ノ二一
京都市上京区椹木町通烏丸西入養安町寄留東
京府士族
従五位京都地方裁判所検事正大竹長寿妻武夫
異母妹（母多代）
同　大竹　澄

元治元甲子ノ一〇ノ一一
東京市麹町区富士見町六ノ三東京府士族実母
亡猪智義兄
母方伯父　柏井　登
静岡県浜名郡中ノ町村大明神平民
守屋定馬妻実母亡楮智姉
母方伯母　守屋　のふ
東京市牛込区新小川町二ノ八士族実母楮智姉
同　真鍋　なみ
神奈川県横須賀中里一四二寄留東京府士族
従六位海軍薬剤監〔加筆〕〔継母〕みね兄
同　伯父　水野　加以智
東京市麹町区元園町一ノ八寄留山口県士族
故陸軍二等監督佐竹義方遺妻継母みね姉
同　伯母　佐竹　愛（チカ）
台湾寄留埼玉県平民鉄道技手継母みね弟
同　叔父　黒澤　寛
東京市麻布区仲ノ町六士族画士継母みね弟
同　高嶋　信
広島県呉和庄町二六一八寄留東京府士族
海軍機関士継母みね弟
同　水野　敏
長崎県佐世保寄留島根県士族
従六位海軍々医中監村上典表妻継母みね妹

公平，貞京都安着 (123)

同　叔母　村上　政
神奈川県横須賀中里一四二寄留東京府士族
位海軍大主計継母みね弟
同　叔父　水野　惠
東京市赤坂区一ツ木町八四寄留島根県士族
従五位田中榮秀妻継母みね義姉
母方伯母　田中　やす
〔抹消〕〔東京〕〔加筆〕〔岩手〕県盛岡市加賀野八六士族
末家　菊池　武平

一六

オグラコウヘイ　ふうふ　わ　ご　ご　一　じ　四
〇　ぷん　にて　オグラ　の　はゝ　ぢよぢゆう　ど
うどうし　ヨコハマ　ゑ　しゆつぱつす　もつとも
はゝ　わ　ヨコハマ　の　しんるい　ゑ　ひきあわせ
の　ため　どうち　まて　ゆくなり　ふうふ　わ
ホドガヤ　にて　シンバシ　六　じ　はつ　の　やこ
う　れつしや　に　のりこみ　みようちよう　九　じ
すぎ　キヨウト　ちやく　の　つもり

一七

あめ　まじり　の　ゆき　ふる　一〇　じ　すぎ
コウヘイ　ら　あんちやく　の　でんぽう　たつす
タツ　フク　わ　いんふるゑんざ　より　ようやく
かいふくせる　に　ミサヲ　わ　れい　の　づゝう
ツル　わ　やはり　はやりかぜ　の　ふう　にて　ほ
つねつし　のど　に　こまかき　できもの　でたり

一九

メイスケ　より　一　だ　つけいりたる　よし　ダ

イキチ　しよゆうち　かいゝれ　の　さいそく　あり
〔(朱書)(101,107-8,115)〕
ムカ〔エ〕(抹消)〔イ〕(朱書)ナカノ　あざ　ハタガエシ　の　はた
お　た　に　なおしたる　ぶん　に　つき　さくね
ん　五　がつ　ぢゆう　ちもく　へんかん　とゞげ
お　さしいたし　おきたる　に　ようやく　この　ご
ろ　さ　の　とうり　もうし　きたれる　よし
〔(朱書)(80-1,94-5)(46)〕

発第三二号

岩手〔県〕(抹消)郡本宮村向中野

菊　池　武　夫

明治三十三年五月十一日届地目変換別紙之通地価ヲ修正ス

明治三十三年十二月五日

仙台税務管理局長　清宮　質

岩手郡本宮村向中野字畑返一八地割三三ノ二畑二反八畝二一歩地価二八・九六(朱点)地租元、七二増、二三
田三反一畝〇四歩地価九九・三四(朱点)地租二・四八(朱点)
また　テイ　の　みぶん　しようめい　に　ようする
こせき　しようほん　お　おくり　きたる　さ　の
ごとし

岩手県盛岡市加賀野八拾六番戸　士族　前戸主亡父菊池長閑

明治十四年六月八日相続　亡父長閑長男

戸　菊　池　武　夫

婚姻届 (124)

〔(抹消)香一郎〕

主　嘉永七年七月二十四日生

明治十四年十月八日茨城
県下総国結城郡結城町士
族柏井登姉〔(朱書)明治二十八〕妻　〔(抹消)イ　チ〕
〔(朱書)年十月廿六日東京小石川文久元年七月十一日生竹早
町於テ死亡〕

次　　テ　イ

女　明治十七年三月二十六日生

右抄本ハ戸籍ノ原本ト相違ナキコトヲ認証ス

岩手県盛岡市戸籍吏清岡　等〔(朱書)(タ、ヒ一八)〕

ぼう　イチ　わ　ノボル　の　いもうと　なる　お
あね　と　し　猪智　お　イチ　貞　お　テイ　と
する　など　こせき　の　ほう　まちがい　なれども
ていせい・せん　と　すれば　しちむつかしき　こ
と　お　いわるゝ　ゆゑ　すて　おく　べし　しかる
に　かじつ　ウシゴミ　クヤクシヨ　まゑ　の　だい
しよにん　に　たのみて　つくり　もらいたる　さ
の　こんいん　とゞけ　わ　みぎ　しようほん　と
ちごう　ゆゑ　もどし　くるゝ　よう　オグラ　マサ
ジ　どの　ゑ　いゝやれり

婚姻届

東京市牛込区南榎町七拾六番地

戸主無職業小倉政二長男平民京都帝国大学助教授

婚姻届 (128)

夫　小倉　公平
明治七年四月弐拾参日生
右父　小倉　政二
小倉政二ト同籍
右母　小倉〔レ(抹消)ン〕〔れ(加筆)ん〕
岩手県盛岡市加賀野八十六番戸戸主
貴族院議員菊池武夫弐女士族無業
妻　菊池〔貞(抹消)〕〔テ(加筆)イ〕
明治拾七年参月弐拾六日生
右父　菊池　武夫
右母亡菊　池〔猪(抹消)智〕〔イ(加筆)チ〕
右婚姻候ニ付同意者連署ヲ以テ此段及御届候也
明治参拾四年壱月参拾壱日
届出人　小倉　公平○
届出人　菊池〔貞(抹消)〕〔テイ(加筆)〕○
東京市小石川区竹早町　寄留
県　番地
〔職業(抹消)〕〔官吏(加筆)〕
証人　安達松太郎○
〔何某(抹消)〕
生年月日
東京市牛込区南榎町七拾番地〔寄留(抹消)〕
〔県(抹消)〕〔番地(抹消)〕
〔職業(抹消)〕〔官吏(加筆)〕
証人　小倉　俊司○
〔何某(抹消)〕
生年月日
右婚姻ニ同意ヲ表ス
戸主父　小倉　政二○
同意者
母　小倉〔レン(抹消)〕〔れん(加筆)〕○
同意者
戸主父　菊池　武夫○
同意者
継母　菊池〔みね(抹消)〕〔ミネ(加筆)〕○
同意者
東京市牛込区戸籍吏小嶋官吾殿

安達松太郎贈物　笹肺線カタル (129)

二〇

とゞけいでにん　わ　もちろん　しようにん　どういしや　とも　みな　かみ　の　とぢめ　けいゝんする　よし　もつとも　さい　が　じついん　なければ　みとめいん　にて　よろしき　よし　これ　に　さいの　こせき　しようほん　お　そゆれば　それ　にて　こと　すむ　おもむき　だいしよりよう　わ　はんし　一　まい　に　つき　〇・〇四（朱点）　二　つう　にて　〇・二四（朱点）　はらいたり

オウツキ　チリ　より　マガキ　が　はいせんかたる　に　かゝれる　に　〔より(加筆)〕　キクヱ　に　ちゝ　お　のませられず　こども　の　せわ　と　びように

んの せわ わ いま の めしつかい にて
とゞき かぬる ゆゑ シンスワチヨウ の は、
と そうだん の うゑ しかる〔抹消〕〔へ〕べき ひと
お おくり くるゝ よう もうし きたる こまり
たる こと しようじたる もの かな オウツキ
は、 と そうだん の すゑ ひと わ オウツキ
より いだす が びようにん わ さつそく か
のち なり またわ とうち なり の しんよう
ある びよういん に いれ うち に おかぬ
ほう しかる べき むね おの〳〵 もうし やれ
り この やまい わ わけて しよき に じゆう
ぶん りようちすれば ほんぶく の のぞみ ある
よし かねて きゝおよぶ ゆゑ チリ も その
こと に どういせん こと お のぞむ タツ
わ ぶりかゑし の きみ にて ほつねつす

二五

なこうど アダチ ふうふ ゑ つかわす べき
おくりもの に つき オグラ の りようしん と
そうだんする こと に コウヘイ ゑ でんご
お たのみ おきたる に あまり ほど たつ ゆ
ゑ この ほう より おくりもの の ねだん と
う といあわせ やりたる に コウヘイ より な
んの〔抹消〕〔ほ〕〔加筆〕〔は〕なし も なかりし ゆゑ 一一
ゑん ほど の しな お すでに つかわしたる
よし へんじ きたる その ついで に キヨウト

みね，濱インフルエンザ　貞，公平婚姻届受理　笆容体　木更津

二九

の テイ より の らいじよう お おくりこせ
り
いつさく 二七 にち ごゞ 一 じ レイガンジ
マ はつ の こじようきせん にて 四 じ ごろ
ぶじ キサラヅ の タマヤ さくじつ ごゞ 三
じ じんりき にて キサラヅ お たち くるま
おそき ため 七 じ の きしや の ま に
あわず 八 じ ごろ チバ の ウメマツヤ の
べつそう に とまり けさ 一一 じ 一九 ふん
はつ の れつしや にて 一二 じ はん ホン
ジヨ に つき きたくして みれば ミネ も ハ
マ も はやりかぜ に おかされて とこ に ふ
し じぶん も この よ より ねつ いで よく
じつ カナスギ の だいしん に のど の てあ
て お して もらい げねつざい 一 ぷく もち
いたり
オウツキ、チリ と マガキ より くわしき てが
み きたり みな いま の ところ にういん わ
もちろん てんち ほよう の ひつよう も な
き むね かゝりい の せつ お そゑて もうし
こす ぜんかい と にわ あらねども まづ わ
や、 あんどす

三一

オグラ、ケンジ より コウヘイ ら の こんい
んとゞけしよ まわし きたれる ゆゑ テイ や

大吉地所代金　みね，笹，濱容体 (129)

一　日

二　月

イチ　の　なまゑ　お　こせき　どうり　に　ていせ
いして　こんにち　の　ひづけ　にて　さしだしたる
に　モリオカ　にて　わ　いかゞ　か　しらねども
ウシゴメク　の　こせきり　わ　よし　と　みとめ
たる　よし　ちよつとしたる　こと　お　とがめだて
する　わるぐせ　ある　くやくしよ　が　じゆりしたる
が　ゆゑ　その　むね　さつそく　マツクラ、チヨウ
や　オウツキ　ゑ　やる　てがみ　の　うち　に　か
きこめて　キヨウト　の　オグラ　に　も　しらせたり

ミネ　も　ハマ　も　ねつ　わ　とれたれども　ね
ん　の　ため　まだ　とこ　に　あり　われ　の　ね
つ　も　さいほつせねども　のど　なお　なおらず
ときどき　せき　いづれば　きよう　も　カナスギ
の　もんじん　お　よびよせて　くすり　お　ぬらせ
たり　ねぎぱな　の　ごとき　きいろ　の　ゑき　が
のど　より　いづ　きんしようして　ち　でも　で
そう（抹消）　なる　ありさま　と　いしや　が　いゝ
たり　マガキ　より　また　てがみ　きたり　シヂヨ
ウ　や　シンキヨウゴク　あたり　まで　かち　にて
おうへんし　また　かるた　あそび　に　よ　お
ふかして　も　さらに　さわり　なければ　あんじ
くれまじき　よう　いゝこす

イワテゴウリ　クリヤガワムラ　カミクリヤガワ　ほ
か　三　が　しよ　の　いわゆる　しぞく　きようゆ
う　の　くわばたけ　の　きようゆう　めいぎ　かく
てい　の　てつゞき　お　する　に　つき　いにんじ
よう　お　おくる　べき　むね　もうし　きたる　じ
ぶん　わ　つかわさぬ　つもり（朱書）〔（タ、ヒ一ノ三一）〕
さる　三一　ねん　九　がつ　一七　にち　トウバタ
ケ　カゾウ　ゑ　かしたる　六〇　ゑん　の（抹消）〔う〕　う
ち　三〇　ゑん　へんきん　あり　よびきん　ゑ　く
りこみたり（抹消・朱書）〔(16)〕（朱書）〔（〃）(16)〕
シモイ、オカ　ダイキチ　しよゆうち　だいきん　お
くり　がた　さいそくし　きたる　に　つき　そくじ
つ　二二〇　ゑん　おくり　やる　たゞし　だいか
わ　二三〇　ゑん　なれども　一〇　ゑん　わ　かね
て　かしおける　きん　だか　と　さしひく　やくそ
く　なり（朱書）〔（〃）(108)〕
アサヌマ　ダイキチ　ちようなん　マゴタロウ　よ
り　かいうけ　たる　でんち　三　ふで　の　とうき
すみ　たる　に　つき　さ　の　しようしよ　おく
りきたる（朱書）〔（タ、ヒ七）〕

買受田地登記済 (130)

八

土　地　永　代　売　渡　証

紫波郡飯岡村大字下飯岡拾六地割
参拾弐番字南谷地

（朱書）
受　明治三四年二月六日
付　第九〇〇一号

〔朱書〕土地第百七拾号順位弐番〕
田反別壱反七畝弐拾五歩
同　上拾七地割
弐拾六番字田中
〔朱書〕同　第百七拾壱号同〕
田反別拾七歩
同
参拾壱番字同
〔朱書〕同　第百七拾弐号同〕
田反別五畝壱歩
此売買金弐百参拾円也
右土地今般前頁代金正ニ請取永代売渡申候処確実也
該土地ニ付一切苦情等無之若シ他ヨリ苦情等出来候
トキハ拙者ニテ引受ケ取片付ケ聊カ貴殿へ御迷惑相
掛ケ申間敷候為日土地永代売渡証仍而如件
明治参拾四年弐月五日
紫波郡飯岡村大字下飯岡百六番戸
売人　浅沼孫太郎　○黒
盛岡市加賀野八十六番戸
東京市牛込区砂土原町壱丁目弐番地寄留
菊池武夫殿
〔朱書〕明治参拾四年弐月六日
登記済
盛岡区裁判所印

二三

メイスケ　より　こさくまい　みのう　だか　の
うち　かたま　つけいり　ヱイスケ　わ　三　がつ
ぢゆう　に　一　だ　つけいり　の　やくそく　にて
たねもみ　一　だ　あづけ　たる　よし　みぎ　ひ
きかゑ　いよ〳〵　すむ　とき　わ　みのう　だか
三だ〔五〕〔抹消〕〔四〕〔加筆〕と六しよう三ごう　メイスケ
三〃〇　〇　〇　ヱイスケ
みぎの　ぶん　わ　三　が　ねん　の　ねんぷ　に
いたし　くるゝ　よう　くわがしら　ダイキチ　も
ろとも　こんがん　に　つき　きゝとゞけ　その　か
わり　とう　はる　しつけまい　わ　かさぬ　こと
に　もうしわたし　たる　よし　みぎ　ら　ひきまい
ねんぷまい　お　さしひき　〔朱線〕二三三　ねんど　の
〔朱線〕こさくまい　わ
〔朱線〕一九六だ三ど一しよう　ほかに　もみ　一　だ
かどまゝさ　二七〔朱点〕〇〇〇　まい　の　てつけきん
〔朱点〕一五〇　ヨシダ、サスケ　ゑ　わたし　三がつ　ち
ゆう　かね　と　ひきかゑ　に　まさ　お　うけとる
やくそく　の　よし〔朱書〕〔タ、ヒ二二〕〕

日　月
三
五　さくちよう　シンバシ　一　ばん　にて　四　じ
すぎ　ナゴヤ　シナチユウ、ホテル　に　つく　こん

六

ごゞ　四　じ　すぎ　ようじ　ようやく　すみ　た
る　に　キヨウト　ゑ　ゆく　に　わ　おそすぐる
ゆゑ　フチタ、タカサブロウ　お　たつね　やはん
ちかく　まで　かたり　たり
あさ　九　じ　ごろ　ナゴヤ　お　たち　三　じ
ごろ　キヨウト、ホテル　に　つき　すぐに　オグ
ラ、コウヘイ　かた　ゑ　でむき　たる　に　トウノ
ダン　マツノキチヨウ　わ　ホテル　の　しやふ　さ
ゑ　しらぬ　ほど　の　ばすゑ　にて　きゝはい　な
がら　ようやく　たつねあたり　たる　に　さいわい
に　コウヘイ　わ　たく　に　おり　たれ　ども　テ
イ　わ　マガキ　と　つれだちて　かいもの　に　で
かけ　たり　とて　るす　なりし　が　もはや　オウ
ツキ　まで　かゑりおる　ならん　とて　げぢよ　わ
かけだし　たり　あと　に　わ　あるじ　ひとり
にて　ちやか　の　もてなし　も　うさん　の　あり
さま　まつ　いゑ　の　もよう　お　みん　とて　か
ない　くまなく　あらため　たる　ついで　に　ぼん
に　のせ　たる　みかん　お　はつけんし　たれば
ていしゆ　とくい　にて　その　まゝ　だし　て
ふるまい　たり　いゑ　わ　ひがし　より　いり　て
にし　に　ぬける　たてまゑ　にて　なんぼく　わ
ふさがり　なる　ゆゑ　ちと　いんき　に　も　あ
り　なつ　わ　あつそう　なり　されど　ま　かず

七

も　おしいれ　も　おうく　ふうふ　ぐらし　に　わ
よけい　すぐる　ぐらい　なり　オグラ　が　せわ
に　なる　ようす　なれ　ば　トウキヨウ　より
ぢさん　せる　みやげ　お　もちて　ムラオカ、ハン
イチ　お　たづ(抹消)(加筆)〔ぬ〕〔ね〕　げんかん　にて　さいくん
に　あいさつし　て　オウツキ　に　ゆく　チリ
ざいたく　にて　あんない　せられ　たる　ざしき
に　わ　まだ　ひな　お　かざり　あり　ていしゆ
わ　あたま　お　かき　ながら　ついに　あの　どう
ぐ　お　かわせられ　たり　とて　わらゑり　やがで
マガキ　と　テイ　と　わ　かゑり　たる　に　マ
ガキ　かお　の　にく　も　いろ　も　むかし　に
かわらず　はいせんかたる　の　わづらい　など　あ
りそう　に　みゑねば　おういに　あんしんし　たり
オウツキ　が　せわ　お　うける　ナカザワ、イワ
タ　お　たづね　ムラオカ　に　おける　が　ごとく
げんかん　ぎり　にて　ホテル　に　かゑる　六
じ　はん　に　わ　オウツキ　および　オグラ　の
ふた　ふうふ　やく　の　ごとく　きたり　たれ　ば
とも　に　ゆうしよく　お　なし　一〇　じ　すぐ
る　まで　わが　へや　の　すとうぶ　の　ほとり
にて　かたりあゑり
どんてん　にて　うすざむく　ゆき　も　ふり　か
ねぬ　いきおい　なれ　ば　しゆつたゝん　か　と

瓢亭 (134)

おもい たる に マガキ と テイ か たづねき
たり けれ ば われ も まだ しらねば とて
ナンゼンジ けいだい の 〔ひ〕(抹消)ヒヨウテイ ゑ ゆ
かん と たちいでぬ マガキ が あんないしや
と なりて サンヂヨウドウリ お ひがし に ゆ
き たる ゆゑ ナンゼンジ に わ あらで チオ
ンイン の きたもん に いで たれ ば さらに
ひだり に たどり ようやく ヤマガタ の べ
つそう の となり に いたれ ども りようりや
らしき いゑ も なし あらかべづくり の わ
らや の どま に すゞみだい ありて きやくま
ち らしき しやふ が よこ に ふす その か
たわら に もめん ぎもの き たる ちやくみお
んな らしき もの こしかけ たり のきした に
わ わらじ など つるし あり ヒヨウテイ の
いりくち わ と たづね たれ ば おんな わ
こ、 なり と ゆう よく みれ ば むかつて
ひだり に ちいさき もの あり これ おい
れ ば ふるびたる はなれざしき 二 むね ばか
り ある らし、 われら わ いりくち ちかき
かた ゑ あんないせられ たり きうじおんな が
あつらい わ と とう たれ ど ちゆうもん
の しかた お しらね ば みつくろいて もちき
たる べき むね もうしつけ たる に すいもの

日本人　永観堂 (135)

さしみ やきざかな いで たり はんぢゆく お
もちきたる べき や と きうじ が とう ゆ
ゑ めつらし からぬ と わ おもい たれ ども
ゆう が まゝに もちいでしめ たれ ば うで
たまご お ふたつ に わぎりし たる もの お
こざら に のせ て きたれり きみ わ やわ
らかそう なれ ば たべ たる に よきほどに
あぢつけ たり あと にて きけ ば しろみ が
かたく て きみ のみ やわらか に うでる
わ むつかしき こと にて そこ が ヒヨウテイ
どくとく の ちようりほう なり と ゆう た
くみ に わ ある べき も あちおう て わ
つまらぬ もの なり ちやのみぢやわん に わ
れい の サンヨウ の く 一帯青松路不迷 が
そめつけられ たり その せいしよう の いちぶ
わ ヤマガタ の てい ない に かこいこまれ
たる が うゑ に ぶきようなる せいようかん
が この ふうりうなる めいしよ に そびゆる
わ ごんご どうたんなる しまつ なり いゑ
と まわり の けいしよく と わ なんとして
も つりあわず どちら より みる も き に
たけ お つぎ たる ありさま なり ナンゼンジ
の けいだい に いり れんがづくりの そすい
の みぞ お のぞき ひだり の うらもん お

八

いで たんぼみち お つたい ヱイカンドウ（永観堂）に のぼり ミカヱリ、カンノン お はいかんし て ぼうず が まことしからぬ ゑんぎ お まじめに よむ お きんちよう せり この てら に たちより たる わ かつて チリ が ヱイカンドウ お みする とて まちがいて となりの ニヤクオウジ に マガキ お あんないしたり と の はなし より おもいつき たる なり ダイゴクデン の まゑ お とうり ヱヒスガワバシ お わたりて ホテル に もどり りようにん お おくりて ごしよ の かど まで どうどうし われ わ カラスマル の オウタケ お たづね たり ばんしよく ご オウツキ オグラ のりよう ふうふ ふたゝび きたりて 一〇 じすぎ かゑり ゆけり

あさ の ちよつこう にて 〔抹消〕〔ナカザワ〕〔加筆〕〔しゆつぱつ〕せる に おもいがけなく ナカザワ もどうしやす われら の むこうがわ に ロシヤじん と おほしき おとこ と シナじん と にもつ お へたで、ならび たる に シナじん のみなり いたく やつれ たる と ときおり しよくもつ お かいて ロシヤじん に あとうると に よつて ふたり おば しゆじゆう と みとめたり たゞ たがいに 〔抹消〕〔あ〕はなしあわぬ お

おかしく おもいゝたり ロシヤじん が みかんお のみ たべ おうがたわ と の そと に ちよりうし しようべん に かよう〔抹消〕〔こ〕こと おびだゝし これ も すこぶる め に たてり ナゴヤより びふくしたる シナじん いりきたりて ロシヤじん の となり に ざ お しめたり このシナじん やゝ にほんご に つうじ なにかとはなし お なし たる に そふく の シナじん アシガラ お こゆる まで しゞゆう ちんもくし い たり オウイソ あたり にて かれ わはじめて こゞゑ に はなし けるわ かの ロシヤじん と ナガサキ より とうしやし たるに にほんご わ もちろん いぎりすご も ほとんと つう ぜず しよくもつ つき たる ようす ゆゑ べんとう お かいて あたゑ たれ どもたべ かね たり シツオカ にて さんどういつちお あたゑ たる まで わ みかん のみ にいのち お つなげり ヨコハマ に おもむくらしき が ゆくさき も おぼつかなし きみらわ どいつご か ふらんすご お はなさば かれ〔抹消〕〔の〕に おしゑ よ と ゆう この シナじんの にほんご の うまき こと われら に もまさる ほど なり ナカザワ わ どいつご につうする のみならず ちかごろ さいど の よう

木更津　大森鎌田 (137)

一〇

こう　お　おゑて　かゑり　たる　ばかり　なれ　ば
さつそく　ロシヤじん　に　はなしかけ　た〔抹消〕〔れ〕る
に　かれ　わ　おどろき　かつ　よろこび　ロシヤ
ぐんかん　のりくみ　の　ぐんい　にて　トウキヨ
ウ、テイコク、ダイガク　の　イカダイガク　お　さ
んかん　せん　が　ため　まつ　ヨコハマ　の　ロシ
ヤ　の　ようたし　ようにん　お　たより　それ　よ
り　ロシヤ、コウシカン　お　たよりて　もくてき
お　たつ　せん　と　する　つもり　の　よし　かた
りきけ　たり　びふく　の　シナじん　か　ヨコハマ
に　ゆく　こと　お　たしかめ　それ　に　あんな
い　お　いらいし　など　せる　おり　シナじん　ど
うし　はなし　たる　に　びふく　わ　カントン　そ
ふく　わ　テンシン　の　なまり　にて　よく　つう
せず　ニホンゴ　お　もつて　はなしあゑり　びふ
く　わ　そふく　の　ご　の　うまき　お　しきりに
しようさんし　われら　も　ふしぎ　に　おもい
その　いわれ　お　たづね　たる　に　ニホンゴ　が
じよう〔抹消〕〔す〕〔加筆〕〔づ〕なる　は〔抹消〕〔つ〕〔加筆〕〔す〕　かれ　わ　テン
シン　の　ミツイ、ブツサンガイシヤ、シテン　に
つとむる　ニホンじん　なり　こゝに　おいて　いち
どう　おゝわらい　お　もようせり
あさ　九　じ　すぎ　はゝ　ぎみ　ハマ、ミサオ、
ツル、ヨシダ、コマガミネ　お　ともない　イチガヤ

大吉小作証書　上野公園 (138)

二六

より　シンジユク　お　へ　て　シナガワ　に　い
で　さらに　オウモリ　に　ゆき　ぶら〳〵　あゆみ
て　カマダ　の　ばいゑん　に　いたる　はな　わ
みごろ　なり　ひより　わ　うらゝか　にて　ひとで
おうかりし　そこ　にて　ひるめし　お　たべ　た
る　に　きやく　おうき　が　ため　ちようば　と
だいどころ　が　こんざつし　ちゆうもんひん　の
ちようり　おそき　のみならず　われら　が　あつら
い　たる　うち　一　しな　わ　ついに　できず　し
まい　たる　ほど　なりし　かゑり　わ　できたて
の　でんきてつどう　に　のりて　オウモリ　に　つ
き　あさ　の　みち　お　ぎやくもどりし　五　じ
ごろ　きたくし　たり
しよとくぜい　こうはんき　ぶん　一一〇・〇〇〔朱点〕
および　ちそきん　せいきうし　きたる
〔朱書〕〔タ、ヒ一〇〕

二四

ごゞ　一　じ　ヱツゼンボリ　より　キサラヅ　が
よい　の　こじようきせん　に　のる　あめ　ふり
きたかぜ　ふき　おれ　ば　いつも　の　ごとく　ゆ
かい　ならず　四　じ　ごろ　タマヤ　に　つく
さくじつ　ひる　の　ふね　の　ま　に　あわず
とうりうして　けさ　八　じ　の　ふね　にて　一一
じ　すぎ　ヱツゼンボリ　に　つき〔抹消〕〔すぐ〕　きた〕
じむしよ　に　よりて　すぐ　きたくし　たり

日

三

四　月

四

どんてん　なりし　が　うんどう　の　ため　ウヱノ　へん　まで　さんぽ　せん　とて　ハマ　と　コウイチロウ　のみ　お　ともない　ウヱノ　ゑ　いたる　に　てんき　おもわし　からぬ　ゆゑ　か　ひとで　おうからね　ども　はな　わ　みごろ　にて　ひさしぶりに　こゝ　の　はな　お　み　たり　かゑり

わ　ばしやてつどう　にて　スチカイ　に　いで　スルガダイ　お　へ　て　イ、ダマチ　の　コウブテツドウ　ていしやば　まで　あゆみ　きしや　にて　イチガヤ　に　きたり　一　じ　ごろ　きたくし　たり　ミサオ　わ　あゆみ　かぬる　ならん　とて　つれ　ざりし　に　すてられ　たり　と　おもい　おこりて　くら　の　なか　に　とぢこもり　きもの　の　はし　お　かみさき　たる　よし

かどまくさ　一二七・〇〇〇（朱点）　まい　の　だい　三　一・〇五（朱点）　と　ふき　ちん　一九・〇〇（朱点）　せいきうし　きたる（朱書）〔（タ、ヒ三）〕

さる　二　がつ　五　か　に　かい、れ　たる　でんち　三　ふで　お　かきくわい　たる　アサヌマ、ダイキチ　の　こさくしようしよ　お　おくり　きう　しようもん　と　とりかゑ　の　ぎ　もうし　きたれ

小金井　山役銭（139）

七

ども　一　ふで　ばんごう　そういする　に　つき　ていせい　の　ため　もどし　たり（朱書）〔（〃）〕

すみがま　やくせん　一三・〇〇（朱点）　しうにゆう　ありたる　よし　きこく　お　うなかしこし　たる　に　つき　われ　も　ゆかん　と　おもう　も　みやげ　の　ようい　の　うるさ（抹消）〔き〕（加筆）〔、〕　と　たいざい　ちゆう　きやく　やら　しゆじん　やら　さたか　ならず　わか　や　に　おり　ながら　さんど　の　しよく　わ　れい　お　のべて　く（抹消）〔う〕（加筆）〔い〕　かゑり　に　わ　ちやだい　の　ごとき　こゝろつけ　お　やる　など　かんけい　の　あいまいなる　と　が　じやま　に　なりて　やむ　ゆゑ　てぶら　にて　おうらいし　まかないひ　わ　かきだす　こと　と　する　よう　くふうす　べき　むね　もうし　やる（朱書）〔（タ、ヒ三）〕

あさ　（抹消）〔八〕（加筆）〔十八〕　じ　四八　ふん　イチガヤ　はつ　の　きしや　にて　は、　ぎみ　ミネ、（加筆）〔ケイマロ〕　ハマ、コウイチロウ、ミサオ、ツル、タツ、ヨシダ、コマガミネ、タケ、（加筆）〔スミ〕　と　（加筆）〔トヨカワ、フサ、カシワイ、オシロウ〕　どうはん　シンジユク　お　へ　て　コクブンジ　に　けしやす　（抹消）〔け〕（加筆）〔きよ〕う　よう　りんじ　ぎしや　お　はつし　おうふく　ぎつぷ　お　はつばいする　よし　おうふく　ぎつぷ　一　まい　〇・三四（朱点）　ばかり　か　おとな

鶴尋常一年　操高等一年　小金井 (140)

一二　にん　こども　三　にん　にて　五・〇五（朱点）　は
らい　たり　もつとも　こども　どうどう　の　おり
わ　いつ　も　三　とう　しや　に　のる　コクブ
ンジ　に　つき　たる　わ　八　じ　はん　ごろ　な
りし　が　そらあい　すこぶる　あやしく　きりあめ
の　ときおり　かお　に　あたる　ぐらい　なる
に　も　かまわず　おとこ　ども　わ　べんとうかご
お　さげ　おんな　ども　わ　すそ　お　からげ
のみち　お　たどりゆき　て　じようすい　の　みぞ
ばた　に　いづ　こ、　まで　一五　ちよう　と
ゆう　それ　より　ながれ　に　そい　て　さくら
の　なみき　の　した　お　あゆみ　すみれ　その
た　の　はな　お　つみ　また　あおいで　わ　あち
ら　こちら　に　さきいで　たる　はな　お　ながめ
ところ〳〵　の　はし　お　こなた　あなた　に
わたり　ついに　コガネイバシ　の　みなみ　ぎわ
なる　ちや、　の　しようぎ　に　こし　うちかけ
たる　わ　一〇　じ　まゑ　なりし　が　あさめし
はやかりし　ため　や、　くうふく　お　おぼゆる
もの　おうかり　けれ　ば　はなみずし　お　とり
て　たべ　ついに　べんとう　お　も　ひらき　たり
こ、　に　おる　うち　に　はなみ　きやく　しも
より　も　かみ　より　も　だいぶん　みゑ　そめ
たり　それ　より　また　ながれ　お　ぬい　て

年賦貸米　延納米 (140)

八

くだり　タツ　まで　も　あるき　一二　じ　はん
ごろ　サカイ　の　ていしやば　に　つき　たる　に
一　じ　一〇　ぶん　に　きたる　べき　りんじぐ
るま　か　二〇　ぶん　くらい　おくる、　よし　な
れ　ば　ちや、　に　やすむ　うち　ほうかいぶし
と　やら　ゆう　れんちゆう　こと、げつきん、こぎ
う、など　かきならし　かつぽれ　や　〔にほん〕（抹消）
〔二ホン〕（加筆）　だんし　の　なに　と　やら　ゆう　あや
しき　おどり　お　おどり　たり　一　じ　はん　サ
カイ　お　いで　オウクボ　まで　きたれる　に　タ
ツ　が　おりる　とて　なきわめく　に　つき　ユキ
と　タケ　が　つれ　て　おり　のこり　わ　その
ま、　イチガヤ　に　かゑれる　わ　三　じ　〔はん〕（抹消）
〔ごろ〕（加筆）　なりし　タカシマ、シン　ゑ　も　はがき
お　いだし　たれ　ども　あさ　ゆうびんばこ　お
あらため　ざりし　ため　しらず　に　きあわさ　ざ
りし　とぞ
けさ　より　コウイチロウ、ミサオ、ツル　がつこ
う　ゑ　ゆく　ミ　わ　こうとう　一　ねん　ツ　わ
じんじよう　一　ねん　なり　ハマ　わ　やすみ
の　はじまり　も　おそかりし　が　きたる　一四
か　まで　きうか　なり　コウイチロウ　わ　はなか
ぜ　お　ひき　せき　も　すこし　いで　ゆう　五
じ　すぎ　づゝう　する　とて　ふし　たり

一六

さる　六　か　に　おくりたる　まさぶき　やね
ふきかゑ　ひよう　五一（朱点）〇〇　の　りようじゆ
〔（抹消）および〕　エイスケ　より　まちまい　〔（抹消）〕一　だ
（七　と　いり　お　まちまい　と　い、　七　と
四　しよう　いり　お　くらまい　と　ゆう　こさく
まい　わ　くらまい　お　つね　と　す）　つけいり
かねて　あつかりおきたる　もみ　一　だ　と　ひ
きかゑたる　〔（抹消）たる〕〔（加筆）よし〕　しらせこす　また　せん
だつて　かい、れたる　でんち　お　も　くわゑて
かきあらためたる　ダイキチ　の　こさくしようもん
〔（加筆・朱書）（三）〕　がつ　一一　にち　つけ）〕　および　ひきま
い　ねんぷかしまい　の　しようもん　お　おくる
（加筆・朱書）（20/5, p.148-9, 151）
（17/12/33, p.101）

ねんぷかしまい　の　ぶん

二だ三と七しよう　サトウ・キンタロウ
三〃三〃七　〃　サルタテ・メイスケ
〇〃三〃七　〃　サトウ・カンタ
タカハシ・ニエモン
アサヌマ・チヨウベイ
フチムラ・スケジロウ
フクシマ・エイスケ
〔（加筆）三〕
四〃〇　〇
ひきまい　の　ぶん
一〃〇　〇　サルタテ・マサノスケ

内幸町地上権仮登記 (14)

一〇〇

こさくまい　ふのうしや　の　とりあつかい　や
ひんこん　に　おちいる　こさくにん　きうぢよ　や
とう　あき　だいゑんじゆう　の　せつ　の　しゆ
くゑい　に　つき　めんだん　お　ようする　ゆゑ
き、よう　する　よう　さきごろ　い、こせし　に
つき　みやげ　の　やりとり　お　はいし　たいざい
ちゆう　の　ぞうよう　わ　めし　しる　まき　の
るい　まで　すべて　かきだし　このほう　より
しはらう　よう　に　すれ　ば　こ、ろやすく　いつ
で　も　ゆく　べけれ　ば　めんどう　にて　も
その　よう　に　はからい　くる、れ　ば　じぶん
のみ　ならず　は、　など　も　たび〳〵　ゆく　べ
き　むね　お　もうしやりたる　に　なるべく　この
い　お　たつせしむ　べき　よし　もうしきたる
〔（朱書）（タ、ヒ一五）〕
ウチサイワイチヨウ　の　じむしよ　しよざい　ち
に　つき　さる　一三　にち　ちゞようけん　の　か
りとうき　お　うけたる　に　ほうがく　お　かきち
かいたる　に　より　さらに　へんこう　お　もうし
たて　けつてい　お　ゑたり　さ　の　ごとし

明治三十四年(た)第二七三一号

仮処分命令

東京市牛込区市ヶ谷砂土原町一丁目二番地
登記権利者　菊池武夫

同　市京橋区尾張町二丁目十九番地
登記義務者　森竹五郎

右登記権利者ヨリ地上権仮登記ノ為メ為シタル申請ヲ相当ト認メ当区裁判所ハ決定スル〔抹消〕〔コト〕〔加筆〕〔左ノ〕如シ　登記義務者所有東京市麹町区内幸町一丁目三四番地一二号所在市街宅地一千五百一坪八勺ノ内北東部八十六坪六号六勺ニ工作物所有ノ為メ前記登記権利者ノ〔抹消〕〔前記権利者登記〕為メ地代〔抹消〕〔金〕一ケ月十一円九十五銭九厘毎月末日払無期地上権ノ仮登記ヲ命ス

東京区裁判所
明治三十四年四月十三日　判事　飯田高顕
右正本也
東京区裁判所
明治三十四年〃月〃日〔抹消〕〔区〕裁判所書記　粟屋淳一

〔朱書〕

受付年月日	受番号	登記済		
明治三十年四月十六日	第五七三二号	東京区裁判所八重洲町登記所印		
町村名称	登記番号		順位番号	
麺町地	土地		乙	
内幸町	第一号		二	
一丁目			番	

明治卅四年(た)第二七三一号
仮処分命令変更決定

(144)

東京市牛込区市个谷砂土原町一丁目二番地
登記権利者　菊池武夫
同　市京橋区尾張町二丁目十九番地
登記義務者　森竹五郎

右当事者間ノ明治三十四年四月十三日付仮処分命令中誤謬ノ点登記権利者ヨリ更正ノ申請アリタルニ付キ決定スルコト如左
同市京橋区尾張町二丁目十九番地トアルヲ東京市京橋区銀座一丁目十一番地現時尾張町二丁目十九番地ト及市街宅地一千五百一坪八勺ノ内北東部トアル同上北西部ト更正ス
明治卅四年四月十六日　東京区裁判所　判事　飯田高顕
右正本也
〔朱印〕東京区裁判所印
同日同庁ニ於テ
裁判所書記　土屋正由
〔朱印〕東京区裁判所書記印

(142)

一九

しよとく　しんこく　の　ようし　おくる　すうじ
お　かきいる、　ばかり　に　いんさつし　あれど
も　あまり　ごた〳〵　に　して　かゑつて　みにく
し
けんぜい　わ　ちそ　一〔朱点〕〇〇　に　つき　〇〔朱点〕八八
の　わり　の　よし　にて　モトミヤ　むら　の　そ
んぜい　わ　十七〔朱点〕五二二　アサギシ　むら　の　ぶ

ん わ 三・三四五（朱点） にて これ また おういに
ぞうかせり〔（朱書）（タ、ヒ一八）〕
うめ さくら さかり の よし〔（朱書）（タ、ヒ二六）〕

二七 日 月
六 五

しよとくきん わ タケヒラ より おくりこせる
しよしき に したがい さ の とうり とゞけ
いづ

第三種所得申告〔（朱書）（16/8/34ぺいじ一六七）〕

明治三十四年第三種所得左記ノ通候

明治三十四年五月八日

岩手県盛岡市加賀野八六番戸
菊池 武夫

仙台税務（抹消）〔署〕（加筆）〔管〕理局長清宮質殿

一金〇三〇〇・〇〇（朱点・申告中以下同様） 預金利子
一〃〇四〇〇・〇〇 法典調査会手当
一〃二〇〇〇・〇〇 貴族院歳費
一〃 一九七・〇〇 東京市牛込区貸家三棟六一
坪ノ所得
家賃合計三一八・〇〇〇
外一棟一六坪親類住居ニ付キ無賃
外金三・〇〇 地租 金六・〇〇 府税
金一六・〇〇 市税 〃一六・〇〇 給水税

〃六〇・〇〇 修繕費 〃二〇・〇〇 管理費
〔（朱書）合計 一二一・〇〇〇〕
（加筆・朱書）〇地租一円ニ付〇・三二ノ割
△〃 〇・二七〃〃
×地租一円ニ付〇・八八ノ割
地租 県税 村税
田 五・〇五〇 四・四四四 一・六一六
畑 九・〇〇九 七・九二七 二・八八二
一金四八〇〇・〇〇 職業ノ所得
一〃 一〇・九四三 岩手県盛岡市小作ノ所得
（朱書・記号は以下同様）
外金二・〇四四 地租 ×金一・〔（抹消）九八七〕 県税
〔（加筆）七八九〕
金〇・六九〇 市税
〔（朱書）合計 四・五三二〕
一〃 三三・八六八 同県岩手郡浅岸村小作ノ所得
外金一四・〇五九 地租 ⊠金一二・三七一 県税
〔（抹消・朱書）⊠九・〇〇九〕〔（抹消・朱書）〔三・六四五〕〕〔（抹消・朱書）〔×七・三二七〕〕〔（抹消・朱書）〔三・一〇七〕〕
〔（抹消・朱書）〔〇二・八八二〕〔（抹消・朱書）一・一六六〕〕
金四・四九八 村税〔（朱書）〃三〇・九二八〕
収入合計 三〇・〇〇〇
一〃 一六・九八二 同村山林ノ所得（七三八町
七反六畝二四歩 地価一一
〇・八一五）

外金三・六四五　地租　×金三・二〇七　県税
○金一・一六六　村税　金五・〇〇管理費
〔朱書〕〃　一三、〇一八〕
一〃　三八二・七六八　同県同郡本宮村小作ノ所得
外金九〇・〇三七　地租　×金七九・二三二　県税
△金二四・三〇九　村税　金五〇・〇〇管理費
〔朱書〕〃　二四三・五七八〕
一〃　六一四・一六四　同県紫波郡飯岡村小作ノ所得
外金九〇・六七五　地租　×金七九・七八三　県税
△金二四・四八二　村税　金八七・〇〇管理費
〔朱書〕〃　二八一・九四〇〕
一〃　四・二四八　同郡煙山村小作ノ所得
外金一・四八〇　地租　×金一・三〇二　県税
△金〇・二九六　村税
〔朱書〕〃　三・〇七八〕
所得金合計金八七五九・二二八也

明細書

一盛岡市　二八畝一三　地価一二二円三七〇
小作一石四斗　名代一一円〇四五
小作金合計　一五円四七五
地目変換年期中ニ付租税ハ従前ノ額ニ依ル
一浅岸村　二〇八畝〇七　四二六・一一七
畑賃　三石五斗　九・九四二
三〇円〇〇　——
三四・七九七
三〇・〇〇〇
一本宮村　一〇八二〃一七　二七九九・五九九
六三〃〇〇〃　九・九四二
六二六・三四六
田成三三畝二六ノ租税ハ地目変換年期中ニ付従前ノ額ニ依ル
一飯岡村　一〇七四〃一五　二七六一・二一八
八八〃〇〇〃　一〇・九一九
八九五・三五八
一煙山村　九一〃一八　四四・五八〇
一〃〇〇〃　□七・三二六
〔朱書・抹消〕〔大豆一石ノ代金〕
七・三二六
一地租ハ法定ノ率ニ依リ県税市村税ハ既徴収ノ前半〔抹消〕〔加筆〕〔額〕〔期〕ノ現率ニ依ル
以上〔朱書〕〔一六七枚参照〕〕

奈良　名古屋 (149) 一三

〔朱書〕〔□大豆一石ノ代〕
ナゴヤ　に　おいて　ニホンベンゴシキヨウカイ
の　りんじ　そうかい　が　ひらかるゝ　に　つき
さる　一〇　か　あさ　七　じ　二〇　ぷん　かりぎ
り　の　くるま　に　二〇　にん　ばかり　のりこみ
て　しゆつぱつし　よくじつ　ごゞ　セイヱイザ　と

やら　ゆう　しばいごや　にて　ゑんぜつかい　あ
りよる　わ　カワブン　にて　ナゴヤ　へンごし
か　もようせる　ゑんかい　に　まねかれ　さくちよ
う　わ　シカイギジドウ　にて　そうかい　お　ひら
き　よる　わ　トウヨウカン　にて　こんしんかい
あり　みき　にて　そうかい　の　ようじ　すみたり
　は、ぎみ　わ　ちかごろ　たつしや　に　なられ
たれ　ども　ぢびよう　ある　ろうじん　なれば　ま
た　なんどき　からだ　に　こしよう　おこる　や
はかり　がたく　かつ　かねて　より　〔けさ〕（抹消）〔キヨ〕（加筆）
ウト〕　に　おける　むすめ　や　まご　ひこ　お
みたき　ねん　あり　ハマ　わ　この　ごろ　ぐあい
　よく　がつこう　がよい　に　わ　さしつかゑ　な
けれ　ども　からだ　いまだ　まつたく　もと　に
かゑらず　ほよう　の　ひつよう　あり　されば　こ
の　ついで　に　はゝぎみ　の　のぞみ　お　たつさ
せ　ハマ　の　ほよう　お　なさん　と　こゝろざし
　みき（ぎ）　りようにん　お　さくちよう　の　きゆうこ
う　れつしや　にて　こゝもと　に　よびよせ　キヨ
ウト　の　マガキ　テイ　お　も　おり　よくば　と
もなわん　と　ハマ　より　てがみ　お　ださせ　お
きたる　に　マガキ　わ　イセ　まで　ゆかるれども
　テイ　わ　ナラ　まで　の　ほか　ゆかれぬ　と
の　こと　ゆゑ　みちぢゆん　あしけれ　ども　まづ

ナラ　ゑ　おもむかん　と　けさ　七　じ　はん
カンサイ　テツドウ　に　て　しゆつぱつ〔し〕（抹消）〔す〕（加筆）
二　とう　の　ちんきん　一　にん　まゑ　一一・〇九（朱点）
なり　ひる　すぎ　ナラ　サンヂヨウドオリ　キク
スイロウ　に　つけば　オウツキ、チリ　わ　マガキ
と　テイ　と　お　ともない　すでに　せんちやく
せり　ちゆうじき　ご　うちつれて　カスガジンジ
ヤ、ダイブツ　お　けんぶつ〔し〕（抹消）〔す〕（加筆）　キクスイロウ
わ　もつか　ふしん　ちゆう　に　て　なにごと
も　ふてまわり　なり

長谷　京都　宮参奈良(14)

一四

あさ　四　じ　ごろ　より　おきて　さわぎたる
かい　も　なく　チリ　わ　やつと　キヨウト　ゆき
の　ま　に　あいたれ　ども　われ　ら　わ　七
じ　はん　の　れつしや　に　のりおくれ　九　じ
四〇　ぷん　に　て　しゆつぱつす　二　とう　の
ちんせん　一　にん　まゑ　一一・〇五（朱点）　なり　カメヤ
マ　ツ　お　へて　三　じ　はん　すぎ　ヤマダ　ノ
ゴニカン（五二館）　に　つき　すぐに　くるま　お
めいじて　ゲクウ　ナイクウ　ゑ　さんけいし　ス
ギモトヤ　に　て　いせおんど　お　み　八　じ　ご
ろ　やど　に　かゑる

一五

あさ　七　じ　はん　ごろ　じんりき　に　て　フ
タミガウラ　に　おもむき　一〇　じ　はん　ごろ
ヤマダ　に　もどり　ゴニカイ、ブツピンチンレツヂ

ヨウ　に　て　めいさん　るい　お　かい　ちゆうじ
き　ご　一二　じ　四〇　ぶん　に　て　カメヤマ
ツゲ　クサツ　の　三　が　しよ　に　て　のりかゑ
　八　じ　キヨウト　に　つく　オウタケ　ふうふ
むかい　に　いでおり　ともに　フヤチヨウ　の　タ
ワラヤ　に　ちやくす　（抹消）（この　ひ　まで　あめ　に
　あ）（加筆）（きしや　ちん　わ　やはり　二・〇五（朱点））　なり

一六

　は、　ぎみ　たち　わ　しんるい　まわり　お　な
し　シモガモ　ゑ　まいる　われ　わ　キヨウト　ダ
イガク　や　オカマツ、サンタロウ　お　とい　オカ
マツ　お　ともないて　キヨウト、ホテル　に　ちゆ
うじき　お　なす　よる　オウツキ　オグラ　の　ふ
た　ふうふ　オウタケ、スミ　きたる

一七

　八　じ　二〇　ぶん　シヾヨウ　お　はつし　ナラ
　お　へて　一一　じ　すぎ　サクライ　に　つき
すぐに　じんりき　に　て　ハセ　ゑ　むかい　ひる
　ころ　つく　イタニヤ（井谷屋）　に　ちゆうじき
お　めいじおき　すぐさま　チヨウコクジ（長谷寺）
ゑ　さんけいす　ぼたん　わ　たゞ　二　りん　のみ
　さきのこれり　ひるじたく　ご　サクライ　に　い
たり　三　じ　はん　どうしよ　お　いで　六　じ
二四　ふん　シチヾヨウ　に　もどる　この　あいだ
　の　ちんきん　ひとり　一・〇四（朱点）　なり　オグラ、
コウヘイ　まちおりて　すぐに　ゴヂヨウドウリ（ホ
ウコクジンジヤ（豊国神社）　まゑ　どうり）ドウラク
（道楽）　ゑ　ともない　かいせきりようり　お　ふる
まゑり　ていしゆ　やく　わ　オウツキ　オグラ　ふ
うふ　あいきやく　に　わ　ヤマモト、シゲオ　なり
　よる　オウタケ、スミ　きたる　いま　まで　あめ
　に　あたらず

一八

　一一　じ　すぎ　キヨウト　お　たつ　ちんきん
二・三一（朱点）　なり　四　じ　はん　ナゴヤ　に　つき
シナチユウ、ホンテン　に　とまる　アンドウ、トシ
ユキ　ふうふ　きたる

一九

　あさ　五　じ　四八　ふん　に　て　はつし　ちん
きん　四・九〇（朱点）　なり　八　じ　まゑ　シンバシ　に
　つく

二〇

　しよとく　しんこくしよ　さる　八　か　さしいだ
し　ミルマイ　ムラ　の　しよとく　わ　モトミヤ
ぶん　に　こもり　七七　ばん　こ　わ　むやちん
なる　むね　もうしそゆ
　こめ　そうば　もつか　一　だ　七・二〇（朱点）　より
七・五〇（朱点）　ぐらい　しつけまい　わ
　一だ三と七しよう　キンタロウ
　一だ　ダイキチ　一だ　マサノスケ
　一だ　セイゾウ（これ　わ　つねに　かたま　なれ
　　ども　とくべつ　なり）

（加筆・朱書）〔(17/12/33, p.101)〕
〔(16/4, p.141)〕
〔(27/5, p.149)〕

メイスケ　ヱイスケ　ゑ　わ　かさぬ　やくそく　なれ　ども　やむ　お　ゑぬ　とき　わ　かたま　づゝ　も　かさん　と　おもう　よし　ヱイスケ　わ　ホツカイドウ　ゑ　みうりしたる　よし　カメキチ　ようし　わ　みよわ　に　て　じゆうぶん　はたらきできぬ　よし　だい　六　き　ちそ　四三・〇〇（朱点）　よび　一五・〇〇（朱点）　おくりくる　よう　もうしきたる

〔（朱書）（タ、ヒ九）〕

しつけまい　わ　いよ〳〵　さ　の　とうり　かしたる　よし

一だ三ど七しよう　キンタロウ
一だ　ダイキチ
一〃〇　〇　マサノスケ
一〃　セイゾウ
〇　三〃七〃　ヱイスケ
〇　三〃七しよう　メイスケ
〆五〃三〃七〃

しゆうのうまい　の　うち　マサノスケ　より　いれたる　みつかぶり　あおまい　一　だ　ヱイスケ　より　もみ　と　ひきかゑ　に　いれたる　まちまい　一　だ　および　もらまい　一　だ　つごう　三　だ

鶴，たつ百日呟　悪米売払　仕付米貸渡　(149)
（加筆・朱書）
〔(p.p.101, 141, 148)〕

二七

一〇六

わ　ねだん　に　かゝわらず　しよき　まゑ　に　うる　（もちまい　わ　ふけ　やすき　が　ため）　もつか　じよう　くらまい　の　ふね　七・二〇（朱点）　ぐらい　の　よし　タケヂ　わ　びようき　の　ためじひよう　さしいだし　きんじつ　モリオカ　ゑ　かゑる　よし〔（朱書）（タ、ヒ二六）〕

日　月
二　六

せんげつ　ちゆうぢゆん　より　ツル　と　タツわ　ひやくにちぜき　に　かゝり　ツル　わ　もはやとうげ　お　こしたれども　タツ　いま　もつともわろし　たゞし　りようにん　とも　いたつて　かろき　たち　なり

せんげつ　二五　にち　より　この　二　か　までにて　カゞノ　ほんたく　の　まさぶき　しつかいできそう　ひよう　わ　六二　ゑん　よ　かゝりたる　よし〔（朱書）（タ、ヒ四）〕

(150)

五

さくなつ　すいがい　に　かゝりたる　スケジロウこさくち　一六　ぢわり　の　二七　ばん　の　一た　一　たん　八　せ　二七　ぶ　の　うち　八　せほど　みつぼれ　および　おしながれ　と　なりたる　そんがい　の　ばいしよう　お　さくしゆう　ニホン、テツドウ、ガイシヤ　ゑ　ようきゆうし　おき

悪米代　山役銭　水堀田下小作

一五

たれ　ども　いまに　なんら　の　あいさつ　なし
しかるに、りんち　の　もの　が　うめつち　お　は
こびいれ、て　こさくし　たき　よし　に　つき　が
んらい　こさくまい　わ　一　だ　四　と　七　しよ
う　よ　なれども　その　はんがく　ぐらい　にて
のぞみにん　に　つくらする　こと　に　とりきめた
る　よし〔（朱書）〃〕
アサヌマ、マゴタロウ　より　かい、れたる　た　一
たん　七　せ　二五　ぶ　の　ちか　わ　四〇・五（朱点）
八二　なる　よし　このほう　の　ひかゑ　に　わ
〇　が　おちて　ありたる　なり　三　がつ　より
五　がつ　まで　の　すみがまやくせん　八・〇〇（朱点）
とりあがり　ありたる　よし〔（朱書）〃227〕
ぼうふ　の　いつしゆうき　の　ほうじ　お　する
に　つき　さる　六　か　ごろ　しゆつきようした
る　オウツキ、チリ　が　キヨウト　ゑ　かゑる　そ
の　ついで　に　オグラ、テイ　ゑ　ニツポン　ダイ
ジテン　いちめい　コトバノイヅミ　と　ゆう　じび
き　お　くれん　とて　とゞけがた　お　チリ　に
たのむ　やつかいなる　かなづかい　と　かんじ　と
が　なお　にゆうよう　なる　ゆゑ　なり　もちご
め　一　だ　八・二〇（朱点）　マサノスケ　おさめ　の　み
つかぶりまい　一　だ　六・八〇（朱点）　ヱイスケ　おさめ
の　まちまい　一　だ　六・五〇（朱点）　つごう　二一・六（朱点）

上田　三三年度収納米現状 (151)

一八

〔（朱書）（101,141,148-9）〕

〇　わ　けんぜい　ついか　に　むく　この　ついか
ちそわり　わ　ちそ　一　ゑん　に　つき　〇・〇（朱点）
八　の　わり　なる　よし〔（朱書）（タ、ヒ一四）〕
さくねんど　の　しゆうのうまい　の　げんじよう
さ　の　ごとし
一九八だ　そうだか
〇だ三ど七しよう　タケヒラ、ほか、ゑ
せいぼ
五〃三〃七　キンタロウ、ほか、ゑ
かす〔（朱書）（27/5,149）〕
三〃〇〃〇　うる（ぜん　こう　お
み　よ）
一八九だ　さしひき　のこり　げんざい
この　ほか　すいがい　に　つき　おさまらざりし
ぶん　さ　の　とうり
一だ　マサノスケ　ひきまい
〔（朱書）（16/4,141）〕
九〃三ど七しよう　キンタロウ　ほか　ゑ
ねんぷがし〔（朱書）（16/4,141）〕
〆一〇〃三〃七〔（朱書）（タ、ヒ一四）〕
二〇　か　に　わ　マツモト　二四　か　に　わ
ナゴヤ　に　ようじ　あり　マツモト　より　もと
きし　みち　お　もどり　トウカイドウ　お　ナゴヤ
ゑ　ゆく　が　はかみち　なれども　いくど　も

一九

ふみし　みち　にて　おもしろからず　ことに　にち
ようび　か　はいりて　わつか　一　にち　の　さ
なれば　このたび　わ　うわさ　に　きゝし　テンリ
ユウガワ　の　ふなくだり　お　こゝろみん　と　か
くごし　一一　じ　はん　ウエノ　はつ　の　きしや
に　のり　れい　の　とうり　タカサキ　にて　の
りか（抹消）（加筆）〔ゑ〕〔い〕　よる　八　じ　ごろ　ウエダ　の　ウ
エムラヤ　に　つきたり　やど　の　むすこ　わ　ト
ウキヨウ、ホウガクイン　の　がくせい　たりし　と
て　でむかい　その　た　もてなし　に　つとめたり
あさ　八　じ　ウエダ　お　たち　二　ゑき　ばか
り　すぎて　シノ、イ（篠ノ井）　に　つく　やく　一
じ　はん　ばかり　まちて　一〇　じ　一〇　ぷん
しゆつぱつす　これ　わ　いわゆる　シノ、イ　せ
ん　にて　こんど　はじめて　のる　さいしよ　の
ゑき　わ　イナリヤマ　と　いゑども　まち　より
わ　一〇　ちよう　も　きた　に　あたり　きんじよ
に　わ　いゑ　も　みゑぬ　ほど　なり　こ、　よ
り　にしやま　の　はら　お　のぼりはじめ　ゆんで
に　わ　かわ　お　へだて、　シノ、イ　や　ウエ
ダ　の　ほう　お　ながめ　つ、　ついに　みなみや
ま　の　はら　に　いで　オバステ（姨捨）　に　とま
る　めいしよ　の　オバステヤマ　おば　めじた　に
みおろす　ほど　の　たかき　ところ　にて　一

ぢよう　の　せんろ　にてわ　へいち　お　ゑられぬ
と　みゑ　マツイダ（松井田）　ミヨダ（御代田）　な
ど　に　おける　が　ごとく　のぼりぐるま　わ　あ
ともどり（抹消）〔して〕　（加筆）〔して〕　ていしやば　に　つく　イ
ナリヤマ、オバステヤマ　わ　さくねん　五　がつ
二八　にち　イロベ　し　に　あんないせられて　み
たる　ところ　なれども（朱書）〔63〕　ホウガクシンポウ（法
学新報）だい一一ごう　五七ー八）これ　より　さ
き　わ　みけん　の　ち　なれば　さゆう　に　め
お　くばる　ま　も　なく　とんねる　に　はいる
その　ながき　こと　おびだゝしく　や、　一〇　ぷ
ん　かん　も　すぎたらん　か　と　おもわる、　こ
ろ　ようやく　カブリキヤマ（冠着山）　の　すぐ　に
し　に　いづ　サルガバゞトウゲ（猿馬場峠）　と　や
ら　お　きりたる　にて　も　あらん　か　この　と
んねる　わ　りようぐん　に　またがり　サラシナ、
ゴウリ（更級郡）より　いりて　ヒガシ、ツクマ（東筑
摩郡）　に　でる　つぎ　の　ゑき　なる　オミ（麻
績）　まで　わ　だいぶん　くだれ　ども　オミ　わ
なお　こうげん　に　あり　ひろからぬ　たにま
に　いくた　の　すいでん　ありて　もつか　たうゑ
さいちゆう　なり　この　あたり　わ　シンシユウ
（抹消）〔にて　も〕　（加筆）〔の〕　うち　でも　やまなか　なるが
かやぶき　や　こけらぶき　わ　なくて　かわらぶき

なる　のみ　ならず　かべ　も　しらがべ　が　おうし　げに　かいこ　わ　いと　と　なり　〔たんも(抹消)〕の〕〔きぬ(加筆)〕と　なる　のみ　ならず　さま〳〵　にかわる　もの　なる　かな　なお　くだりて　一一じ　四〇　ぷん　ころ　ニシヂヨウ（西條）　に　つく　こゝ　わ　シノ、イ　せん　さいしゆう　の　ゑき　にて　ウヱノ　より　の　ちんせん　三・四(朱書)〔七(抹消)〕〔八(加筆)〕　なり　てつどう　が　こゝ　まで　つうじてより　まだ　ま　が　なき　ゆゑ　りようがわ　に一　けん　づゝ　ある　やすみぢやや　わ　いづれも　はしらだて　と　ゆかばり　お　おわりたる　ばかり　にて　あばらや　どうぜん　なり　けんちくよう　の　あしば　めきたる　はし　お　つたつてみぎがわ　の　にかい　に　はいり　た〔る(抹消)　に〕〔り(加筆)〕　この　いゑ　わ　〔ノギ(抹消)〕〔イチノ(加筆)〕ヤ　〔二(加筆)〕乃〔木(抹消)〕屋）　とて　した　わ　ゆか　も　まだ　はられずにかい　とて　も　たゝみ　の　しかれたる　まわ　あれ　ども　たてぐ　わ　一　まい　も　なし　じせつがら　かざ　とうし　の　あるの　わ　よけれども　につこう　の　ゑんりよなく　てりごむ　に　わへいこう　なり　くち　に　〔あ(抹消)〕おう　ちゆうじき　おすゝむる　ところ　ある　まじ　とて　けさ　やどにて　こしらい　くれたる　べんとう　お　ひらきたる　に　さい　わ　ちゆうもん　どうり　つけもの

苅谷原　会田　中嶺 (154)

るい　おうく　なまなか　の　さかな　すくなきわ　よけれ　ども　めし　わ　ちいさく　にぎつてごく　そまつなる　のり　にて　まきたり　のり　おくう　の　わ　いやなれ　ども　それ　お　はがすわ　よういの　わざ　に　あらず　かつ　ひゑたりしかるに　この　あばらや　に　わ　あたゝかきめし　のみならず　うまそうの　においする　〔し(抹消)〕つゆもの　ありければ　この　二　しな　お　とりよせて　あんがいに　よき　ひるじたく　お　なしたりマツモト　まで　七　り　ぢか〔く(抹消)〕〔き(加筆)〕　みちのりとの　こと　なるに　四　ゑん　にて　にゝん　びきの　じんりきしや　一　りよう　やとい　まひるごろ　たちいでたり　しゆく　お　でる　か　でぬま　に　はや　さかみち　と　なり　ナカノトウゲ（中ノ嶺）　ミダレバシ（乱橋）　など　ゆう　ながくさがしき　ところ　お　つゝけさまに　のぼつて　ついに　タテトウゲ（立嶺）　に　たつす　わが　ゆくみち　お　サイガワ（犀川）の　たに　より　へたつる　さんみやく　お　こゑて　みぎ　に　マツモトお　のぞむ　しやふ　の　なんぎ　お　み　てわ　のりて　も　きらく　ならぬ　に　ぜつちよう　にとゞいて　ヤレ　うれしや　と　おもう　せい　もある　か　タテトウゲ　の　ちようぼう　わ　ゆかい　に　おぼゑたり　こゝ　より　〔アオヤギ(抹消)　お　へ〕

アイダ（會田）まで　ひたくだり　に　くだ〔り〕〔る〕（抹消）（加筆）
に　こしかた　より　こうばい　わ　ゆるき　か
と　おもう　いぜん　ホウフクジ（保福寺）トウゲ
お　なんぎなる　ところ　と　こゝろゑ　〔ゐ〕（抹消）〔い〕（加筆）た
る　に　この　やまごゑ　わ　ひとしお　けんなん
なり　しかるに　くだり　なかば　に　メイジ　三二
ねん　オウサカ　お　いでたる　むね　いたがこい
に　しるしたる　いざりぐるま　お　むすこ　と
おぼしき　わかい　おとこ　が　ひき　にようぼう
らしき　おんな　が　あとおし　お　する　の　に
であいたり　おうがた　ゼンコウジ　に　まいる　も
の　ならん　これ　〔お〕（抹消）〔に〕（加筆）　くらぶれば　わが　し
やふ　の　なんぎ　わ　そば　ゑも　よれ〔ぬ〕（抹消）〔ず〕（筆）
よ　にわ　かんなん　の　うゑ〳〵　が　ある　もの
かな　（加筆）〔二〕　じ　ごろ〕　アイダ　にて　ヤナギヤ
に　いこい　ソリマチ（反町）お　へ　カリヤバラ
（苅谷原）　にて　ホウフクジトウゲ　より　きたる
みち　に　いで　しゆく　の　うゑ　にて　こくどう
より　ひだり　に　おれ　みちせん　お　はらつて
ながく　ゆるやかなる　さかみち　お　のぼりくだ
り　〔オカダ〕（抹消）〔アサマ〕（加筆）　の　おんせんば　お　ひだり
に　ながめつゝ　六　じ　ごろ　マツモト　〔ウラ（加筆）
マチ（裏町）〕　の　マンギク（萬菊）と　ゆう　やどや
に　つく　きよう　の　みち　わ〔シオジリ（塩尻）〕（抹消）

セバ（洗馬）より　シノ、イ（篠ノ井）に　つうずる
ホツコクカイドウ（北国）またわ　センコウジカイ
ドウ　と　しようする　もの　の　一　ぶ　にて　し
ゆく　らしき　しゆく　も　なき　ほどの〔なる〕（抹消）に
やまなか　の　ひとつや　にても　ようざん　が
おく　お　うるおうして　かわらぶき　ならぬ　わ
なし〕　やまさかみち　なる　に　うま　の　せ　く
るま　の　うゑ　に　まゆ　お　つめたる　あるいわ
あけたる　たけかご　お　つみて　とうる　かず
なか〳〵に　おうし　ウヱダ　にても　けさ　みたる
が　やゑつゝじ　わ　ゑんどう　しよ〳〵　に　さ
きいで　また　やましようぶ　も　さきいたり　いん
れき　五　がつ　の　せつく　に　あ〔る〕（抹消）〔た〕（加筆）る　よ
し　にて　どこ　とも　シヨウキ　や　ジンゴウコウ
ゴウ　タケノウチノスクネ　など　の　のぼり　たち
たる　に　マツモト　わ　さすが　にて　ぢようもん
お　そめだし〔たる〕（加筆）　もの　ふきながしの〕　るい
その　かず　おびだゝしく　さながら　タケタ　じだ
いの　せんぢん　の　ごとし　やど　にても　のき
に　よもぎ　と　しようぶ　お　はさみ　ふろ　に
まきたる　しようぶ　お　いれたり　わが　こきよ
うも　かく　の　ごとく　する　に　トウキヨウ
にてわ　こいのぼり　の　ほか　なん　の　さた　な
き　が　つね　なれば　こよい　わ　ひさしぶり　に

て こきよう に もどれる こゝちしたり

けさ 一〇 じ ぜんご にわ すむ と おもい
し ようじ に からまれ ひる すこし まゑ に
やど ゑ もどり いそぎ ちゆうじき お したゞ
め 一二 り ほどの イナ（伊那） むしろ サカシ
タ（坂下） として ひろく しらる、 ところ まで
五 ゑん にて つなつき お やとい まひる
しゆつたちしたり マツモト お ぬけて ま も
なく ひだり お みれば やま の ちゆうぶく
〔に〕（抹消）〔より〕（加筆） は゛ ひろき こうばい きゆうなる
すなとこ あり かわどこ らしく わ あれ ども
いかにも きゆう なり いろ〳〵 かんが〔ゑ〕（抹消）
〔い〕（加筆）たる が ついに わからず しやふ に たつ
ねれば ごう、 の おり さんじよう より みつ
いで かの かわしろ お ながれて〔て〕（抹消） マツモ
ト に きたる マツモト わ これ が ために
ひたさる、 よし けんが（懸河） と ゆう わ あ
まのがわ のみ と おもいしに この しやば に
も ある もの なり みぎ にわ じんだい の
せんぢよう として しらる、 キ、ヨウガハラ（桔
梗ヶ原） が かいこん のこり の あおの の し
よ〳〵 まつ や すぎ の こだち あつて むか
し の おもかげ お みせ その おく にわ ゆ
き お いたゞきたる キソ の さんがく ひいで

〔み〕（抹消）〔そ〕（加筆）の ながめ みあき がたし みち わ
やまて すなわち ひだり お さす てり つきた
る けつか つちほこり ふかく〔わが〕（加筆） しやふ
〔か〕（抹消）〔が〕（加筆） けたつる のみ にても たくさん なる
に がつこう かよい の こども ら ことに
おとこのこ ら が わらぞうり お はき〔て〕（抹消） く
るま の さき ゑ たちて〔わが〕（抹消）しやふ と きよ
うそうする にわ へいこう なり さるばかま は
きたる のうふ みゑ そ〔め〕（抹消）〔む〕（加筆） おとこ にわ
かぎらず おんな も きて いたり 一 じ はん
四 り 二五 ちよう の シオジリ（塩尻） に
いこう この しゆく わ きよねん キソ より
スワ（諏訪） ゑ ゆく とき とうり〔て〕（抹消）〔たる〕（加筆） と
ころ やすみ ちや、 さゑ その おりの と お
なじ 〔一一〕（抹消）〔じ〕（加筆）〔キソヂ〕（加筆）の セバ や マツモト や
スワ ゑ かよう ばしや ありて ぎよしや わ
やすみいる あいきやく ら に じようしや お
す、めたり 二 じ こ、 お いで スワ ゑわ
まつすぐに ゆく お われら わ ちや、 の
かど お みぎ に まが〔り〕（抹消）〔る〕（抹消） もつとも これ
わ きゆうどう の よし や、 ありて しんど
う に がつす それ より わ くだる いつぽう
にて まつ いでたる しゆく お オノ（小野）
と ゆう なかば わ ヒガシチクマ、ゴウリ に

ぞくし　なかば　わ　カミイナ、ゴウリ　に　ぞくす
　この　てまゑ　に　チクマチ(筑摩地)　と　ゆう
ところ　あり　チクマゴウリ　に　チクマチ　の　め
いしよう　ある　わ　いぢようなる　のみならず　と
ち　の　けいせい　に　よる　も　イナ　に　つくべ
き　わ　あきらか　なり　むかし　さかいろん　など
　ありて　あらたまりたる　にもや　オノ、ミヤ　わ
たいぼく　おいしげりて　こうぐしき　しやち
なり　コウシユウ　か　カミスワ　か　しらね　ども
　フジ　に　にたる　やま　ひだり　に　みゆ　イナ
ブ(伊那富)　にて　テンリユウガワ　〔の〕(抹消)〔に〕(加筆)　ちか
づき　その　うがん　に　ある　ヒラデ(平出)　お
のぞむ　イナブ　に　やすむ　とき　わ　四　じ　な
りし　に　シオジリ　より　四　り　あり　と　ゆう
　ソレ　ヨリ　マツシマ　キノシタ　など　お　へ
六　じ　はん　ごろ　イナマチ　いちめい　サカシタ
の　トミヤ(富屋)　に　つく　みち　わ　おうむね
くだり　にて　イナブ　より　わ　テンリユウ　に
そう　みき　に　キソ　の　しゆんれい　ひだり
に　スワ　またわ　コウシユウ　の　れんざん　あり
　たにあい　はなはだ　ひろから　ず　ようざん　わ
ずいぶん　さかんなる　よう　なるに　チクマ　と
わ　まつたく　おもむき　お　ことにし　やね　わ
いたぶき　にて　うゑ　に　いし　お　のせ

富屋　伊那(坂下)

〔たり〕(抹消)　その　ほか　ゆうふく　らしから　ず　テン
リユウ　の　さんしゆつぶつ　ならんが　しゆくば
に　わ　かばやき　その　た　かわうお　りようり
の　かんばん　おうし　イナ　わ　テンリユウ　の
そば　にて　かわ　に　かけたる　はし　お　ゆたり
　三　り　たら　ず　ゆけば　タカトウ(高遠)　に
いたる　と　ゆう　トミヤ　の　にかい　わ　あたら
しく　も　あり　すゝしそう　なれ　ども　マツモト
の　イトウ　さん　が　くる　とて　したざしき
に　あんないせり　ひろく　わ　あれ　ども　むかし
ふう　の　うすぐらき　へや　〔たり〕(抹消)〔にて〕(加筆)　〔おく〕(抹消)
げんかん　と　へんじよ　に　ちかく　たゞ　ふるか
らぬ　ゆたかおり　の　しかれたる　が　とりゑ　な
り　ふろば　ゑわ　だいどころ　お　とうりて　ゆく
　ゆぶね　わ　ふるからね　ども　ゆ　わ　よごれた
り　しよくご　ていしゆ　まかりいで　ミヤジマ(トウキヨウ　コウソイン　ハンジ)オウタ、スケトキ(太田資時)ナカムラ、ヤロク　イサワ、シユウジ　キタムラヱイ、チロウ　など　この　きんじよ　しゆつし
ん　の　ともがら　なり　と　うわさせり

二一

　五　じ　に　おきて　お(ママ)　たゝきたれば　げぢよ
わ　ほそひも　お　しめたる　ねまき　なり　にて
いできたる　うら　の　ながれ　に　ておけ　お
いれて　くみきたる　ちようづみづ　わ　おもいのほ

竜飛館　飯田　下伊那 (159)

かきれいにつめたしつけうめにかけたるがあかざとうなるわちかごろめつらしきふかいかなりゆうべもけさもかぢかおだしたるにそのおうきさおやゆびとなかゆびおひろげたるくらいなり七じトミヤおいでたるにやがてみちぶしんのばゑきたるたてふだに"One Side prohibited to pass"のめいぶんありこのあたりわがいこくじんのゆきゝまれなるべきにわざ〳〵かゝるやくぶんおそゑたるわきのしれぬさたなりキソのコマガタケよりきたるオウタギリ(大田切)ナカタギリヨタギリ(与田切)のしよせんおわたりきゆうどうのヒカゲザカ(日陰坂)おのぼりてナゝクボ(七久保)のちやゝにいこいたるわ九じなりしカタギリおへタジマのさきにてちいさきたににくだりみじかきサカイバシおわたりたるにみわはやシモイナ、ゴウリにありイナよりだん〳〵にテンリユウにとうざかりたるがシモイナにいりてよりしだいにくだりしだいにかわにちかよりついにかわばたのイゝダ(飯田)につきたるわちようどひるなりキソのさんみやくおい〳〵にとうざかりテンリユウりようがわのパノラマなか〳〵によくのばらつゝじわいまおさかりにさきいでシモイナのけしきおしておんわゆかいならしむ〔しようごどう〕(抹消)〔シヨウゴドウ〕(加筆)(蕉悟堂)ゑとこゝろざしたるにしやふわキクマチのリユウヒカン(竜飛館)ゑひきこみたりシンシユウイゝダといゑばやまなかのいなかまちとのみおもいしになんぞはからんやなみみせつきともマツモトにまさるがごとくみゆまちわおかのうゑにありてそのとうたんわ〔ほとんと〕(加筆)テンリユウにせつするがごとしリユウヒカンわあまりはやらぬやどとおぼしくつきたるおりにおんなどもわげんかんにてはりしごとおしていたりみちびかれてさんがいのざしきにいりたるにへやわかなりなれどもひるじたくのよういなかりしとみゑにわかごしらいのさい〔に〕(抹消)〔と〕(加筆)ひやめしとおいだしたるにはなはだうまからず一二じはんこゝおたちさかおくだりたるころだいじのちづおおきわすれたることおはつけんしたれどもゆくさきおいそくゆゑもどりてとることもせずがんらいみちお〔い〕(抹消)〔イナ〕(抹消)にとりたるわ〔ニ〕(抹消)〔イ〕(加筆)ゝダ

駒場　参州街道 (160)

お さる 二 り ばかりの ところ より かわ
ふね に のりて テンリユウ かはん の けいし
よく お しようせんが ため なりしに この ご
ろ かわがれ にて 一 にち に くだり きれぬ
かも しれず と ゆう かつ そらもよう あし
く なりたれば とま お かぶりて しゆうちゆう
に ひそむ ぐらい ならば むしろ りくこうす
べし と けつしんす りくろ わ キソ の ツマ
ゴ(妻籠) お へて ミノ ゑ いづる お ぢゆん
と すれども キソヂ わ さく しゆう つうこ
うしたれば サンシユウ、カイドウ(ママ) に より オウ
ミ(大海) もしくわ シンシロ(新城) に いで そ
れ より トヨガワ、テツドウ(ママ) にて トヨハシ に
たつせん もの と イナ より つれきたれる
しやふ ども お そのまゝに シンシロ まで
二四 ゑん の やくそく にて でかけたる なり
イナ より イゝダ まで わ 一一 り ばかり
なれども みちしろ よく おうくわ くだり な
りしに この さき わ やまさか にて オウミ
まで 二四 り あまり あり と いゑば あす
の うち〔に〕(抹消) に トヨハシ に たつし がたから
ん とわ おもいしも しやふ ども わ ぜひ あ
す の しゆうれつしや の ま に あわせん と
ゆう ゆゑ しからば きよう の うち に な

井桁屋　浪合　参州街道 (16)

るべく さき ゑ すゝみ おかん と コマンバ
に とまらん とする しやふ の せつ お はい
し ナミアイ もしくわ その さき に やどらん
と くるま お いそがしたり ナカムラ の さ
き にて たにあい に くだり アチガワ(阿知川)
に そうて にし に さかのぼり コマンバ(駒場)
お とうる コマンバ の やどや わ ナミアイ
など の に くらぶべく も あらず と の
しやふ の ひようばん に さだめて みばゑ あ
る もの ならん と おもいのほか かやぶき の
わいおく たてつらなり やどや らしき うち
わ め に とまらぬ ありさま なれば これ に
おとれる やど わ そう〳〵するに かたからず
あめ わ ふりだす みち わ かぎりなき のぼ
りざか と な〔り〕(抹消)〔る〕(加筆) しゆうこう お おもい
と、まりしわ よけれども うちゆう に すう じ
ゆうり の みち お あるく わ われ ながら
よけいなる ものずきしけり と おもいたり 三
り はん と しようする さかみち お のぼりつ
め ナミアイトウゲ の ぜつちよう より はんじ
かん ほど くだりて〔六〕(加筆)〔じ〕 ナミアイ(浪合)
の イゲタ(井桁)ヤ に いる ぜんたい にて
二〇 こ に たらぬ ほど の しゆく の り
よしゆく なれば〔も〕(抹消)〔よ〕(加筆)そう に すぎたる い

ぶせき　うち　なり　とうされたる　おくざしき　わ
なかにわ　に　ひら〳〵　〔いつ〕(抹消)〔一〕(加筆)けんの　しよ
うじ　あれども　ゑんがわ　なく　その　ほか　にわ
三　じやく　の　たかまど　ある　のみ　たゝみ
わ　いやに　やわらかく　しめりけ　さゑ　ある　よ
う　に　おぼゑ　げた　がけ　にて　いたのま　お
かよう　べんじよ　なれば　ふろば　の　さま　わ
みずして　しるべき　〔なり〕(加筆)　と　にゆうよく　お
ことわり　たかまど　より　そと　お　ながむれば
ふりしきる　あめ　わ　こんや　や　みようちよう
に　おさまり　そう　に　みゑず　うつぜん　として
ふかい　の　ねん　に　おぼれん　とする　おり
こそ　あれ　まゑやま　の　このま　より　ほとゝぎ
す　の　なくね　もれきたれり　二〇　ねん　ぜん
ふるさと　お　いでし　より　きんねん　センダイ
にて　一　や　きゝたる　ほか　たゑて　きかざりし
この　こゑ　が　はしなく　みゝ　に　いりたる
その　けつか　わ　ふしぎせんばん　なり　こじん
の　しいか　こきよう　の　ふうぶつ　これ　より
あれ　と　しんちゆう　に　うかみいで　しんぺん
の　むさくるしさ　その　た　の　うさ　お　まつた
く　わすれ　しめたる　のみならず　いとわざらしむ
るに　いたれり　ていしゆ　の　はぎれ　と　おぼし
き　さつぱりしたる　もめん　あわせ　お　ねまき
に　とて　さしだし　七　じ　はん　に　あめのうお
の　しおやき　にて　ばんめし　お　もちいでたる
にようぼう　の　まめやかさ　と　りよこう　の
とも　に　とて　このたび　もとめきたれる　Coffo-
Ids Innermost Asia　と　〔か〕(加筆)　の　おらぬ　の　と〕
にて　とこ　に　つく　まで　こゝろよく　くらし
たり　トウキヨウ　にも　みうける　ふう　なるが
いしや　の　たく　またわ　でばりじよ　お　びよう
いん　もしくわ　いゝん　など　とのうる　こと　は
やる　と　みゑ　ゑんどう　その　るい　の　かんば
ん　お　みうけたるが　わが　やど　の　のきさき
にも　シユウゼンイ、ン（十全医院）に　ふでぶと
に　かゝれたる　ひようさつ　あり　かゑりて　やど
や　の　かんばん　みゑざりし　ゆゑ　はじめ　の
ほど　わ　まことの　びよういん　に　かりやどりさ
せたる　か　と　おもいし　〔わか〕(抹消)　しやふ　ども
だいぶん　つかれたる　ようす　ゆゑ　あらて　〔お〕(抹消)
〔と〕(加筆)　とりかゑ　たく　おもゑども　イ、ダ　より
いなん　一　りよう　の　じんりきしや　に　さゑ
あわぬ　ぐらい　にて　この　あたり　に　くるま
も　ひきて　も　なければ　せめて　イ、ダ　より
あらて　お　つれざりし　お　こうがいしたり（ママ）
はたして　あめ　わ　なお　やまず　ふらるゝ　う
ゑ　わ　一　こく　も　はやく　たつ　に　しかず

二二

大海　海老　上津具　伊奈街道 (163)

と　六　じ　ごろ　しゆつたちたり　ナミアイガワ
お　わたり　しゆくはづれ　より　しだいに　のぼり
たるに　せいようりう　の　〔こ〕(抹消)〔の〕(加筆)こぎり　きかい
お　すゑつけて　たすう　の　いた　お　こしらい
たる　こや　ありたり　〔八　じ〕(加筆)　三　り　さき　の
ヒラヤ(平谷)　に　くだりたるに　五〇　こ　ばか
り　の　むら　なり　なお　〔三〕(加筆)　り　お〕　くだりて
九　じ　はん　ネバ　(根　〔場〕(抹消)〔羽〕(加筆))　〔スミヨシヤ〕(加筆)
に　いこいたるに　やど　の　あるじ　はたかせぎ
の　なり　にて　ちや　お　もちいでたり　こ、　よ
り　ゆうめいなる　ホウライジ(鳳来寺)　ゑの　わか
れみち　ある　よし　一〇　り　と　ゆう　しゆく
より　一　り　はん　も　〔きたる〕(抹消)〔のぼれる〕(加筆)　か
と　おもう　ところ　〔に〕(加筆)　シナノ　と　ミカワ　の
くにざかい　あり　これ　より　キタシタラゴウリ
(北設楽郡)　に　いり　〔一一〕(加筆)　じ　はん〕　イナカイ
ドウ(伊奈街道)　の　たい、ち　ゑき　なる　カミツ
グ(上津具)　に　くだる　ゑんどう　やまぎり　の
はなざかり　と　うぐいす　の　ね　と　に　じもく
お　たのしましめたり　ネバ　カミツグ　かん　三
り　カミツグ　より　また　三　り　の　あいだ
たいてい　くだり　にて　〔ぐんやくしよ〕(抹消)　しよざい
ち　なる　タグチ〕とある　一　けん　ちや、　に
〔て〕(抹消)　やすみ　つくだに　にて　ひる　めし　お　く

名古屋　豊橋　大海 (164)

いたる　わ　二　じ　はん　ごろ　なりしが　すこし
のぼりて　ぐんやくしよ　しよざいち　なる　タグ
チ　お　とうる　しんの　むら　にて　みせ　らしき
うち　も　なき　ほど　ぐん　の　ちゆうおう　な
る　か　しらねども　ぐんやくしよ　など　の　ある
べき　ばしよ　とわ　おもわれず　また　とうげ　お
のぼりくだりて　三　り　さき　の　ヱビ(海老)
に　いづ　こ、　わ　はや　ミナミ、シタラゴウリ
に　ぞくし　すこぶる　はんせいなる　が　ごとし
しやふ　ら　わ　つかれて　はしる　ゆうき　なく
その　うゑ　みちぶしん　と　やら　にて　はんり
ばかり　まわり　クロセ(玖老勢)　〔川〕(抹消)ガワ　タキカ
ワ　に　そうて　うし　の　ごとく　〔三〕(加筆)　り　はん〕
あゆみ　しゆうれつしや　の　じこく　に　おく
る、　こと　一　じ　かん　にして　八　じ　はん
オウミ(大海)　に　つく　おなじく　とまる　ならば
シンシロ　まで　ゆかん　と　ほつし　べつの　く
るま　お　やとわん　とすれども　おうずる　しやふ
なく　やむおゑず　〔またも〕(抹消)　ヤマダヤ　に　くつ
お　ぬぎたるに　おもてにがい　に　あんないせら
る　うかりと　たゝば　はり　に　あたま　が　つか
ゑん　か　と　おもわる、　あつくるしき　ざしき
なり　さつするに　〔ほんの〕(抹消)　にごみや〕　てつどう
が　オウミ　に　たつしたる　より　にわかに　ふつう

の わらや に にかい お しつらい ほんの にご
みや お やどや に へんじたる ならん きよう
わ トヨハシ に いで さらに トウカイドウせん
にて やはん ナゴヤ に つかん と の きぼう
まつたく むなしく またも ひとよ お いぶせき
やどや に あかさゞる お ゑぬわ ざんねん なり

二三

六 じ 二五 ふん オウミ はつ 一 ばん れ
つしや に のり シンシロ お ひだり に みる
とうりたらば いかゞ か しらねども ゑんぽう
したる ところ にてわ よほど はんかなる ま
ち と みゆれば せめて こゝ に やどり かね
たるが のこりおうく かんぜらる トヨガワ イナ
リ お みぎ に みて 七 じ はん ヨシダ す
なわち トヨハシ に つく 三〇 ぷん ばかり
ま が ある ゆゑ まちあいしつ に いり ひさ
しぶりに トウキヨウ の しんぶん お みたるに
ホシトウル が さしころされたる むね しるさ
れたり 八 じ 〔はん〕(抹消) 〔一〇〕(加筆) ぷん 〕 トヨハシ
お たち 一一 じ ごろ ナゴヤ に つく オウ
ミ より の ちんせん 一・三〇(朱点) ばかり なり

一　日

七　月

べいか わ 一 だ 七・三五(朱点) くらい なるに

売米代金　家族片瀬行 (166)

四

七・五〇(朱点) に たつし たらば げんざいの 一八九
だ の うち 一五〇 だ うりて 〔わ〕(抹消) わ い
かゞ と タケヒラ より たづねこしたるが とに
かく 七・五〇(朱点) いじよう ならねば うらぬ むね
こたゑたり〔(朱書)(タ、ヒ六ノ三〇)〕
カマクラ に おもわしき いゑ なくて カタセ
の むらやくば となり に ある Cocking の
もちいゑ お 七、八、九、一〇 の 四 かげ
つ 九〇 ゑん にて かりうけ けさ 〔九〕(抹消) 〔一〇〕(加筆)
じ すぎ の きしや にて ミネ わ は、う
ゑ と 〔たつ〕(抹消) 〔タツ〕(加筆) フク 〔ヨシダに〕(加筆) と げぢ
よ イワ 〔ス〕(抹消) 〔ツ〕(加筆) ギ お ともない かの ち ゑ
おもむけり この ごろ わ あめ がち にて
すゞしき ほう なれども しようにら ふたり と
も ひやくにちぜき お わづらい かいほう に
おもむく おり なれば かいがん に いづるが
よからん とて ゆきたる なり 一 じ 四〇 ぷ
ん あんちやくし タツ わ すぐ はだし にて
はまべ お あるきたる よし

一〇

七・六五(朱点) にて かいて ある よし タケヒラ
より でんぽう あり うるべき むね こたゑおき
たるに みぎ あたい にて 一五〇 だ うり さ
くじつ てきん 五〇 ゑん うけとり あと わ
きたる 一五 にち こめ ひきかゑ に わたす

一八

やくぢよう　の　よし〔朱書〕〔（タ、ヒ九）〕
こめ　一五〇　だ　の　だいか　一,一四七・五〇〔朱点〕
かわせ　にて　たつす　その　ご　一　だ　八・〇〇〔朱点〕
まで　のぼりたる　よし　一　げつ　より　六　が
つ　まで　の　でいりめいさいちよう　お　おくりき
たる〔朱書〕〔（タ、ヒ一七）〕

二一

〔加筆〕〔コウイチロウ〕　ミサオ　わ　ヨシダ　と　かじつ
せんぱつしたるに　つき　きよう　わ　ハマ　ツル
げぢよ　タケ　お　ともない　三　じ　二〇　ぶん
にて　シンバシ　お　はつし　五　じ　すぎ　フジ
サワ　ゑ　ちやくす　〔抹消〕〔キシヤ〕〔加筆〕〔ていしやば〕　まで
コウイチロウ　ミサオ　ヨシダ　でむかい、たり　ツ
ル　〔抹消〕〔と〕〔加筆〕〔お〕　〔抹消〕〔ヨシダ〕〔加筆〕〔くるま〕　〔抹消〕〔を〕〔加筆〕〔に〕　のせ
あと　わ　カタセ　まで　あゆみたり　しやくたく
まで　二五、六　ちよう　も　あらん　か　フチサワ
まで　の　二　とう　ちんきん　〇八一　なり

二三

のこりまい　三九　だ　お　八、五〇　づゝ　にて
うり　てきん　五〇・〇〇〔朱点〕　うけとりたり　と　の
こと　さる　一八　にち　八・一五〔朱点〕　にて　うる
か　との　でんぽう　あり　よろしき　むね　その
ばん　へんじしたるに　いかゞ　〔抹消〕〔の〕〔加筆〕〔か〕いしたり
や　さしづ　なき　ゆゑ　まちいる　うち　八・五〔朱点〕〇
と　なりたるに　つき　〔抹消〕〔か〕きかずに　うりたる
よし　まちがい　の　こうみよう　なり

山役銭　売米代金

二六

一一八

せんげつ　すゑ　なりし　か　ハマ　ぢようちゆう
お　くだしたるに　つき　イチカワ　とて　せんね
ん　われ　が　ちりよう　お　うけたる　いしや　に
みせん　と　したるに　ふざい　なりしが　かゑり
たる　よし　しらせ　ありたるに　より　さくじつ
ハマ　わ　カタセ　より　じむしよ　まで　かゑり
きよう　ヱキ　に　ともなわれて　ゆきたり　しかる
に　あやにく　むし　わ　くだらざりし　よし
じむしよ　の　かさいほけんりよう　わ　三〇　ゑん
なりしに　ことし　より　一七・〇〇〔朱点〕　に　げんがく
する　と　の　こと　にて　三五ノ七ノ三一　まで　の
ほけんりよう　として　一七　ゑん　お　はらいたり
ざんまい　三九　だ　の　だいか　三三一・五〇〔朱点〕　の
うち　にわ　の　ていれ　みそ　よう　の　しお
の　かいゝれ　とう　の　ひよう　に　一一・五〔朱点〕〇
よびきん　ゑ　くりごみ　ざんきん　三二〇・〇〔朱点〕〇
かわせ　にて　おくり　きたる〔朱書〕〔（タ、ヒ二五）〕

日　月

四　八

カゞノ　の　たく　の　もん　わき　に　たちなら
ぶ　すぎ　の　ゑだ　あまりに　しげるに　つき　か
りはろう　よし　もちやま　の　まきやまやくせん

みね，子供片瀬引場　塔ノ沢　大築夫婦　所得税額 (167)

（まき　に　もちゆる　ぞうぼく　の　だいか　お
ゆう）二一・八五五（朱点）　しゆうにゆうしたり　シヤクシ
ヨ　より　ちゆうがい　ある　よし　ちゆういし　よ
こしたれども　マツオマエ　の　しよゆうち　へん
にわ　むし　みゑぬ　と　なり〔（タ、ヒ三）〕（朱書）

五

マガキ　と　ともに　きたり　じぶん　だけ　ハコ
ネ　トウノサワ　ゑ　ゆきたる　オウツキ、チリ　よ
り　でんぽう　ありたれば　はゝぎみ　はじめ　ケイ
マロ、マガキ、コマガミネ　まで　一〇　にん　コウ
ヅ　より　でんきてつどう　にて　トウノサワ　ゑ
ゆき　タマノユ　に　やすみ　ゆうがた　チリ　も
どう〳〵　かの　ち　お　たち　一〇　じ　すぎ　カ
タセ　ゑ　かゑる

一六

ゼイムシヨ　より　しよとくきん　お　八，九二（朱点）
二・一一（朱点）　と　けつていしたる　むね　つうち　あり
わが　とゞけ　だか　より　一六二・八八二（朱点）　まし
たる　わ　モトミヤ　イ、オカ　アサギシ　の　こく
だい　〔わ〕（抹消）〔が〕（加筆）　シ　と　どうしよう　一一・〇五四（朱点）
と　〔すへき〕（消）〔したる〕（加筆）に　よる　よし
〔（タ、ヒ一五）（一四五《枚参照》《まり　さんしよう》）〕（朱書）（抹消）（加筆）

日　月

八　九

事務所塗換　竜口寺　啓蟄商業学校入学 (168)

(167)

一二

九

はた　わ　きんねん　に　なき　ほうさく　にて
べいか　の　たかさ　にも　かゝわらず　ハチマン
の　さいれい　に　だし　お　たくさん　だす　よし
このてがみ　わ　ヤマモト　シゲオ　が　キヨウ
ト　タイガク　ゑ　きこうする　ため　の　じようき
よう　の　びん　に　たくしたる　なり〔（タ、ヒ三）〕（朱書）
ミネ　わ　さる　一　じつ　フク　と　げぢよ　イ
ワ　〔お〕（加筆）　つれて　かゑり　われら　わ　けさ　ハ
マ、コウイチロウ、ミサオ、ツル　と　〔タカシマ、〕（加筆）
シン、〕ヨシダ、タケ　お　ともない　きゝようす
にもつ　ある　ため　ふだ　わ　シンバシ　まで　か
いたれども　シナガワ　にて　シンジユク　ゆき　の
きしや　に　のらん〔と〕（抹消）　と　して　おりたるに
その　きしや　わ　すでに　はつしたれば　ばしや
にて　シンバシ　に　むかいたり　シンバシ　ぎわ
より　じむしよ　まで　あゆみ　こども　ら　わ　く
るま　にて　一　じ　ごろ　きたくす　もつとも　わ
れら　わ　はゝぎみ　タツ　と　げぢよ　ギン　と
こんげつ　ちゆう　カタセ　に　おる　つもり

一一

ケイマロ　わ　さる　七　がつ　の　にゆうがく
しけん　に　しゆびよく　きゆうだいし　いよ〳〵
こんにち　より　コウトウ　ショウギヨウ　ガツコウ
（高等商業学校）に　つうがくす　げつしや　わ　ね
ん　一三三　ゑん　にて　はんき　ぶん　づ、　おさむ
二二〇　かも　せいおんに　うちすぎ　三一　ね

んど より わ しゆうかく ます ならん スケジロウ もらいたり とて しん いりごめ よこしたり さる 九 か コウヤ(高屋)の おば せんたく の おり けがしたる よし なれども けいびなり いかなる まちがい やら われら しきよした〔る〕(抹消)〔り〕(加筆) と の ひようばん モリオカ に おこり おどろきたれども しんじつ ならば でんぽう あるべき はづ と おもいたる やさき コウイチロウ より ヤマモト シゲオ ゑ あてたる 八 か づけ の てがみ に おどけたる ふしありたれば あんしんせり と の こと

〔(朱書)(タ、ヒ一一)〕

(168)

一三

せんじつ らい ふたゝび きたれる マガキ わ その ご キクヱ が げり に かゝりたる しらせ に あい かゑる また くる つもり なりしが おつと チリ〔を〕(抹消)〔の〕(加筆) ドイツ ゆき がいよ〳〵 らいげつ 五 か と きまりたれば その したく かれこれ にて こられぬ ことく なりたり

ニチレン、ダイボサツ すなわち オソシサマ の ごなんび とて ひる わ はた お おしたて よる わ まんどう お かゞやかして れいの たい こ お たゝき コシゴヱ の リユウコウジ(龍口寺) ゑ まいる ひと の かず おびだゝしく

菱喜　名古屋　片瀬

(169)

一四

このへん の にぎわい ひぢよう なり

きよげつ ぢゆう より ウチサイワイチヨウ の じむしよ の ぺんき ぬりかゑ その た の しよう しゆぜん お はじめたるに あらがた で きたるに つき 二七七・四七(朱点) うけおいきん の うち 二五〇・〇〇(朱点) カミトウ・シヨウゾウ の のぞみ に まかせ はらい つかわせり

二三

しよとくぜい ぜんはんがく 一一一・五二七(朱点) の うち 一一一・〇〇(朱点) くにもと に おくる さくちよう カタセ ゑ らいゆう の ババ・ゲンジ ハニユウ・アキチカ かゑる

二四

あさ 六 じ すぎ カタセ の ぐうきよ おいで フヂサワ にて〔ナゴヤ〕(抹消)〔オウブチ〕(加筆) まで の きつぷ お かい 七 じ 八 ふん にて オウフナ に むかい どうしよ にて さらに ナゴヤ まで の きつぷ お 七・六五(朱点) に もとめ 七 じ 二七 ふん しゆつぱつ す コウヅ ゑ いつて そこ より じようしやする が ぢゆんぢよ なれども くだり れつしや の つごう あしく やむなく あともどりして きゆうこう れつしや に のれり

二五

メイジ 二三 ねん 三 がつ ナゴヤ ちほう に おいて かいりくゞん だいゑんぢゆう ありとき の しほうだいじん こ ヤマダ はく が

ばいらん　の　ため　しゆつちよう　に　つき　づい
こうして　その　つき　二八　に　つきたる　いらい
ぜんご　一〇　か　ばかり　やどりて　せわ　に
なり　その　ご　メイジ　二五　ねん　四　がつ　ご
ろ　〔たと〕(抹消)かの　ち　にて　おとづれたる　ぎり　九
か　ねん　はん　ばかり　あわざりし　テンマチヨ
ウ　の　たまり　しよう　ヒシキ（菱喜）　こと　ワ
タナベ、キヘイ　が　なにとなく　なつかしく　おも
い、だされ　でんわ　にて　おとづれたるに　ぜひ
きて　くれ　との　こと　ゆゑ　ゆかん　と　したる
に　よぎなき　つかゑ　おこり　その　い　お　はた
しかぬる　こと　と　なりたれば　でんわ　にて　こ
の　おもむき　い、やりたるに　ワタナベ　しが
シナチユウ・ホテル　に　たづねきて　ひさび〈（ママ）
ぶりの　たいわ　お　なし　いたく　ゆかい　お　お
ぼゑたり　らいげつ　また　くる　ついで　あれは
その　おり　わ　かならず　たづねん　と　やくして
わかる　いらいにん　が　そつこく　むざい　の
い、わたし　お　うけ　うれしさ〔の〕(抹消)〔の〕(加筆)　あまり
〔に〕(抹消)　に　しゆくゑん　お　もようし　ぜひに　と
の　しようだい　お　なす　いらいにん　の　ちそう
お　うくるは　がんらい　このまぬ　こと　ながら
ことわり　にく、　やむおゑず　ワタナベ　ゆき
お　み〔あ〕(抹消)〔や〕(加筆)わせて　トウヨウカン（東陽館）に

二六

おもむく　くさぐさ　の　きようおう　ありて　かゑ
る　とき　かつおぶし　の　おうきな　おり　お　く
れたり　なるほど　いわい　にわ　つきもの　なれど
も　あす　トウキヨウ　ゑ　かゑる　ひと　に　この
おくりもの　お　くる、　とわ　いなか　の　ひと
の　ゆうつう　の　きかぬ　しようぢきさ　お　し
めすこと　あきらか　なり
すこし　はやく　ひるじたく　お　なし　一二　じ
二五　ふん　の　きゆうこう　に　のる　れいの
かつおぶし　の　おり　わ　やつかい　ながら　しや
しつ　に　もちいりたれども　ミネ　の　ちゆうもん
に　か、る　たくわんつけ　の　たる　わ　てにも
つ　とわ　ならぬ　ゆゑ　ちかごろ　シンバシ　オウ
サカ　の　りようしよ　に　かいせつしたる　てにも
つ　はいたつ　の　びん　お　かること、し　シンバ
シ　まで　の　ちん　〇・五八（朱点）　と　シンバシ　より
イチガヤ　まで　の　はいたつ　ちん　〇・〇八（朱点）
と　つごう　〇・六六（朱点）　にて　くさき　たる　の　し
まつ　お　つけたり　七・〇六（朱点）　にて　コウヅ　まで
の　きつぷ　お　かい　よる　八　じ　はん　どう
しよ　に　おり　はしごだん　の　のりおり　きつぷ
の　だしいれ　が　めんどう　ゆゑ　あかぼう　に
きつぷ　お　わたし　さらに　〔〇・七五（加筆）　にて〕
フチサワ　まで　の　きつぷ　お　かい、れしめ　八

八女トメ誕生　片瀬引払　高屋きを (171)

三〇

じ　五三　ぷん　コウヅ　お　はつし　一〇　じ
ごろ　フチサワ　に　おり　カタセ　に　つきたるわ
一〇　じ　はん　にて　ちようど　きゆうこう　れ
つしや　が　シンバシ　ゑ　つく　ころ　なりし
しよとくぜい　きん　一一一・〇〇（朱点）　ミネ　より
おくれる　ちそ　きん　一〔八〕（抹消）〔七〕（加筆）・〇〇（朱点）　つごう
一二〔七〕（抹消）〔八〕（加筆）・〇〇（朱点）　まさに　うけとり　みそ　わ
このたび　おくれる　にて　三二　ねんど　に　しい
れたる　ぶん　しつかい　おくりづみ　の　よし　せ
きり　に　かゝりたる　ヤマモト・ユカリ（山本縁）
せんたく　の　おり　かわ　ゑ　おちて　けがしたる
コウヤ（高屋）　の　おば　わ　いづれ〔も〕（抹消）　も　か
いゆしたり〔（タ、ヒ二五）〕（朱書）
コウヤ　の　おば　〔や〕（抹消）〔く〕（加筆）すりだい　に　さしつ
かゑる　ゆゑ　五・〇〇（朱点）　もらいたき　よし　もうし
こみ　あり　この　ほう　より　ちよくせつに　へん
じせよ　との　こと〔（タ、ヒ二九）〕（朱書）

日　月

一〇

一　カマクラ　ザイモクザ　の　タカハシ・モシチ　わ
さくじつ　〔らい〕（抹消）〔きたり〕（加筆）　まいねん　かれ　に
あづけおく　しよたい　どうぐ　の　とりかたづけ
や　トウキヨウ　ゑ　もちかゑる　にもつ　の　こし

浜松　静岡支部会　大築千里送別 (172)

四

らい　お　なし　まんぢゆう　と　けさ　とれたる
さば　あぢ　など　お　みやげ　にと　かいゝれ　八
じ　三五　ふん　はゝ　ぎみ　タツ　げぢよ　ギン
お　ともない　フヂサワ　お　たち　一〇　じ　す
ぎ　シンバシ　に　つき　はゝ　ぎみ　だち　わ　む
かい　の　くるま　に　のつて　一一　じ　ごろ　ぶ
じ　きたくす
あさ　五　じ　はん　だい　八　ぢよ　うまる　も
はや　こども　の　かづ　たくさん　ゆゑ　これ　が
さいしゆう　なれ　かし　とのこゝろ　にて　ト
メ　と　な　お　つく　あまりに　たび〳〵　の　こ
と　ゆゑ　クレ（呉）　の　しゆうとめ　ゑ　の　ほか
どこ　ゑも　しらせず

五

オウツキ・チリ　の　ドイツ　ゆき　の　ひあい　ち
かづく　に　つき　さる　一　にち　の　ばん　ふう
ふ　お　まねき　ハイバラ　せい　の　おうぎ　ぢよ
うぶくろ　など　せんべつ　と　して　おくり〔おき〕（抹消）
たるに〕きよう　じむしよ　より　の　かゑり　いと
まごい　に　たちより　ちそう　お　うく　オウツキ
わ　あす　あさ　九　じ　しゆつぱん　の　ドイツ
せん　に　のり　ゼノア　に　しようりくする　つ
もり　われ　も　あす　わ　ハマ、ツ　ゑ　ゆく　ゆ
ゑ　みおくりかぬる　より　こんばん　たちよりたり
シツオカ、シブ（静岡支部）の　いんゆうかい　に

おもむかんと　あさ　六　じ　二〇　ぷん　に　のり
一　じ　すぎ　ハマ、ツ　〔(抹消)につき〕〔(加筆)オウゴメヤ〕
(大米屋)　に　つき　ゆ　に　はいりて　カブキサ
と　ゆう　しばいごや　に　ゆき　六　じ　まで　が
くぢゆつ　ゑんぜつ〔(抹消)かい〕　お　なし　ひきつゞき
チヨウトウカン(聴濤館)　に　おいて　こんしんかい
あり　まち　や　きんそん　の　しんし　だち　と
いつしよに　いんしよくす　このや　の　な　わ
はま、つかぜ　お　なみ　の　おと　などらいて
つけたる　にや　と　といたるに　こ、　の　なみお
と　わ　なだがき　もの　にて　にし　に　きこゆる
とき　わ　あめ　ひがし　に　きこゆる　とき　わ
はる、　と　ゆう　また　オウゴメヤ　の　にかい
ゑんがわ　の　かもい　の　あたり　に　ところ
〳〵　お　ゑくりたる　ふとき　しんばりほう　と
くさび　に　いとなわ　お　つけたる　もの　いくつ
と　なく　あり　とじまり　の　ほう　と　してわ
あまりに　ぎようさん　なり　と　あやしめば　フ
ヂ　おろし　きた　および　きたひがし　より　ふき
たる　かぜ　わ　ひぢように　つよく　あまど　が
しおりて　まんなか　が　うち　の　ほう　ゑ　はり
だし　かぜ　の　あつりよく　が　のく　〔(抹消)ひようし
に〕〔(加筆)とき〕　そりたる　と　が　そと　の　ほう　に
はねかゑる　ひようし　に　とばさるゝ　ゆゑ　そ

七

の　わざわい　お　ふせぐ　どうぐ　の　よし
さくじつ　ごゞ　二　じ　より　いんゆうかい　お
フヨウロウ(芙蓉楼)　に　ひらき　ゆうけい　さん
かいし　けさ　九　じ　二三　ぷん　にて　はつし
七　じ　まゑ　シンバシ　に　つき　すくに　きたく
す　しよちゆう　きゆうか　ちゆう　じてんしや　に
て　こ、　お　いで　トウカイドウ　〔(抹消)チユウゴク〕
〔(加筆)サンヨウドウ〕　さてわ　キユウシユウ　の　ゑんが
ん　シコク　アワヂ　より　キシユウ　の　コウヤサ
ン　クマノ　まで　はしりまわりたる　ナカ・ミチヨ
(那珂通世)　し　らいわす　あさ　わ　はやく　たち
よる　わ　いたるところ　の　かんげいかい　にて
おそく　なり　ねむり　の　たらぬ　ため　ひる
はしり　ながら　ねむかけ(ママ)し　二　ど　おちて　けが
したる　よし　ひたい　の　きづ　わ　なお　みゑた
り
さの　しゆつさん　とゞけしよ　お　くにもと　ゑ
おくる

出　生　届〔(朱書)(三五、七三ページ　さんかん)〕
寄留東京市牛込区砂土原町一丁目二番地
岩手県盛岡市加賀野八十六番戸々主士族
弁護士
父　菊　池　武　夫
嘉永七年七月二十八日生

上村屋　上田　碓氷 (174)

同居無職業
母　菊池ミネ　安政五年四月七日生
八女　トメ
出生　明治三十四年十月四日午前五時半
出生ノ場所　東京市牛込区砂土原町一丁目二番地
右及御届候也
届出人
明治三十四年十月　日　菊池武夫〇
盛岡市戸籍吏清岡等殿

一二

さる　一　にち　にわ　ツルコ　七　か　にわ　イ、オカ　ゑ　さくあい　けんぶん　に　ゆきたるに　いづれ　も　じようできの　よし　トメ　しゆつしよう　とゞけ　わ　一一　にち　さしいだしたる　よし〔朱書〕〔タ、ヒ一一〕

一三

三　か　ばかり　まゑ　より　げり　に　かゝり　たいていわ　とまりたる　よう　なれども　ようじん　の　ため　ミヤモト　ゑ　たちより　一　しゆう　かん　ぶり　の　さんやく　お　もらい　また　アハ　ヂチヨウ　の　カメヤ　にて　しよくよう　びすけつ　と〔加筆〕〔さあでん〕　さいまつしたる　にく　の〔抹消〕〔くん〕〔加筆〕〔かん〕づめ　にわとり　の　と　はむ　の　と　お　もとめ　なお　れもんどろつぷ　や　ぶらんでい　か

一二四

んきり　ないふ　さじ　ちいさき　こつぷ　など　お　う、　お　おかして　ウヱノ　の　ていしやば　に　いたり〔朱点〕〔六・三八〕　にて　しいれ　あらし　めきたる　ふ　〔抹消〕〔ち〕〔加筆〕〔そ〕ば　の　ちや、　にて　しよくぱん　お　かいて　一一　じ　三〇　ぷん　しゆつぱつす　ニシヂヨウ（西条）　まで　の　ちんきん　〔朱点〕三・四八　なり　ウスイ（碓氷）　にわ　まだ　きいろ　の　は　さゑ　みゑず　八　じ　五〇　ぷん　ウヱダ　の　ウヱムラ・ハンザヱモン　かた　に　つく　この　へん　わ　あめ　ふらざりし　よし

篠ノ井 (175)

一四

あさ　八　じ　ウヱタ　お　たち　サカキ（坂城）　ヤシロ（屋代）　の　二　ゑき　お　すぐる　のみ　な　るに　わりやいに　おうくの　じかん　お　つ〔抹消〕〔□〕　〔加筆〕〔い〕やし　九　じ　すこし　まゑ　シノ、イ　に　つ　く　ナガノ　お　一〇　じ　ちかくに　で、くる　き　しや　お　まちあわす　にて　はつしや　までわ　一　じ　かん　あまり　ありなかじま　の　よう　な　る　ところ　に　おる　より　ていしやば　まゑ　の　ちや、　に　やすまん　とて　れいの　あかぼう　お　おかぬ　ゑき　なれば　てづから　かばん　と　ふろしきつゝみ　と　お　りようて　に　さげ　きど　う　お　こゑ　でぐち　お　いで　みたれども　ち　や、　らしき　もの　なし　なお　すゝみゆけば　み　ぎに　きならしき〔ママ〕　やどや　ありくつ　ぬぐ　わ

めんどう　なれば　そこ　の　みせさき　に　こしかけたるに　だいどころ　や　べんじよ　の　においなど　して　なかじま　の　ふきさらし　の　まちあいじよ　が　かゑつて　こいしく　おもわれたり　ふんぱつして　〇・二〇（朱点）　の　ちやだい　お　おき　たれば　にもつ　お　はこび　くるゝ　こと　と　おもいたるに　その　けしき　なければ　この　ほう　より　うながしたるに　一三　さい　ぐらいの　おんなのこ　が　かろうじて　ていしやば　まで　はこびて　そこ　に　おく　ゆゑ　なかじま　まで　もて　と　いゑば　おもくて　もてぬ　と　ゆう　さらに　はたち　ぜんご　の　おんな　お　つれきたらしめ　それ　に　はこばせたり　ナガノ　より　のぼりきたれる　きしや　に　のりごみ　一〇　じ　二〇　ぷん　シノ、イ　お　はつす　ウヱダ　より　こゝ　までわ　チクマガワ　の　う　がん　に　そうて　くだれるに　いまわ　その　さ　がん　に　ある　イナリヤマ　お　とうり　〔ながれ（加筆）　に　さかのぼりて〕　にし　より　みなみ　ゑ　だん〳〵に　〔のぼりて（抹消）〕〔さんぷ（加筆）〕　く　お　ぬいあがり　ついに〕　オバステ　に　いたる　あたかも　ながき　わん　の　ゑんがん　お　まわりたるが　ごとく　こゝ　より　とんで　まつすぐに　チクマガワ　お　こゑたらば　けさ　たちし　ウヱダ　に　たつせん　か　と　おもわるゝ　ほど　なり　ウヱダ　お　はじめ　ゑんどう　の　ていしやば　にて　のりて　すこぶる　おうかりしが　オバステ　の　ざつとう　わ　いつそう　はげしく　のりぎれぬ　ありさま　なり　クラシナ（倉科）　に　タカノ・イチゾウ　と　やら　ゆう　いしや　ありて　はなび　お　つくるに　たくみ〔に（抹消）〕にて　まいねん　てさく　の　はなび　お　あげて　みせきたれるに　ことしぎり　せいぞう　お　やむる　ゆゑ　さくや　わ　いつせ　いちだい　の　わざ　お　あらわさん　とのこと　また　その　おり　でし　ども　が　たてたる　どうぞう　の　ぢよまくしき　あり　との　ことより　それら　お　みん　とて　きんごう　きんざい　より　きたれる　ひと　だち　が　いま　かゑる　なり　と　ゆう　はなし　が　ちと　こんざつする　よう　なれども　みて　きた　と　ゆう　のりあい　の　ものがたり　なり　ゆくて　の　ひだり　に　やま　の　もつとも　たかく　いたゞき　に　まつ　にても　あらん　か　二　三　ぼん　き　の　はゑたる　もの　わ　カブリキヤマ（冠着山）　なり　やま　の　すがた　かんむり　お　つけたる　さま　に　にたり　との　わけ　ならん　か　いづこ　より　ながめて　の　ひよう　なり　や　かいし　がたし　たゞし　むかし　と　いま　と　かたち　かわりたる　にもや　一　〔まいる（抹消）〕〔まいる（加筆）〕　五二　ちゑん　あり　と

ゆう　れいの　ながき　とんねる　お　くゞりて
ヒガシツクマゴウリ　に　いれば　オミ(麻績)　の
あたり　〔(加筆)この　まゑ〕〔(抹消)おくゑ〕　とうる　とき　たう
ゑ　さいちゆう　なりし　た　わ　こがね　いろ　の
おもたげなる　いなぼ　お　もつて　みたされたり
ニシヂヨウ　に　つきたるわ　一一　じ　はん　に
て　はやけれども　イチノヤ(一乃屋)　にて　ちゆう
じき　お　なし　さだまり　の　ちんせん　わ
一・二八(朱点)　とやら　なれども　一・六〇(朱点)　すなわち
〔(抹消)一一〕〔(加筆)に〕、んびき　にて　三・二〇(朱点)　の　やくそく
お　もつて　しやふ　お　やとい　しようご　ごろ
ニシヂヨウ　お　たつ　ナカトウゲ　お　のぼつて
ミダレバシ　ゑ　くだ〔(抹消)り〕〔(加筆)るに〕　〔(抹消)また〕　むら　の
なかごろ　に　ちいさき　はし　あり　これ　が
いわゆる　ミタレバシ　にもや　その　はし　お　わ
たれば　きわめて　きゆうなる　さか　ありて　タテ
トウゲ　の　のぼりそめ　なり　〔(加筆)(抹消)さか〕の　うゑ〕
むらはづれ　より　みぎ　に　わかれる　みち　に
でんしんばしら　の　そ〔(抹消)ふ〕うてあるわ　〔(抹消)ある〕い
わずして　きゆうどう　なる　お　しるべし〕　一
り　はん　のぼりくだつて　アイダ　お　すぐる　こ
ろ　わ　二　じ　なり　アイダ　に　いる　まゑ　ひ
だりがわ　に　アキヤマサイタンジヨ(秋山採炭所)
の　ぼうくい　あり　この　へん　より　せきたん

の　でる　こと　き、およばざりしに　めつらし　と
おもい　たつねたれば　よからぬ　やま　にて　い
ま　わ　はいこう　どうぜん　なり　と　ゆう
〔(加筆)きゆうどう　わ　この　へん　にて　しんどう　に
がつす〕　この　あたり　はぜ　のみ　が　こうよ
うせり　アイダ　わ　はんぶん　いじよう　タテトウ
ゲ　の　はしり　なる　さか　に　そうて　たてる
しゆく　なり　ぜんかい　わ　さか　の　ひだりてな
る　ヤナギヤ　に　いこいたるに　このたび　の　し
やふら　わ　とうりぬけたり　ホウフクジガワ　お
わたり　〔(加筆)イタバ(板場)〕　お　へ〕　〔(抹消)そ〕〔(加筆)ソリ〕マチ
(反町)　に　あがり　ひだり　お　みれば　かわむこ
うの　たかぎ　かし　の　うゑ　〔(抹消)お〕〔(加筆)に〕　ニセンロ
とて　しらる、　ウエダ、マツモト　かん　の　し
ん　どうろ　あり　この　どうろ　こうばい　わ　ゆ
るやか　なれども　きより　とうく　かつ　さんぷく
お　きりひらきたる　ま、　ていれ　せず　じんり
き　よりも　せまき　ぐらいの　四　〔(抹消)わ〕〔(加筆)りん〕　の
にぐるま　が　つうこうして　ろてい　に　はがた
お　ふかく　きりこみ　さんぐ〳〵　に　みち　お
わるくしたれば　じんりきしや　わ　もちろん　にば
しや　そのもの　も　カリヤバラ　より　なんぼう
お　とうらぬ　こと、　なれる　よし　ソリマチ　お
とうりすぐれば　ゆんで　に　まゆぐら　とも　み

苅谷原　善光寺街道（179）

ゆる　ごとき　にかいだて　の　がつこう　あり〔て〕（抹消）
　ウヱダ、マツモト　かん　の　きゆう　どうろ　な
る　ホウフクジ（保福寺）ミチ　わ　その　まゑ　お
すぎきたりて　カリヤバラ　の　てまゑ　にて　わが
　ゆく　ナガノ、マツモト　かん　の　どうろ　に
せつぞくす　この　せつぞくてん　より　や、　のぼ
〔つ〕（抹消）〔り〕（加筆）て　三　じ　カリヤバラ　の　カドヤ　に
やすむ　きゆうどう　わ　この　しゆく　お　まつす
ぐに　つうかん〔すれども〕（抹消）〔し〕（加筆）　おりから　きようし
　に　みちびかれて　とうりすぎたる　ゑんそく　の
　しようがくせいら　わ　この　みち　お　とりたれ
ども　われら　わ　しゆくはずれ　より　みぎ　に
おれ　さか　の　うゑ　にて　ニセンロ　に　いで
すぐに　ひだり　なる　マカイ（馬飼）ミチ　に　まが
る　まがりくち　に　みちせん　お　とる　こや　あ
りて　に、んびき　にわ　〇・〇二五（朱点）　ばかり　お
かす　この　みち　にわ　マカイトウゲ　ありて　も
と　そこに　とんねる　お　うがちたる　より　マカ
イミチ　と　しようする　よし　マツモト　まで　二
　り　と　ゆう　〔マカイカイドウ〕（抹消）〔この〕（加筆）　かいどう
　に　より　カリヤバラトウゲ（苅谷原嶺）〕　お　の
ぼりくだりて　〔オカダ〕（抹消）〔イブカ（伊深）〕（加筆）　に　たつせ
んと　する　すこし　てまゑ　にて　カリヤバラ　よ
り　の　きゆうどう　きたつて　わが　みち　に　が

万菊　松本（179）

つす　おうがん　の　まんなか　お　おがわ　の　な
がるゝ　〔しゆく〕（抹消）〔オカダ（岡田）〕（加筆）　の　なかごろ　よ
り　ひだり　に　まかれば　アサマ　の　おんせんば
　ゑ　たつす　べし　まつすぐに　こゝ　お　とうり
ぬければ　みぎ　より　れいの　ニセンロ　きたりか
いし　その　てん　より　〔すこし〕（加筆）　ゆきて〕　みち
わ　二　せん　に　わかる　みぎ　お　とれば　マ
〔ト〕（抹消）〔ツ〕（加筆）モト　の　せいぶ　に　いるべし　われら
わ　ひだりがわ　の　みち　お　ちよつこうす　まづ
　もつとも　め　に　つく　もの　わ　はるか　さほ
う　に　ぎぜん　として　そびゆる　ふたつの　せい
ようつくり　〔ひろ〕（抹消）〔おうき〕（加筆）やかなる　にかいづくり
　の　かんむり　に　やそでら　の　しようろう　め
きたる　とう　あり　がつこう　ならん　か　へいゑ
い　ならん　か　と　たつねたるに　ゆうかく　ない
　の　たてもの　の　よし　きよう　さめて　みぎ
お　かゑりみれば　ケシボウズ　と　ぞくしようする
　やま　あり　いたゞき　に　まつ　四　五　ほん
ありて　とうく　より　のぞめは　ちようど　こども
　の　あたま　の　うゑ　に　そりのこしの　け　が
　たちいるが　ごとし　その　さんみやく　の　みな
み　の　はて　わ　ヂヨウヤマ（城山）　とて　マツモ
ト　の　こうゑん　たらんと　する　ところ　なり
それ　より　〔まち〕（加筆）　の　ほう　に　め　お　くばれ

ば　しろ　あと　の　てんちゆ　みゆ　また　みち
の　ひだり　にわ〕よこ　より　みれば　ながき
にかいながや　ありて〔抹消〕〔せいしこうぢよう〕らしく
　まゑ　より　みれば〕〔加筆〕〔その〕あまど　に　しろ
ぺんき　にて　信陽煙草株式会社　と　ふでぶとに
しるしあり〕けいさつしよ　らしき〔抹消〕〔ハタバコ、セ
ンバイ、キヨク〕〔加筆〕〔はたばこ　せんばい　の〕マツモ
ト〔抹消〕〔シブ〕〔加筆〕〔センバイ、シキヨク（松本専売支局）あ
り　これ〕お　とうりこし　ひたり　ゑ　みぎ　ゑ
　と　ついに　ウラマチ　の　りよしゆく　マンギク
に　つきたるわ　五　じ　なりし
　きたる　一九　にち　二〇　か　と　ギフ（岐阜）
に　ひらかるゝ　トウキヨウ、ホウガクイン、〔抹消〕〔ナ〕
〔加筆〕〔イン〕ユウカイ、ナゴヤシブ　の　たいかい　これ
に　おもむく　にわ　きのう　の　みち　お　ぎやく
もどりし　トウカイドウ　お　ゆく　が　はやくて
かつ　らく　なれども　この　ついで　お　もつて
ヒダ　の　タカヤマ　ゑ　やまごゑ　お　なし　タカ
ヤマ　より　ギフ　ゑ　くだらん　とす　しかるに
マツモト　より　タカヤマ　まで　の　みち　の　よ
うす　わからねば　やど　にて　おい〳〵　きゝはい
たるに　タカヤマ　より　きて　かせぎおる　おんな
　など　わ　いかに　〔抹消〕〔じ〕〔加筆〕〔ぢ〕ぶん　の　こきよう
なれば　とて　ふたゝび　かゑる　こゝろ　なし　と

一五

　ゆう　ほど　なんぎ　なる　みち　なれば　おもい
とゞまる　べき　むね　やど　の　ないぎ　わ　たつ
て　いさむ　また　〔抹消〕〔そ〕〔加筆〕〔こ〕のよ　ところ　の　どう
ぎようしやら　に　まねかれて　その　ゑんかい　に
　のそみたる　おり　そうだんし　たるに　われ　な
ど　が　とても　あゆみ〔抹消〕〔う〕うべき　みち　ならぬ
よし　ときゝけらる　わが　い　お　つようするわ
たゞ　しやふ　のみ　にて　かれ　の　ゆうにわ　つ
い　この　ごろ　ふうふ　づれ　の　きやく　が　タ
カヤマ　より　きたれり　おんな　さんも　あるく
みち　ゆゑ　かくべつの　こと　あるまぢ　ことに
ノムギ　トウゲ（野麦嶺）　に　かからず　シラホネ
（白骨）お　とうれば　おんせん　も　あり　かつ
ちかみち　にて　よくぢつ　わ　はやく　タカヤマ
ゑ　つく〔抹消〕〔と〕おもむき　なれば　いよ〳〵　ゆく
こと　に　けつし　シマシマ（嶋々）まで　〔抹消〕〔5〕〔加筆〕〔五〕
　り　の　あいだ　ぢんりきしや　かよう　よし　ゆ
ゑ　どうしよ　まで　〔抹消〕〔二〕にゝんびき　にて　いそぐ
　こと、せり
　五　ぢ　マンギク　お　たつ　ひきこ　わ　シマシ
マ　まで　くるま　お　ひき　それ　より　タカヤマ
まで　かばん　お　しよい　ちんきん　五　ゑん
つなひき　わ　シマシマ　まで　〔朱点〕一〇〇　の　きめ
なり　この　ごろ　こはるびより　うちつゞきた

一六

〔抹消〕〔れば〕〔加筆〕〔るに〕 けさ あやしき くも すこし あら
われたり みち わ せいなん お さし シマダテ
（島立） ニイムラ（新村） お す〔抹消〕〔き〕〔加筆〕〔ぐ〕 ハタ（波
多） の まつばやし わ 一 り はがり（ママ） つゞき
その あいだ みち わるし この かんりん お
ぬけて アツサガワ（梓川） の ほとり に い
で アカマツ 〔抹消〕〔アゾミ〕（安雲） お すぎ アツサガ
ワ お わたつて ミナミアツミゴウリ（南安曇郡）
に いり アヅミ お とうり シマシマ の
〔抹消〕〔シミ〕シミヅヤ に やすみたるわ 八 ぢ すぎ
なりし こゝ にて くつ お ぬぎ よういの き
やはん わらぢ お はき ながら ぜんと の よ
うす お きゝたるに なんぞ はからん シラホネ
まで 五 り とか 六 り にて それ より
ヒラユ（平湯） まで のぼり ハタホコ（旗鉾） と
やら ゑ くだれは ぢんりきしや ありと ゆう
いたつて つごう よき はなし なり サンボウホ
ンブ の ちづ お みれば ノムギ みち とわ
ちがい シラホネ ヒラユ みち わ ほそく ノリ
クラダケ（乗鞍嶽） の きた くろぐろしたる ぶゞ
ん お とうる ゆゑ すこぶる けんなん とわ
おぼゆれども ちかくて べんぎ なれば それ お
ゆくと〔抹消〕〔と〕 けつしたれば シミヅヤ の しゆぢ
ん わ シラホネ の サイトウ と ゆう やどや

(181)

に あてたる てんしよ お くれたり 八 ぢ
はん にもち けん あんないしや なる しやふ
お つれて シミヅヤ お いで いよ〳〵 あんぎ
や の みち に の〔抹消〕〔そ〕〔加筆〕〔ぼり〕たるが わが あし
に しんよう なければ ない〳〵 しんぱい な
きに あらず つれの しやふ わ かお あくまで
ながく くち わ つねに あき いろ あおぢろ
く せい たかく われ お して なにとなく し
ばい の ざいにん お おもいゝで しめたり む
くち にて うるさくわ ないけれども なにか ま
ちがい お ださねば よいがと あんぢ〔加筆〕〔ら〕れたり
みち わ アツサガワ に そうて おうむね つ
まさきあがり にて みちはゞ さゑ ゆるすなれば
くるま わ らくに ひかれんと おもう ほど
なり ハシバ イネコキ（稲扱） ヒザワ（氷沢） とう
お へ オウシラガワ（大白川） お わたりて め
でたく マツタケ（松竹） に たつし めいぶつ の
そば お しようみしたるわ 一一 ぢ はん ご
ろ なり

(200) a

続柄	親族	
末家	菊池武平	大竹長壽
従兄	父ノ姉亡ミワ長男	松野千勝
従弟	父ノ姉亡チセ（抹消）（養）孫カメ（加筆）〔ノ〕夫	山本　緑
	（父ノ弟亡本宿亨二男）	内山邦久
再従姉	父ノ弟（加筆）〔亡〕亨長男亡宅命ノ女	道又金吾
従弟	実母亡シゲ弟（加筆）〔亡〕龍之助ノ長男	田中舘愛橘
叔父	継母多代ノ弟	〃　〃澄夫
	実母亡シゲ姉亡（ママ）ノ孫（父母トモニ亡姉ノ出ニ非ス故ニ血縁ナシ）	妹ヱキ女薫ノ夫
再従妹	〃　〃〃　長男亡長成ノ女	従弟　父ノ姉亡横田チセ三男
再従弟	〃　妹テル長男亡　ノ長男	父ノ弟亡本宿亨二女フクノ夫
従弟	継母多代妹キヲノ男	従弟　〃　〃三男
	祖母亡キセ甥ノ子	父ノ弟亡本宿亨三女キヨノ夫
	（実ハキセ兄ノ私生子）	実母亡シゲ姉亡ヤスノ夫亡小文治ノ私生子
	前妻亡猪智義兄（実ハ父方伯父ノ男ニテ従兄）	前妻亡　智姉ノブ夫
	柏井　登	〃　〃
	後妻みね兄	後妻みね姉
	水野加以智	〃　弟
	長女笆夫	〃　〃
	大築千里	〃　〃
	二女貞夫公平ノ父	〃　〃
	小倉政二	〃　妹政ノ夫
	養女ハツ（豊川痴癡雄長女）夫	〃　弟
	榊原周次郎	合意ノ親族
	妹亡波夫	
	高瀬四郎	
	異母妹ヨシ長男	
	豊川孝一	

(200)